昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可　昭和卅六年三月一日発行三十六年三月号　（毎月一回一日発行）　創刊大正十三年・通巻四〇六号

川柳雑誌

麻生路郎 ☆ 主宰

三月号

No. 406

Pensoj flugas trans la land-limon

THE SENRYU ZASSHI

川柳雑誌社主催

本社三月句会

—4月本社句会—

"兼題"
桜
ささやき
事件
せいたく

日時 三月七日（火）午後六時

会場 関西会館 ㈦七四〇〇番
大阪市天王寺区上ノ宮町四八
（天王寺電話局東隣り）
道順 市電上本町八丁目下車（北へすぐ東側）
近鉄上本町六丁目南へ約百五十米東側

兼題 「先代」（二句）麻生路郎選
（路郎選に限り七時出句〆切厳守）
「小心」（三句）清水白柳選
「ガラ空き」（三句）小川恒明選
「予想」（三句）真鍋一瓢選

席題 三題（当日発表）

柳話 北川春巣

呈賞 ☆各題天位・☆路郎選天位に木朽洞賞カップ

会費 百円

幹事 柴香・淡舟・いさむ・潮花・文秋・甫佑・狂二・与呂志・白水・水堂・すゝむ・薫風子・水断・柳宏子・舟遊・一三夫

★投句だけの方は郵券三十円
同封（〆切二月五日）

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地
川柳雑誌社句会部
電・住吉㈦六〇八一

会場が変わりました。

日本盛酒坊

灘の清酒 **ニホンサカリ**

和やかに まず一杯

東京酒坊・八重洲口名店街
大阪酒坊・御堂筋道頓堀橋南詰

不朽洞句帖

麻生路郎

右翼が生き生きと脈うっている都会

たこ部屋で明日(あす)なき命思うなり

医師一斉休診

麻雀にいてはるそうな休診日

ああ云えば折う云うだけの政治家よ

色気抜きとなると主張は譲らない

ドヤ街に殺されそうな女いる

仁術に窓口などは要らぬ筈

ドシドシ死刑にしなさいと天の声

川柳雑誌三月号目次

不朽洞句帖……麻生路郎……(3)
名句と難句……麻生路郎……(4)
借景の美……中島生々庵……(16)
眼を失いて……武部香林……(14)
東野大八君へ……高須嘘三味……(12)
羽田を発って……足立春雄……(18)
「美しい」と「きれい」……戸田古方……(39)

句評リレー……文庫・久米雄 甲吉・清生……(26)

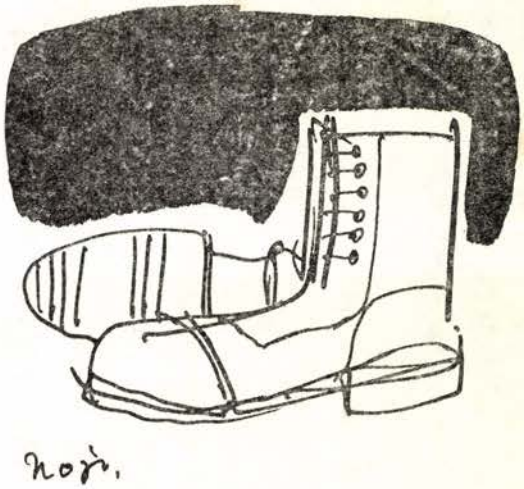
★現代柳人録……(27)
苦勞性二つ……東野大八……(16)
指切り……直原七面山……(31)
絵と川柳で表現する歴史……戸田古方……(34)
苦笑善哉……木山遠二……(34)
★ゆうれいを見た話……ひか平……(20)
★川柳夫婦愛……与呂志……(23)

特集 よくぞ女に生まれける……廣乃・梨里・良子 若菜・阿茶・一栄 清子・〆女……(28)

川雑婦人友の会の集い……(25)
短歌と川柳……冨士野鞍馬……(32)
不朽洞の人々……八木摩天郎……(34)
★……三司氏の巻……(41)

川柳塔……麻生路郎選……(6)
同舟近詠……諸家……(11)
近作柳樽……麻生路郎選……(20)
金泥集……北川春巣選……(33)
各地柳壇……麻生葭乃選……(42)
柳界展望……(40)
入門講座……研究題「灰」……清水白柳……(38)
★不朽洞会から……(41)
一路集「催促」「テンポ」……松江梅里選……(36)
「迷惑」……山根白星選……(37)
★柳樽室……木村水堂選……(46)
▼ペンの散歩……(46)

題字……麻生路郎・表紙……野尻弘



川柳

名句と難句

麻生路郎

〔一二六〕

長生をしてねと母に子守させ

（静　馬）

「長生をしてね」と母へのいたわりの言葉はいいが、

「これから、うちの人にデパートへつきあって貰うの、それから帰りは映画へ寄って来るから、こどもを見ててね」

と言って、サッサと出てゆくのである。

これでは、子守をさすために、長生をしてくれと言われているようで、母親の心の中はまことに穏やかではないのである。

近ごろの家庭の一コマをスナップした穿ち句として辛辣だ。

〔一二七〕

ご期待に添うとは汚職のことらしい

（草　右）

主客ともに、相当酒がまわっている。それでも肝心の要件は忘れられないのか。

「さっき言ったこと、是非頼みますよ。全くあなたがたよりなんですから」

「まあ、私にまかして置いて下さい。ご期待に添うようにしますから」

それから後は聞きとれなかったが、多分汚職のことらしいと言うのである。「ご期待に添う」という上七が、この句のいのちだ。

〔一二八〕

陽は西に小銭と帰る猿まわし

（きさ子）

たそがれ近くなると客も散ってゆくので、猿廻しもそろそろ帰り仕度をはじめる。きょうも予期したほどの儲けがなかったであろう。

ほそぼそとした猿と猿飼いとの二人世帯の安宿へと、小銭をふところにして帰りゆく姿があわれとも思える。

猿廻しは街頭芸人の一種で、猿を飼いならして種々の芸をさせるもの。年の暮から初春にかけて紀州とか木曽の山中から出て、古くは厩の祈祷に廻った祝言職で、めでたいものとされていた。江戸時代には江戸の猿屋町などにたむろして、穢多頭弾左衛門の支配下にあったそうだ。その他、伏見・大阪などにも集団があった。後には次第に芸能化し、猿芝居を組織するものが出て来て、大正年間まではまだ全国的にその姿が見られたが、近ごろではわずかに、寺院などや、公園などの隅で、投げ銭を稼いでいるに過ぎないようだ。

〔一二九〕

トラックを追いかけてみるかんな屑

（堤　人）

かんな屑がトラックを追いかけている風景を、表現技巧によって生かした句である。現実はトラックの突っ走るあはりで、かんな屑が舞い上り、トラックを追いかけているように見えたまでである。作者はヘラヘラなかんな屑がごう然とかまえたトラックを追いかけているように感じ、特に興趣を覚え擬人法で表現したのである。作者のせんさいな感覚が思われる。

〔一三〇〕

だあまって萬才夫婦飯を食う

（宣　介）

舞台一面に笑いをバラまく職業のコンビの夫婦ではあるが、その夫婦の現実生活はそうゲラゲラ笑ってばかりはいられない。だあまって飯を食うている姿が、ホントの彼等夫婦の姿なのである。生活は決してラクではないのである。そうした芸人のウラを巧みに描写している。

〔一三一〕

続・西成界わい

三本立まあ閑人のいることは　（満　潮）

映画館を覗いて見たら、三本立だと言うのに、昼日中からギッシリ満員だ。作者は映画よりも閑人の多いのに驚いたのである。ここらの住人が仕事らしい仕事を持っていないことを、映画館の客筋から類推したのであろう。面白いネライだ。

〔一三二〕

犬ばかり洗って夫婦子が出来ず　（虻　八）

犬を座敷で飼うている夫婦がいる。そのベッドに入れている夫婦すらいる。人間の名前をつけて、わが子並みに扱っている夫婦すらザラにいる。斯うした夫婦には言い合わしたように子がない。この句の夫婦もやはりそれである。子のない夫婦のどことなく心の淋みしさが出ている。

〔一三三〕

ブルトーザーやぼな重さを響かせる　（六　葉）

亀の背のように荒れた凸凹の街路に、ブルドーザーをよく見かけるが、なるほど、異様な動物のようなこの機械がジリジリと進むと何んとも言えない重くるしい地響をさせるものだ。この句はそうした情景を感覚で巧みにとらえている。

押均機は一般に、ブルトーザーと言っているらしいが、正しくはブルドーザー（Bulldozer）である。土破の掘鑿、盛り土、地均らし等を行う万能土木機械、キャタピラ式トラクターの前部に上降傾倒自在の鋼製ブレード（押均板）を取付けてある。

〔一三四〕

割引の樒へ市会議員の名　（文　秋）

都会の葬儀場はいつ行って見ても繁昌だ。今日も、名のある人の告別式があるらしい。ズラリと市会議員の樒が並んでいる。それはおつきあいとPRをかねたものだ。それをウラから覗いて、割引の樒と睨んだところに、この句の面白さがある。

〔一三五〕

孫悟空手頃の雲に腰を掛け　（○　丸）

この句は孫悟空そのものが架空の産物であるだけに童話的な作品として興趣が湧く。作者西島○丸は深川の霊岸町で生れ、四ッ谷西念寺の和尚として昭和三十三年三月十八日に長逝した。行年七五才。明治三十六年から昭和三十三年まで五十余年間、休まずに作品を世におくった稀に見る多作家である。

孫悟空は「西遊記」の主人公で一名孫行者と言われ、石から生れた神通力を持った猿。師の三蔵法師に随行して西天取経の旅に活躍した。「西遊記」は中国の長編小説。明の呉承恩の作だと伝えられている。唐僧玄奘の印度旅行にまつわる伝説に取材した童話的で架空性とユーモアに富む特異な物語である。

〔一三六〕

おいおっさん文句あるかと十八九　（ひか平）

近ごろの十七才は怖い。十八九は強い。電車の中で足を踏まれても、踏まれた方からあやまらなければ事はおさまらない。すぐにプスッとナイフでやられる。そうしたハイティーン心理を描写したもの。「おい、おっさん」が生きている。

〔一三七〕

参観日の着物の柄を子が指図　（七面山）

お父さんは仕事が忙しいという理由で、こどもの参観日には、大てい母親が行くのが定石だ。さて行くとなると、母親は着てゆく着物で一ト苦労する。あれはこの前着て行ったし、これは一寸派手すぎるしと、決定までにはなかなか時間がかかる。

そうなると、近ごろのこどもは黙っていない。

「おかあちゃん、あれを着ていたらいいわ」

と指図をする。時代の推移はこんなところにもある。

〔一三八〕

食べてるのも撮され九月十五日　（八九寸）

「おばあちゃん、お幾つです」

「九十七でさあ」

「まだ、固いものが、かめるんですね」

「へいへい。入れ歯は一本もありませんのや」

と言うところをパチリ一枚カメラにとらえたと言うのであろう。

九月十五日は年寄の日と言って敬老精神復興と新家族倫理樹立を目的とした国民的年中行事の日である。中央社会福祉協議会（現全国社会福祉協議会連合会）が決定して一九五一年以降実施されている。

結婚式場
長生殿
神殿(2)控室(16)宴会場
(和洋9)御待合室・更衣室・美容室・写真室のほか貸衣裳一切を完備しております　●6階
金曜定休
松坂屋
大阪日本橋三

川柳塔

大阪市　土井文蝶

歳かいな咳の薬に胃腸薬
わかってるわかってるとて酒やめず
来年を本屋一ト足先に売り

西宮市　若本多久志

九千万ああ人材のなき我社
御信頼申上げててたまにヒス

大阪市　丸尾潮花

南座を舞妓焔のように出る
満員の顔へ福笹遠慮せず

大阪市　西　いわを

黒頭布女は秘密持って佇ち
女って重たい男じゃまになり
空の色屋根の色工事捗らず

堺市　八木摩天郎

世は変り子は自家用の初詣
逢いたいと云う女あり七十一

岡山市　武部香林

美しいこと積んでもみたし一つずつ
資本家の沈黙机の上に落ち

大阪市　北川春巣

ご用仕舞いの挨拶正月頭も居
貯金箱先ず出す穴を確かめる
週刊誌のクイズに追っかけられて生き
ベレー帽目当てに駅へ出迎える

大阪市　須崎豆秋

夜もすがら達者であった頃の夢
餅一つ食べてもならぬ寝正月
惜しみなき命檜山行の歳
暮れてゆく如き往生したいもの
ニコヨンにさえボーナスがあるものを

ホノルル市　羽佐間柳葉

骨董屋時代に生きたように言う
責任を持たぬ下ッ端よく喋り
月給日足がネオンの街へ向く

堺市　吉田圭井堂

文才が寺も壇家も捨てさせる
病人もごてりゃ長生きさせてくれ
珍らしいから寄ってたかって診てくれる
余ってる人だ雪崩も遠慮せず

防府市　長野井蝉

十二月隣りもとうとうポロを出し
親探す記事に日本の広さ知り
懐手して形勢を傍観し

岡山県　直原七面山

帯しめ直して羽ばたきぬ夜の蝶
お針よりダンスが好きで父無し子
割り切れぬ世に生き水らえて九十一
誰も彼も気短かになる十二月
尻馬に乗って喚いて失職し
小説家くずれ町史を頼まれる

大山寺にて

朱印押す手元に秋の影がさし

大阪市　西森花村

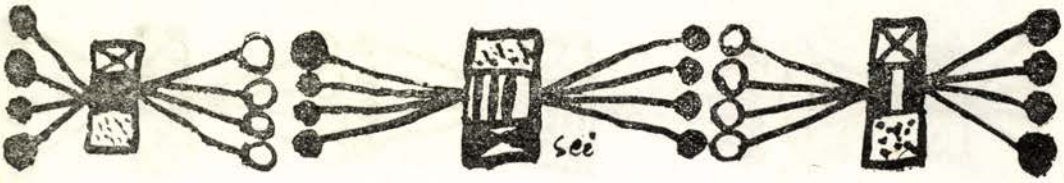
愛想よく美人に集金ことわられ
サンタクロースペコリと広告マッチ呉れ
カス汁をブチマケたよな抽象画

鳥取市　河村日満

元旦の計ずぶとうになると決め
もうすぐに五十ちょいちょい脱線す
書評みな足で書いてるとこをほめ

倉吉市　木村千容

絵馬を画く恵方の宮の禰宜若し



七十五まだ親馬鹿が脱けられず
加賀市　野村味平

大雪になって正月らしくなり
いそがしく名宝展を見て廻り
顔色を見て一封は握らされ
貧乏は承知で嫁になる気なり
大阪市　木村水堂

新春放談その良識が疑われ
師走など感じぬ程の忙しさ
三四日すれば病欠退屈し
高槻市　福田丁路

こんな客あって商売やめられず
衝突墜落地獄の自家用車
自家用車飛ばし我が世の春や春
手口鮮かな巨額のつまみ食い
断り切れず一度だけキッスを許せしとかや
大阪市　真鍋一瓢

母の霊に捧げる享年八十六

あの世では気まま云いなやおばあちゃん
寂の字の下に置かれた母の名よ
一と七日母居た部屋に母が居ぬ
大阪市　後藤梅志

牛のちちを呑ませたこどもばかりなり

大晦日もう呑む金も惜しくなり
米子市　小西雄々

白痴化へカラーテレビで拍車かけ
大股の癖が和服に出る若さ
大阪市　山川阿茶

実行の出来たは年をとっただけ
共喰いやと棒鱈をつまみあげ
世智辛らさ数の子ぬきの祝膳
大阪市　金井文秋

長女結婚

新しい波か涙も見せぬ娘よ
加賀市　那谷光郎

火事跡のように屑屋は積んで置き
財布落した中に質札無事戻り
下関市　桜川不水

カチュウシャの恋とや云わん寒椿
女房と意見が合って寿司にする
鉄骨は曲り大火の夜が明ける
岡山市　浜田久米雄

回り椅子回せばあくびしたくなり
年頃をかかえ花咲く春へ向き
よろめきの心へ赤の交叉点
岡山市　逸見灯竿

睨みっこ今日は笑くぼが邪魔になり
盛装の時の心を続けたし
ゴルフ場野武士の如き姿にて
出雲市　尼　緑之助

ネクタイのゆがみ野人は遠慮せず
倍増へまだスタートにも着けず
初売りの稼ぎを越してバーを出る
鳥取市　杉谷湖山

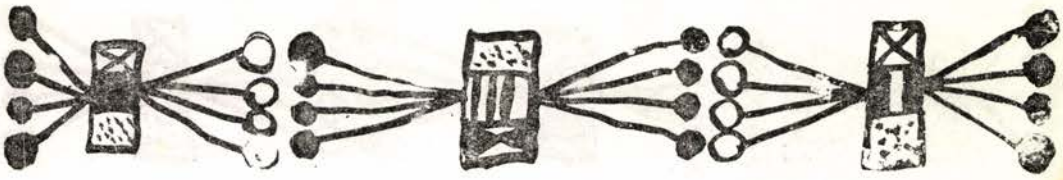
浮世絵の様な姿(なり)して酌ぎに来る
棄てたのか捨てられたのか子と二人
京都市　大鶴喜由

客は恋と思い女はファンと思い
添いもせぬのがちよこちよこと来て女にし
いけすかぬ毛並みと碗腕を組み
奈良県　飯降白香

黙殺へ課長機嫌をとりにきて
内気なの！どこからでてきたことばやら
十年後やっぱり頼りない人でした
岡山県　福島鉄児

年玉でよいおじさんにしてしまい
岡山市　服部十九平

ハイヒール提げて楽屋口から出
リーダーは菜葉服など着ておらず



尼崎市　長谷川三司

からけしを作る焚火の輪も師走
年賀状敵に廻ったのも混り
霜やけが読手にまわるかるた会
うらぶれてめし屋のめしにお茶をかけ
釜ケ崎女も大盛りめしを喰い

広島県　山田季賛

母と寝る楽しさがまだある一年生
アルバムに角帽をきた父がいる

岡山県　田村藤波

民主主義もう草莽の臣でなし
針の穴ほどの事にも右派と左派
歯ブラシをくわえ焚火の輪の一人

児島市　本田恵二朗

たっぷりとくれたチップがホシだった

京都市　松川杜的

前歴は保母おでんやのお女将さん

鳥取市　森本法泉子

年が明けると春斗の字が並び

岡山市　津田麦太楼

インターンの鉢巻だけが板につき
それぞれに目鼻をつけて母しなび
ピケ張って火筒のひびきなど歌い
百姓の見栄は棚田へ耕耘機

堺市　高崎雄声

松茸の匂い判らぬのもさびし
ちぢかめばちぢかむ程に寒くなり
金が人を支配してる温泉場
ターバンのような髪した嫁が来る

島根県　藤井明朗

隠し芸過去の道楽見破られ
三カ日だけは素直に日本髪
湯の宿へ来て老妻はとけ込めず
しおらしい事も言うてる里帰えり

岡山県　永松東岸

気を使いすぎる長女も気にかかり
セクシーな声に一本追加をし

倉敷市　野田素身郎

元日も朝から出てる靴磨
協力を謝してハッパを掛けなおし
仕事始め仕事の勘が鈍っとり
こんできて一人は居づらい喫茶店

大阪市　伊達堰子

無事居ててほしい年賀を読み返し
ふた昔ですなと白髪みつめ合い
福笹の重みも添えて足踏まれ
たまのスキ肉の値上りを聞きながら

尼崎市　坂田東洋男

お年玉集めに二太郎今日も留守
大晦日私も貝になってみたい

大阪市　不二田一三夫

売店廃業
選外というペンだこを頼りにし
今東光氏の本圓寺晋山式へ出席
高僧連のおつむへフラッシュ遠慮せず
不朽洞賞二年連続獲得
グラン・プリぼくも小さな時の人
天使までストして夢が一つ消え
ぬくもって行こうやとデパートへはいり
父すてた母が飲み屋にいるうわさ

兵庫県　酒井ひか平

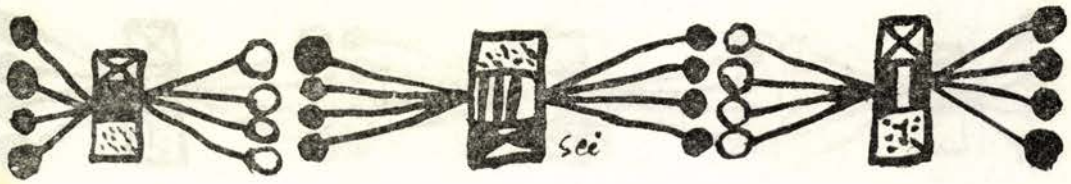
美術価値僧も商魂たくましく

神戸市　丸川初甫

押売りへ主人思いの犬が吠え
初夢を楽しみ薄給にふれず
十代の抵抗リンゴを投げただけ
忍術の様にライターつけて消し

岡山県　池田古心

溜める智恵あっても使う智恵がなく



田を売って行く女房の金使い
大阪府　早川清生

まだものにしてない男よくしゃべり
強盗に自首され駐在所があわて
岡山市　武部若菜

風の神連れて戻った初もうで
身体傷害者新年宴会

ハンディキャップ忘れたように酌ぎ廻り
めしい等のじっと聞き入る舞扇
堺市　辻　圭水

ピンとこぬ数字が国の予算なり
警官も家で正月したかろに
大阪市　児島与呂志

ママさんの貯金が増えたよ池田君
底抜けのお人好しなり夫婦して
ゆれますと気を使いつつ十五年
岡山県　野々口美舟

最後かもしれぬと杖の初詣
ちっぽけな賞与でとりを飼い始め
西宮市　小浜牧人

浮気して雨はいつしか雪となり
お見舞は部屋へ空虚をおいて去に
咳一つ廊下へ洩れて月寒し
大阪市　菱田満秋

饒舌の真実性がうすれてき
不渡りが初出勤を待っていた
縁やっとあった田舎で要る仕度
兵庫県　前川左文字

四十へ何か抵抗してみたく
食堂居間兼寝室へテレビ据え
朝鮮語英語分らず吾平和
大阪市　橘高薫風子

ぬけがらが二つ出来た足袋を脱げば
百合も薔薇も花輪になれば俗っぽし
お父さんは絵本に書いてないことをいう
十二月子供ばかりで飯を食べ
下関市　中村九呂平

三ヵ月入院して
病院の個室じわっとノックする
今年もよろしくと婦長真面目なり
馬鹿ネーと仲居に肝臓からかわれ
本家から貰ったテレビ金を喰い
大阪市　西川晃

鼻水すすり元日も店を開け
良寛になりそこなって古本屋
にんげんて君害獣じゃないかね

釜ヶ崎風景

除夜の鐘バタ屋は屑を拾うてる
鳥取県　田中蛙眠子

テレビ効果演技過重な子に育ち
遅刻するいいわけどてらで考える
岡山市　林葵丘

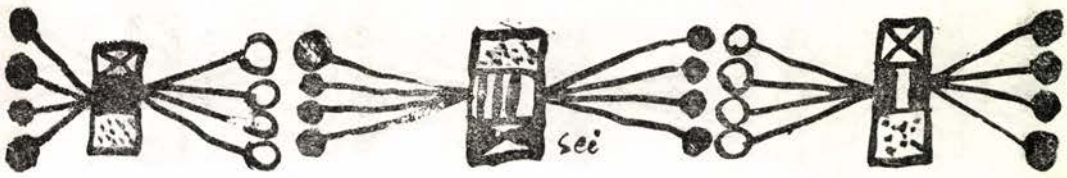
天皇の額ほこり積み色があせ
祖母だけが後生を祈る鐘を打ち
神戸市　仲どんたく

この姿一度したくてスキー行
洋もくをどうやどうやとくれたがり
平田市　久家代仕男

ボーナスを使いはたした不機嫌さ
運転手今日は半被で到く初荷
大根も吊して町の団地族
遺児の名で間貸よろめく未亡人
大阪市　本多柳志

招かざる客へすき焼煮えつまり
初風呂で何かいい事おまへんか
小正月今年も稼ぐ革鞄
出雲市　原独仙

兎も角も牛歩で行こう更年期
お帰りは遅い北風募るのに



転ぶのも楽し婚約者とスキー
岡山市　江　国　幽　谷

スピードを出せ出せ地獄へ続く道
超弩級の弁当箱は麦を詰め
マッチ一箱シュッと云わして中風の手
衝突をせよとはダイヤ組んでなし
岡山市　光　好　陽　子

露路裏でほんとに生きる姿を見
自動車の方が上手に人を縫い
西宮市　野　呂　鵜　汀

受付を無視した客に地位があり
平身低頭課長の前の父
入籍へ惚れて居るかと念を押し
西宮市　樋　口　舟　遊

落日の明日は白紙で陽が昇る
切手シートあたった年賀を読み直し
新潟県　高　野　む　じ　な

一生をメッキで過す暮しむき
クラス会女は強うなって居た
恩師だんだんもみくちゃにされるクラス会
頭下げな気がすまぬ電話口
大阪市　石　倉　旅　風

正直な年賀状書く松の内
ピカピカの着物がさびし美人なり

一月十一日負傷

たつしおの言葉病人からかける
鼻を見ているとも知らぬ見舞客
見どころはちゃんとみていた審査員
寝ていてもなるほど速いカレンダー
大阪市　魚　住　満　潮

続西成界わい（四句）

ぐでんぐでんになって西成いい処
夫婦ケンカ今日は宵からもう寝てる
殺しの現場あさ霧立ちこめて
今晩も男は盗みおんなは売りに出かけたり
大阪府　林　昌　男

嫁はんにしてから散歩忘れたり
成人へ父はだまって酌をする
愛媛県　村　上　旭　童

冬を忘れた顔がいく行く松の内
ねるための布団がなんと豪勢な
倉吉市　大　前　鳴　恍

顔を売るための反対おしまくり
暗算に弱いが雀ほどしゃべり
鳥取市　北　村　三　歩

松の色さえて元旦雪になり
やんわりとした答弁が気にくわず
腰かけのつもりで定年まで勤め
神戸市　傍　島　静　馬

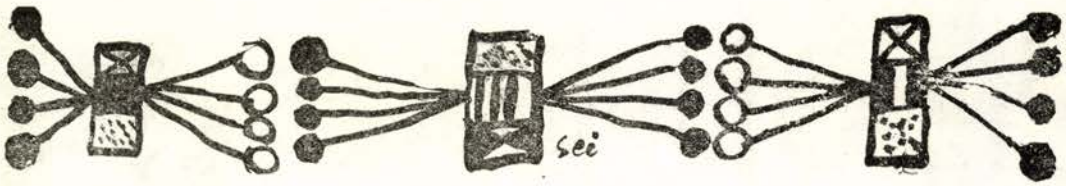
喋るなと云われおしゃべりうずうずし
葬式に名前貸すほど儲うけ出し
お守りを受けた帰りにぶち当り
禿げるより白髪がええといたわられ
自家用族無オーバー主義などほざき
大阪市　河　井　庸　佑

退職へ鶏飼うときめており
窓から首出して新生頼まれる
大阪府　谷　沢　好　祐

ピストルと刀で子等の三ヵ日
およばれで漸く数の子に出会い
物の値も成長さすと言わなんだ
泉大津市　高　津　徹　也

生涯の半ばを聞き手として過ごし
刑事の瞳ドリルの様に突きささり
陣笠へ野良着の鎌が会釈する
愛媛県　楓　柴　光

病人のお粥を子供食べたがり
まだよだれ出している子へ次が出来
爆発をせぬ情熱がもどかしく



二十五回忌兄弟さえも顔見せず
青森市　工藤甲吉

恋や恋雪をかぶって逢いに来る
粉雪の中も無帽の二十代
女の一念は真冬も脛を出し
渡れるものならば二ア人で虹の橋
玉野市　伊原明林

牛の居る貨車へ故郷をふと思い
上役へへらへらと酌ぎまわり
足の裏見せて向うへばかり酌ぎ
べんちゃらを言われ残念賞をうけ
アルバイトだから上役恐わくなし
ストーブへあたってばかり恋もなし
神戸市　室田千尋

花を作るのが生活にておおらかな
半農半漁淡路から出た事がなし
西宮市　鳥本泰

なにげなく触ったとこにニキビあり
見合いには和服とひとり母は決め
豊中市　林夢虹

元日に人を欺く策を練る
金が物言えば「人間て淋しいね」
水仙の花に不貞を責められる
尼崎市　吉本菁風

一人前になると出て行く町工場
ワンウエイなどと都会は不便なり
おっさんがまた読んで居る樹一郎
ラッシュラッシュこれでも赤字ですと云う
西宮市　山本一傘

こんな事位は悪人気にしない
大阪市　今西生萱

結構なくらしと云われあくび出る
お古しかないらし清瀬又かつぎ
京都市　室井八九寸

多忙に取紛れが炬燵に丸う居る
赤電話へ行かず引越し借りに来る
奈良市　内海敬太

初日の出雑煮の用意出来たらし
晩手の子夫婦まだまだ苦労する

同舟近詠

須坂市　高峰柳児

元旦の風日の丸が揺れるだけ
新薬を試して老らく続けてい

元日の静けさ歩調踏みしめる
敦賀市　船木夢考

何回も来た人と来たふぐ料理
大雪を降らした町のよい月夜
大阪市　石田沐天

計算の通りと汚吏の不貞くされ
財閥の一人に奴をテレビで見
わかったわかったと黙殺されている
自殺者の親ごに問えば理由なし
今治市　長野文庫

本売った棚へ自慢の壺を置き
悪智恵を実話雑誌がつけてくれ
転任の度に本棚小さくなり
左翼右翼仲よく並ぶ棚の本
和歌山市　秋月宏方

馬の足位で終る人生か
ふるさとの匂い落葉を踏む匂い
新居浜市　月原宵明

パチンコへエプロン掛けたままはプロ
ウインキーの賀春茶の間でぶら下り
秘書が言う通りに強肝剤をのみ
芸術と言う素っ裸しみじみ
碁仇を通すは腹切場に似たる部屋

不具川柳について

東野大八君へ

―『風流・人間横丁』読後感

高須啞三味

ボクは、昨年十月、京都の「平安」誌へ「不具者の悩みを」なる一文を寄せた。それは、ボクの主治医（虎の門病院、整形外科部長御巫先生）が「いま君が、どんなことで悩んでいるか、どんどん訴えてくれなくては、我々には治療法がわからないんだよ。病人のほんとうの悩みは、どんな名医にだってわからないのだ。病人自身の訴えによって、医者はそこへ手を打って行くのだよ」と言い、更に言葉を強めて「だから、医者はほんとうに病人のすべてを知るためには、自らあらゆる病気をしてみなくてはならないのだし、不具者の悩みは、不具者になってみなくてはわからないのだよ」と述懐されたことに暗示されて、不具者の悩みを、川柳によって訴えようと決意し、その第一稿として、書いたものである。

そして、その初めの部分に「現代川柳界で腕一本切ってとられたのは、東野大八君とボクとの二人だけであろう。ところが、大八君は、自分の隻腕の句を、ほとんど発表されていない。それは〃不具をひけらかす〃ことに嫌悪を感じてであろうと思う」と書いたが、それはボクのカブン（寡聞）いやカドク（寡読）ゆえの誤まりであったことを、こんど川柳雑誌社から出版された『風流・人間横丁』で知って、赤面した。

『風流・人間横丁』は、東野大八君が、戦後十三年間『川柳雑誌』に書き続けている川柳随筆を、昨年九月の『川柳雑誌』誌寿四〇〇号自祝記念事業の一環として、出版されたものであるが、それが本になるまで読まなかったボクは、まさにカドクのそしりはまぬがれないであろう。

『風流・人間横丁』は、東野君が毎月書いた百数十編中から自選した八十六編で編まれているが、その後部十九編は「川柳私見」として柳論をまとめているので、随筆は六十七編である。しかも、その中に何らかの形で自分の不具を表明したものが十編あり、「川柳私見」の中にも「片輪者の川柳」のように、それを主題にしたものがあるので、全巻中十一編は不具について書いていることになる。これでは「不具について嫌悪を感じている」とは言えない。明らかにボクの不明である。

『風流・人間横丁』を読めばわかるが、東野君とボクは、大陸で何回か会っている。ボクも北京には四、五回遊んでいるが、陣居が行ってから、ボクは行っていないので陣居・大八時代の北京は知らない。ボクがおもに東野君と会ったのは、奉天、新京で、たいてい石原君、大井君らと同席であった。彼が「片輪者の川柳」の中に書いている奉天の川柳会というのは、たまたま其処にボクが姿を見せたのではなく、まだ奉天の満鉄にいた石原君が主催で開いてくれた、ボクの歓迎川柳会だったのである。そこで、彼の言う「不具風詠否定」の「啞三味訓話」が、一席ブタれたのであるが、それは単なる「思いつき」のインスタント訓話ではなく、かねてボクの抱懐している川柳主張の一端を述べたもので、それにはいいキッカケがあったのだ。

ボクが大陸に行ったのは、先ず大連で、そこに家を構えて、各地へ出張した。だから、大連をはじめ奉天、新京、ハルビン、撫順と行く先々で、きまって歓迎川柳会をやってくれたが、そのボクに与えられる題が、申し合わせたように「啞」だったので、不具川柳ぎらいのボクは、うんざりした。そこで、奉天川柳会でも、また「啞」を選するハメになったのを機会に、選句披講に先だって、

「ボクは不具川柳はきらいです。五体健全のものが、不具を川柳にするのは、たいていヤユかチョウ笑です。たまに同情的なものがあっても、それは表面的観測で、何ら実感を伴っていません。歌人は居ながらにして名所を知る的風詠で、こしらえものに過ぎません。ボクは、今までに啞という題詠の選を、何十回となくやりましたが、未だかつて、これはという感吟にぶつかりません。川柳家が、ほんとうに啞をしらないからです。また親族・知己に不具者のいられる方は、不具を詠んだ川柳を見たら、たいてい不愉快になられるでしょう。従って、ボクは継母・継父の句も好きではありません」

というような意味のことを話した。それが、東野君いうところの「啞三味訓話」であって、当時満鉄弘報課の課員であった石原君は、その課長だった傑物（名は忘れたが、後に華北交通の副総裁になった人）がビッコだったので、このボクの説にひどく共鳴して、ボク歓迎の辞と共に、賛成演説をブッてくれたものだった。

これは、東野君も言う通り「二むかしも、もっと前」（約二十五年前）の話なのだが、その「啞三味訓話を一気に打ち破って」隻手の句を発表したという東野君も、当時のボクと同様、五体健全、従って精神も健全な、青年であった。それが、今は共に隻手の不具者である。二十五年前きらった不具川柳も、今は自らの実感・悩み・訴えとして詠わねばならぬ境涯となって、前説をひるがえすのではなく、前説の上に立って、前人未詠の体験不具川柳を詠い上げねばならぬ我々なのである。

ひがむまいそう思うのがひがみだが　　大八

こう彼は詠っている。そして「不具者の心には、何よりも同情

が一番イヤなもんなんです。不具者への同情は、総じてそのまま好奇へと横すべりしやすいものです。（中略）私とて、やはり手離しのそんな同情は寂しい」と、しみじみ言っている。同感である。

いたわりへ甘えきれぬも不具の意地　　唖三味

「それがいけない。なぜもっと甘えないのだ。親は子供に甘えられてうれしがるように、友情は友達に甘えていいのだ。その意地が、友情を邪魔するよ」と、塚越迷亭君や三城信子さんは歯がゆがってくれるが、そうなりきるには、まだ年季が足りない。

いたわりも耳馴れてもう不具年余　　唖三味

ボクの不具生活は、この二月でようやく二年目で、赤の他人のいたわりには、耳馴れた顔をしていられても、身近な者のいたわりには、未だに抵抗を感じるのは、どうした神経であろうか？

松山療養所の川崎百楠君は、見舞いに行った東野君と、いろいろ話した後、不具川柳のことについて、

「ボクは不具者だから、不具の句をどんどん作っていくよ。生命をかけて来た、その体験の昨日と明日を、ぐっとつかみとって、句にたたき出さなくちゃあ、誰がそうかと言ってくれるんだい」

と、コーフンして語ったと言う。大いに同感で、ボクの「平安」への原稿も、その言葉に尽きていると言える。「私は、この彼の言葉でホッとした。自分の句は隻手の句は、そのままでよかったのだ。と」と彼は書いているが、二十五年前の「唖三味訓話」から昨年の「不具者の悩みを」までのヘダタリが、ボクの身体に生じた変化に伴って、変わったボクの思想で、もちろん東野君には判ってもらえると思うが、先のボクのカドクの不明を、東野君に詫びたく、この「風流・人間横丁」読後感を、本誌に寄せるゆえんである。

妻の出す両腕あったころの服　　百楠

片腕のわが身へ妻の顔も泣き　　大八

左袖こっちも出せと孫の無理　　唖三味

ボクは、川崎百楠君を全く知らないので、その人の句も、東野君の書いた右の一句しか知らないが、同悩の川柳家として、もっと沢山、同君の句を知りたい。

「風流・人間横丁」の中で、ボクの最も打たれたのは「母と子の話」である。――復員した彼、げっそりやせて、見る影もない彼が母の前に立った時、ブラリと下った片袖に、じっと目をすえて、彼の母は、

「片手はどこへやったんや、アホウ、貰ってこい、出すときは、みんなそろえて出したんや」

と、大粒の涙をこぼして、絶叫した。母の泣くのを見たのは、後にも先にも、このときだけだった。片輪にされた子を目にする母の屈辱は、見る影もないわが子への哀切となった。――という一節を読んだ時は、ボクは思わず落涙した。

しあわせのことに、ボクの母は早く世を去ったので、ボクはこういう不幸はせずに済んだが、母代りのボクの姉は「片輪になった弟を見るのはイヤだ」と、病院にも来ず、ボクが一先ず退院して、息子の家から通院しはじめた十日後に、とうとう片輪のボクを見ずに死んでしまった。肉親の者が片輪になる悲痛さは、やっぱりそういう肉親を持たなくては、わからないことであろう。

姉の死顔（カオ）片手拝みの目にぼやけ　　唖三味

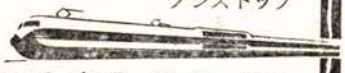
隻手では抱いてやれない姉の骨壺（コツ）

「許昌の腕」も、彼と同じ身内の痛さで、ボクは読んだ。許昌というのは、彼の野戦病院のあった所で、其処で彼は左腕を切断されたのだが――彼の傍を、二人の男が担架をになって行った。よく見ると、それに乗っているのは、一山ほどの人間の足や手であった。つねったら「痛い」と言いそうな毛ズネや、何かをにぎりそうにしている柔かい手もあった。「おれの片手も、ここにあるのか」と思ったとき、寒い風のようなものが、生々しい肩口から胸底を吹きぬけてきた。運ばれていった多くの手足は、病院の裏庭のアカシアの大木の下に埋められた。彼は歩けるようになると、いつもそのアカシアの下に足を運んだ。寒々とした一本の杭がそこに立っていて、彼の目にいつも何か問いかけるように白々と寂しげだった。――という描写は、痛ましい。死んだ自分が埋められるのは、人間誰も知らずに済む。だが、自分自身は生きていて、生身の自分の一部分が、自分から離れて、土にかえって行く。これまた経験したものでなければ判らない悲痛さである。

ボクは事故の現場から、救急車で東京女子医大に運ばれて、そこの外科部で、その日のうちに片腕を、ほとんど付け根から切断され、そのままそこの病室に入院してしまったのだが、隻手になったことを数日間は知らなかった。ボクのショックを考慮して、担当医師が周囲の人々に口止めし、適当の時に自分が話してくれたのだが、それでも、ボクはしばらく口がきけないくらい動揺した。その後で「そのボクの隻腕は？」と聞いてみたが、誰も聞こえないフリをして、返事をしてくれなかった。ずっと後になって、ボクの手術に立会ったという小さい可愛い看護婦の口から「私は、切り取ったアナタの片腕を、センセイから受取ったが、とても重いのに驚いた」という話を聞いた。その後、ボクは大体健康になったが、体重はどうしても前より一貫目（約四キロ）足りないところをみると、ボクの片腕は凡そ一貫目あったのであろう。だが、その片腕がどう処理されたか、ついに病院の誰からも聞くことは出来なかった。

春風の中をわが手の墓へ佇ち　　大八

大阪―名古屋 2時間27分
ノンストップ



近鉄特急

大阪上本町発	7.00	8.00	9.00
	11.00	13.00	15.00
	17.00	18.00	20.00
近鉄名古屋発	7.25	8.25	9.25
	11.25	13.25	15.25
	17.25	18.25	20.00

ほかに 大阪・名古屋連絡
伊勢ゆき特急運転
座席指定 特急券
お求めは ご乗車の5日前から
近畿日本鉄道

大陸に残る隻手も寂しかろ

その東野君の「許昌」の代わりに、ボクには「市谷」がある。出社するボクを、送ってやろうと車を出してくれた次男とならんで、ボクは運転席の左側に乗っていた。「アッ、車が倒れるぞ」と次男が叫んだが、そのトタンもう自動車は左に横転していた。其処は、新宿から市谷へ抜ける一号路線のロータリーであったが、その時、ボクは右手で左腕の付け根のところを抱えた姿勢のまま、舗装道路と自動車の間を、自動車が人道に乗り上げて止るまで五、六メートル引きずられたのである。その後ときたま、タクシーで其処を通るが、ボクはその度に車が外側に傾くのを意識して、身体を硬くする。身体が硬直すると、ボクの左腕はキューッと痛くなるのである。

事故の場所急救サイレン聞

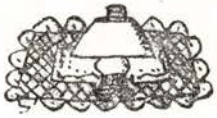
えそう　　唖三味

なお「親の感慨」の中で、東野君は「参観日だからと言われても、私は決して学校へは行かない、子供たちが片輪者の子だと、級友たちに知らせたくないからだ」と書いている。ボクの息子たちはもう大きいので、そういう配慮は、余りしないで済んだが、次男の嫁の叔父に、東野君同様戦傷で隻手になった人がいて、その一人息子が、とても父親の片輪を恥ずかしがり、学校には来るな、友達には逢ってくれるな、と父親を苦しめていたが、親戚の一人がこんど新しく隻手になったと知って、

「お父さん、よかったねェ、節子姉さん（嫁の名）のお父さんも、隻手になったんだってねェ、仲間があれば恥ずかしくないやねェ」

と、すっかり朗らかになり、この頃では、父親の隻手を余り苦にしなくなったと聞いて、子供の心理のおかしさもさることながら、たとい子供一人でも、ボクが隻手になってよろこんでいると知っては、ボクも浮かばれるというものである。この一朗話を東野君に贈って、この妙な「風流・人間横丁」読後感を終ろう。

× ×



眼を失いて

―川柳する生き甲斐

武部香林

よくすいている銭湯の流し場で、誰か私に触れたものがある。わずかに二秒ほどであるがこの人は盲人だなと直感した。

お眼の悪いお方ですかと尋ねて見ると果してそうですと言ったのがきっかけとなり、家へも訪ねて来られ、六才の時から三十年に渡る盲人のベテランなる事、身体障害者の分会副会長で会員の善導に努めている事など体験も聞かされて私も入会する事にした。

住所氏名を膝の上に点字機を乗せてポツンポツンと打ってから指先で読み返す盲人の世界を初めてのぞいた。市内に沢山の組織を持つ身体障害者の会員の新年会が催されるので行かないかと誘われ松もとれない中を出かけてみると役員計りの集まりだったが、紹介されて半日を愉快に過すことが出来た。知事の祝辞から始まり弁護士という左腕の無い人、義足の人たち交る交る挨拶をする。席に並ぶ人達はみなそれぞれ不具を克服して生き抜いている声である。妙齢の人や婦人連が立ち働いて折詰や銚子盃を運んで来る。いちいち酌もして廻るのであるが、それが皆左右いずれかの手や腕が他人のようにブラ下っているのである。

ほがらかな立ち振舞いでいるが、隣席の人のふと洩らしたのは「何度死のうと思ったかわかりません」と、恐らくこの席に居る殆んどが肉体的精神的の死線を乗り越えて来たのだという事は想像に難くない。しかし皆元気に溢れ会員の先端に立っているのである。

風呂で会ったUさんは白い杖さえあれば何処へでも出かけて行く。飯も焚けば惱める人を導き教え滝の行もした。私に「一人で歩く稽古をして見なさい人を頼るといつ迄も剛れない」と言う。電車でマッサージに出かける芸当も見えざる世界だけがもつ鋭敏な感覚の働きかと思わざるを得ない。若し道を間違えたときは立ち止まってポンポン手を叩いて音がどちらへ流れるかを儲める、右に折れたか左に間違えたかを判断して元の辻へ後戻りするのだそうである。一緒に歩いたが足の早いのには驚いた。とに角こうした人達に接しその生活意欲の壮たるには改めて心の視野の開くのを覚えた。

新米のめくらは風につき当り。まだ一人歩けた頃の駄作である。

眼があるから見えると言うより、光があるから見えるのだと、いちいち意識して暮す人は無いだろう。思って見て光りの眼に及ぼす影響という事を眼科はあまり気にかけて居ない様に思う。五年前宴会の席上で俄かに視野が霞んでから驚いて病院にかけつけたのだが三人の医員に旧式の直像鏡で学用患者のように長時間覗かれたのには先ず致命的の苦痛を背負わされたのである。十二度の老眼鏡が間に合っていたのだが、その直後から強度の羞明（まぶしい事）が始まり視力ばかり落ちに落ちてしまった。病院の階段が一枚の板に見え奈落の底を覗いたような恐怖を覚え蹈跟として門を出たのである。この羞明さえ起らなかったなら、どれ程苦痛を軽くしたであろう。道の高低もわからず靴やズボンを泥にまぶした事も度々だ。ようやく黒眼鏡でわずかにごまかし一年四カ月セールスを続けた。複雑な不安感と減退してゆく視力に加えて強度の羞明の三重苦に鞭打ち乍ら会社への帰途、交通地獄国道二十六号線で夕陽に目が眩んでオートバイにはねられた。幸にして軽傷で済んだけれど眼の方が二カ月後には容易ならぬ症状を来たし遂に阪大の受診を乞い慢性緑内障の診断を受けた。とも角手術する事になったがそれ迄の永らくを惨憺たる思いに明け暮れた。

入院前後は電車をやめて車にし

てもらった。すべての安定を失いこの身を出来る丈刺戟から守ってもらいたい一心だった。

自分の仕事は色彩を専門的に見分けせねばならぬのだが、既に交通信号の色さえ判らず、人の背後について歩道を渡りホッとする始末で食卓に向っても色や形を見てこそ美味いものなのである、電灯が反射して皿も茶碗も一個の白となって目に飛び込む。室内の明りをあぶても無いこうでも無いと調節するがどうにもうまくいかない。自分の家ではそれでも世話して貰って食べられるが大勢で鍋をつついたり、小皿に取り分けるなどの科さにはお手あげで、何を挾んでいるのやら宴会の関東煮きにコンニャクばかりはさみ上げた事もある。

又スピードを出して走り抜ける車にも肝を冷やした、騒音そのものにも人知れず神経をすり減らされた。

視力検査で明るい窓に立たされたり白い壁に向かう事は患部である眼を刺戟する計りか私の場合は見えなくなるのである。曇天で読めるものが晴天で見えないと言う反対の現象の起る患者への考慮がどうも払われていると思えない。光線と眼とは絶体不離の関係にあり乍らゆるがせないのは治療する側が健康者である故でもあろう。眼科学者で最近光りの研究をしている話も耳にはしているのだが。

入院の前の日まで大阪の北辺から南は堺まで往復の足を運んだがお得意先で受取った約手の金額を老眼鏡と黒眼鏡拡大鏡の三つを頼りに確かめて会社へ渡したのが最後の仕事だった。そのときは視野も極度に狭少既に眼前に輪を見るに至ったのである。気力だけが身体を支え川柳への情熱が日々の心を支えてくれた事は倖せと思っている。

眼科の権威阪大の宇山博士を紹介されて、今度は何の苦痛も無く診て貰う事が出来た。手術も成功して眼の前の輪も消えた。入院中はむしろ明るい気持で日を送った病室担当の東医師の熱心と退院後もしばしば面倒を見てもらった。その親切さは病める心をどれだけ温ため勇気付けられたかわからない。

自宅静養の三ヵ月を騒音地獄にかき廻されなかったなら手術時までの視力には帰れるものと思っていた。総てがわれに幸してくれず睡眠不足と神経疲労によるノイローゼに音響の刺戟から来た内耳性の病的変化に人に話しても判って貰えない苦痛は深夜の床に転々反側した。一年間に元日以外休まなかった裏の工場が徹夜徹夜作業によって、ブリキを叩く音、ドスンドスン響いて来る機械の音、ガラス戸を揺さぶり寝床に震動を伝えるので安眠も静養ものかはこれでもか、これでもかと視力の低下に拍車をかけて行った。

三ヵ月経てば会社にも出られる？　その希望は空しく消えて三十一年の師走、寝もやらず考えたらしい妻もことごとく諦めた様子、私と同じ心境を話し合ったがせめてもう一度だけ見えたならと歎くのを、もうそれは思って呉れるなと私の胸は平静に帰っていたのである。

ただ緑内障の再発は眼球抉出の恐怖があるのでその頃から鎮静剤の助けを借る事を覚えたが之は出来る丈抑制した。

思いがけなく御病後の路郎先生が林さんを伴なってお見舞にお越し下さったのには洵に恐縮した。その時白い杖を持つ事を仰言って下さった。一人歩きの出来た頃にも「人目を気にかけずよく注意して歩き給え」と適切な御注意もいただき心に銘じている。

白い杖は大阪の区役所でも上げますよと言われたのだが正直なところまだその心になっていなかった。そよ風にも足のよろめく思いの新米は人間の杖が頼りなのだ。片眼が悪くてさえコップの水が溢れる、両眼をやられれば身体全体の重心が失われる。しかしこれは年と共に少しずつ馴れる事が出来た。

帰郷によって息づまる大都会の騒音や、乾燥した機械の音響からは逃れる事が出来、清澄な空気と安眠とによって神経もおさまってゆく様子で街に出かけても動揺を覚えずなった。だが、折角の故里も手には触れず四十年の変遷を知る由もないが春の匂い、秋のけはい、小鳥の囀ずりは忘我のひと時を与えてくれる。

帰郷して初めての風呂へ甥が案内してくれたが道々「左へ曲ります、国道を西に横切りますと山砲隊の観測兵は説明してくれる。浴場の様子も詳しくメートル法による軍隊式でズレもなく私の脳裡へ図面を描いてくれたのは先ずうれしかった。嬉しいと言えば大阪以来乗り物で席を譲って下さった人々、乗務員の人達のやさしいいたわり、又柳友諸氏の御厚情を心から感謝せずにはいられない。

Uさんにも勧められて白い杖を貰う事にして二人で市役所へ出かけたがお役所の機構はそんな簡単なものではなかった、もう無くてもよいと思っている。

点字なども若ければ全科程を習得せねばなるまいが今私の必要とする点字訳は極めて少なく、私の眼で読み眼で書き馴れたものの方が遙かに便利な気がする。

一眼と言いましてと、お見舞の言葉にも私の容易ならざる不幸を認められる。視野を持たぬ私には心に写る視野のみが残されている。子供の時からの盲人に比してはるかにそれは広大であると言えよう。

老妻の杖に頼り柳誌其他毎日読んでもらい、川柳する事を日々の生甲斐としている。

人間の苦悩から脱却する為にはみずから、「苦」に没入する事を覚ったが、我々たる峻嶮がいく重にも立ちはだかっている。私はそれを飛越え超越した。「無」に達するための懸命の努力を惜しんではならぬと思っている。

地ひびきの国道妻の手を信じ

香林

昭和三六・一・三一記

スマートで
着心地良い
O.S.Kの
紳士服
各地特約店に有り

苦労性二つ

東野大八

テレビドラマ

冬の夜長のつれづれによくテレビをみる。テレビの夜はドラマものだが、さっぱりこれが面白くない。ことに民間ドラマの三十分ものになるとそれがひどい。コマーシャルがふんだんに飛出すので、立ち見広告の間から紙芝居でも見てるようだ。こんなわけだから、ヘタなドラマより舞台中継の方がなんぼ見応えがあるかわからない。

大体が舞台中継というものは場面の転換がにぶくて構成が平板、テムポもゆるい。こういう点からテレビドラマの誕生となったわけだ。なるほどテレビ向きに作るんだからカットも細かく全体からすれば流動感もある。ところが別口に色つきシネスコの映画があるせいか、さっぱりコクがなくチャチでとんと感銘がうすい。

「テレビドラマは時間が短かすぎる」

「製作費も映画にくらべると格安なんだ」

てなことを製作者たちはいう。

眼のカタキの映画が出たからいうのじゃあないが、かつての無声映画は四巻ものから二巻だった。しかもその中には沢山の字幕（会話）の一つ一つが一コマずつくっついていた。トーキーじゃないからフィルムが説明していくわけだ。そうした分を差し引くと正味画面の分は、中味の半分、つまり四十分ものなら二十分動く画面になる。

「ハリケンハッチ」や「ジゴマ」のコマ切れ連載映画になるとまだ少ない。その中のチャップリンの傑作「担え銃」なぞはたった二巻だったが、その感銘はオールドファンの脳裡に今もまざまざと残っている。

こういう風に判断するとテレビドラマの時間制限がつまらなくさせている、なぞという言いわけは通らない。しかも今のテレビにはビデオテープという新威力が加わり映画手法も可能なのだ。

ところがその映画の方だが、現在テレビに一大恐こうをきたしているそうだが、この恐怖はゼニのかからないすべてのニュース百科や娯楽や劇が家族そろってわが家で見られるという利点にある。つまらなければダイアルを回せばよいのだ。退屈さと興味の度合いが、経済観念でたやすく画面を転換させるところが強味になっている。

漫才や人殺し、歌やニュース解説の中にはさまるドラマ、そういうところの見きわめにも、今後のドラマの性格が出てきそうに思う。角力や野球だけが面白い、というテレビは、もっとしっかりした面白いドラマを作るように考えてもらいたい。

お金とこども

「このごろのこどもはいくらくれる、とすぐ口に出していう。パパのクツを毎朝みがいているので感心したら、こんどの修学旅行のアルバイトだ、とこうなんです」

と近所の奥さんがコボしていた。そこであるPTAの会でこのことについてさる校長さんにきいてみたら、報酬をねだる精神はいけないことではない、むしろ正当な要求ともいえる、というお答えだった。

僕の住んでいる町の話だが、小さい子どもが届けものの使いでよくやってくる。家にお菓子でもあれば世話ないが、それがない場合は十円玉を紙にくるんでお駄賃に出す。その子にやるのではなくて、こちら側ではその子への親への義理だてなのである。帰ったその子が〝これを頂いた〟と親たちにいう子ほどカンシンな子になる。それが黙ってしまいこんだきりになると、悪いこどもになってしまう。こどもをはさんで双方の親が、顔を合せたとき、改めてその礼ごとが話や挨拶に出てこなければ具合が悪いのである。しかし子供の側からすると、そんなやりとりには関係はない。自分にもらったのだからお母ちゃんにいう必要はない、その判断が大人の側にわかると重大なシツケの問題になり意味がちがってくる。

どうもわれわれのような年配者になると子供は親への奉仕の精神で動いてもらおうとの下心がつよいようだ。用をいいつけるたびに、五円頂戴、十円おくれではどうしても感じの悪い子だ、との気持が先にたち、時にはハラも立ってくる。

われわれのこどものころは、お金は尊く粗末にしてはいけないときびしく教育されてきた。今考えるとこうしたシツケがお金の価値判断から遠いものにされる結果を招いた。その点からすると今の子供たちの方がお金の収合いに近いところにいる。要はどちらが処生上子供と金の関柄が正しいのであるか、ということになるが、肩をたたいても十円、タバコ一つの使いにも五円では、かえって金銭に対する子供の意識を逆に、金の値打ちのないものにしはしないか、それが心配になる。皆さまいかがです？

× ×

借景の美

―二月句会の柳話から

中島生々庵

毎年の慣わしとは言い乍ら、十二月のあわただしさの中で、新春に対する心構えのアンケートに答案を書いたり、そらぞらしい年賀状を書いたりと言う事は何としてもピンと来ないものであります。やっぱり正月は正月になってからでないと周囲に向ってとけ込むのも、又は周囲から受取る気分にしても何となくそぐわないものであります。とりもなおさず正月と言う環境が大切な要素となるものであり、路郎先生の「**凡聖一如元旦のこころしる**」がしみじみと味わえる次第であります。屠蘇の味だけでなく心新らたになって読むもの聞くものすべてが何となく普通の月と違った味合いがするのが正月気分と言うものであります。

ところが近年だんだんその正月

気分が味気ないものになってきて、門松も廃止せよ年賀状も止めろと何事にも簡素化運動が普及されて参って来てもおりますが、年に一度の正月を折り目として世の中の万般ことごとくが改まってすべての日本人が「昨日の鬼が礼に来る」元旦を迎えたくなるのも、長い民族の古い習俗の力とでも言うのでしょうか。皆様におかれてもいろいろと感慨を新らたになさった事と思います。私の様に老年になりましても、老人は老人なりに頭の細胞が正月らしく蘇りまして何かにつけて感受性も亢って来るものであります。今年は前以って予定を立てまして私の職域に関係した本も二三冊読み上げましたが、今申上げた新鮮な感受性の作用とでも申しますか大変得るところがありました。こうした職業的の堅い本以外にも一寸した日刊新聞の記事とか、テレビに出て来る話題の端々とか言ったものにでも妙に心引かれるものがありました。その中で、川柳人として或は一個の社会人として一方ならず教えられたりさとされたりしたものが相当にあったがその中から二つ三つをメモ的にお話申上げて私の今年の正月気分のお裾分けとして見たいと思います。今更正月気分でもないものだとお叱りもあるかも知れませんし、勿論皆様もお読みになったりお聞きになって居られる事柄が多いと思いますが、も一度味合いなおすお気持ちでお聞き下されば幸いに存じます。

正月四日附の新聞に載って居た記事に、カイロの占星師エル・ミナウイ氏が一九六一年を占って「今年はアフリカ、中東、ベルリン問題をきっかけに春か初夏あたりに第三次大戦が突然にぽっ発する」と発表したのがありました。この占星師はその昔日本軍の真珠湾奇襲攻撃を予言して的中さした有名な男であると言うのです。私の様に実験科学の教育でたたきこまれた者にとりましては、こうした星占の予言と言う様な事よりも月世界への交通路が開けそうだとか、ソ連から太平洋の目標に弾丸が命中するとかの話が理解し易いのでありますし、世の中の科学が素ばらしく発達した今日そんな迷信はご免こうむると行きたいところでありますが、偽りのない私の心持ちから申しますと、九星、周易、観相、姓名学等と言うものを噛んではき出すように非科学的呼ばわりするよりも、迷信は迷信であり乍ら、たいして社会に混惑を来たさせない程度のものなら、この乾燥しきった世の中の事だし、一基の盛花の様にむしろ愛される存在として認めてもいいではないかと思って居る一人であります。と申しますのは元来迷信でないと称せられるものでもその時代時代によって姿を変えて迷信の域に没入してゆくものがあるからであります。裏返して言えば今日迷信と称せられて居るものが、将来科学の進歩によっては迷信でなかったと証明される場合もあるからであります。人世に夢を持てと言われますが、夢と迷信とは本質に於て異って居りますが又一脈のつながりも否定出来ないと思います。夢にもいろいろあって今日大問題となっている深沢七郎作「風流夢譚」の様な夢は始末に悪いのでありますが宮城マリ子が唄う「ガード下のくつみがき」で空腹よりも、寒さよりも、夢のないのがかなしいと歌うあの夢。迷信の中にも亦これに似た掬すべき可憐な迷信もあるとすれば私は歓迎したい気持ちの私であります。

こえて正月十五日からの相撲初場所も中日を迎えた或る日、観客席の升田名人に対して放送記者が、相撲を将棋にたとえてきびしい勝負の世界の事をいろいろ質問しているのがテレビに現われました。升田名人曰く「勝負に勝つと言う事は第一に運だ」と言う。私は一寸自分の耳を疑う程に名人の言葉を名人らしくない事を言われたものと不思議に思ったのです。しかし次の言葉を聞いて居ると「運と言うものは精進の結果として開いて来るもので絶対に棚ボタ式に普段の精進なくして開いて来るものではない。又勝つためには全力を傾けよとよく言われるが、この全力を出すと言う事も日頃の精進がなくては出事ない事である。従って勝運を得ることと、自分の持つ全力を出し尽すと言う事が勝負に勝つと言う事になるのだが、これは並大抵な困難ではない事を知るべきである。技術が上手下手等と言う事は第二義第三義の要因でしかない。」あの名人にして日頃の精進の大切さをこの様に説かれるのを聞いて、私はコッンと考え込んで終わざるを得ませんでした。それから数日すると、これと同じ様な内容の随筆を犬養道子さんが朝日新聞に書いて居られました。

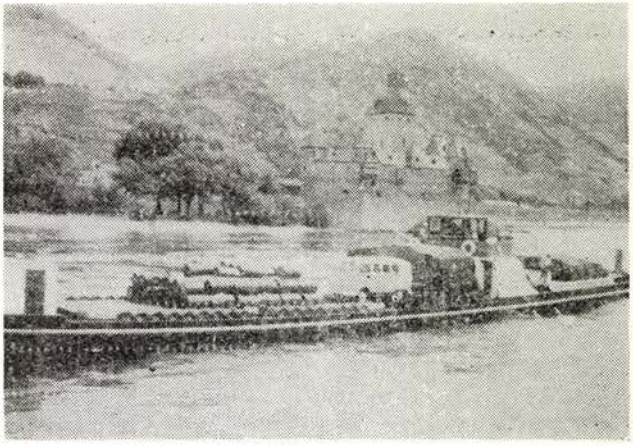
東京四谷塩町にお梅さんと言う大変うまい料理を食べさせると昔から定評のあるおばあさんが居る。彼女は料理の道を極めようと決心した若い頃、十一ヵ月間東京で働いてためたお金で一ヵ月間は関西に行き、今年は一月、来年は二月、その次は三月と月ごとの季節料理を関西の板前の名人がどの様にこなすかを学びに行った。即ち彼女の作る料理は料理の基礎修業の上にさらに十二年間の蓄積が加えられたその結果である。自分は一夕このおばあさんに「嫁菜ごはん」を食べさして貰ってその味あいが飛び切りなのに驚いて料理法を尋ねて見ると「ゆんべ二時半にゆでまして、あけ方におもしを置いた嫁菜が丁度今夕いいかげんになりました」と答えて呉れたと言うのです。そして犬養さんは「こうした不断の気くばりと年期—それが満ちてふとしたたり落ちるひとしずく、一芸とはそれであろう」と結論して居ります。一見簡単に見える「嫁菜ごはん」のようなものでも積み重ね積み重ねての精進の結果の一しずくでこそ「いのちある嫁菜ごはん」の生来となる事を教えられて見ると、日頃軽々しくも名句を作ろう、いのちある句を創ろうと口巾ったい事を言っている私の頭の芯まで正宗の秋水を突きさされた様な気が致しました。

その一両日後、山本為三郎さんが竜安寺の石庭の事を書いておられる。「竜安寺の石庭は西洋人もほめるし、日本人も誇りとして居るが、この頃その石庭の模型が作られて外国へも出された。あの形に似せた石をおき砂利を敷いただけのものである。竜安寺の石庭はたしかに大小の石で出来ている。しかし竜安寺の縁に坐してながめるときそこには低いヘイの美しい形が見える。さらにはるかに前方の山の姿が、自然に目にはいってくる。それが借景の美である。」山本さんはこう言って外国へまで石だけの模型を持ち出す愚をなげいて居られます。私達川柳する者にとっても、この石だけを模型にする愚かしさをほんとうに戒めねばならないと思うのです。借景の美と言うのは必ずしも舞台の背景と言う意味だけではないと思います。絵で言うバックを塗ると言う丈の意味でもないと思います。絵でも、舞踊でも、音楽でも、そして私達の川柳でも大変大切な「ま」と言うのが茲で言う「借景の美」に通ずるものと私は思います。「ま」と言う事はやがては「夢」にまでひろがる道でもある事を深く味わされる時に川柳人として丈けでなく一社会人としてもほんとうに大事であることを今更の様に痛感した事でした。

羽田を発つて

―米・欧通信―

足立春雄



クィン下り・コルベンツ附近

ベルリン

過去の繁栄を物語る様にベルリンの空の門戸テンペルホーフは大型機が屋根の下から発着出来る世界唯一の空港であり、ドイツ国内のオートバーン(自動車道路)と共にヒトラーが残した良い遺産の二つであると言われるだけの事がある。宿はベルリンの唯一つの繁華街オルフェステンダム通に面した所である。金のない旅行者であると知ってか、某社が世話してくれた宿はパンションであったが、コペンハーゲンと違ってシャワーもあればバスもある。然も奥まっていて静かであるのは何よりだが、唯困った事は此処へ入る為の鍵、次に内庭からパンションの一角に入る為の鍵その次が自分の部屋の鍵である。更に朝食やパンションの事務所に行こうとすればエレベーターの鍵がある。おかげでベルリンでは夜の巡回の守衛さんの様に鍵束を持って歩かねばならぬ事になった。鍵の格好もそうであるが

鍵一つにもあるお国振り

と思われる。

ベルリンの繁華街は戦禍に無残に尖塔をもぎ取られ、一部の建物も破壊された儘のカイザー・ヴィルヘルム一世記念教会を中心としたカント通りや、タウエンツエン通りと交叉する御堂筋位の通りで、多くの商店や歩道の中央にある硝子箱の様なショーウインドーが、特に夕方の散策には所謂ウインドー・ショッピング(この頃は商売の時間ではない)に好適である。道を歩いている人の格好もそれ程華美でなく、革が安い為か革ジャンパーの女が多い。しかも殆どが国防色を思い出す褐色である。此処らにもドイツ人の気質を現わしているのかも知れない。

メエチェンやダーメに粋な革ジャンパー

あの教会はわざとそのままにしているのかとも思われる位であるが、裏通へ行けば建物に弾痕があったり、半ば崩れた儘の所もある。日本のようにすぐ焼けたり壊れたりしなかっただけに、傷跡が深いのかも知れない。

ミサイルもU2もいやな弾のあと

ベルリンの人達の眼にこれがどう映っているのか、ベルリンに遊んだ人の思い出の地ウンター・リンデンは東独に属して、カスタニヤンの大木の姿は見えず可愛らしい篠懸の路に変っており、この入口となっていたブランデンブルグ門は、西、東の境界として不気味な影を横たえている。見学に行ったベルリン大学は東地区になり、多くの先生方は西ベルリンから毎日検問所を通って通っているという事である。しかし研究費は非常に豊富に貰えるらしい。いずれにしてもベルリンの人の為のベルリン市として一日も早く一つになる様祈らざるを得ない。西ベルリンは陸の孤島とも呼ばれ、此処に居る人には兵役に関する義務がないとか聞いていたが、今ドイツに兵役の義務がどのようになっているのかは知らない。

動物園のある公園はその昔「緑のベルリン」の誇りであった相であるが、戦時中の燃料不足で九十五%まで切られたと言うことである。しかし今はかなり復旧していて、大阪の天王寺公園等比較にならない。どの外国の都市もそうであったが、緑の多いのは羨ましい。現にこの公園に接続して色々の建築家が粋を競って建てたという住宅地帯は、ハンザ地区と呼ばれ多彩な高層アパートもあり、モダンな教会もあり、平家があったり、凡そドイツとは思えないが、それぞれの周囲の広い緑の芝生は全く羨ましい限である。一応はアメリカ的であると言えば言えるが、きっとここから新しいドイツ文化を造り出す事だろう。

ハンザ地区新ゲルマンの芽が生えん

ベルリン市街の見物はやめにして、市の西南に当るワンゼーを訪れ、市民の誇る緑の森―グリューネ・ツルトとハーフェル湖に一日の旅の疲れを休める事にした。

又ベルリンでは二行四十数名の日本の視察団が来ており、その中に大学の先輩が交っており、思わぬ所で思わぬ人に会うものだと感心した。猫も杓子もとは言わないが出来るだけ多くの人が外国を見る事は決して無駄な事ではない。

横顔に戦禍が残るいたましさ

誰が為骨肉分れ西東

狭なって思わぬ人と逢う世界

弾痕は大学の窓に未だ残り

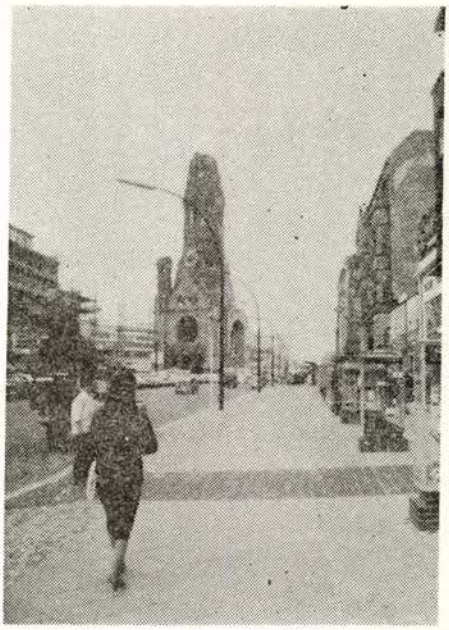
ハンブルグ

今度の旅の最終点ハンブルグは人口一七五万、ドイツ第二番目の都会と言われるが、何よりも此処は全ドイツをインターランドとして栄えた港である。今ではライン、ルール地方をインターランドとするブレーメンに及ばないが、第二次大戦で大損害を蒙った港湾設備も大部分回復して、林立したクレーンと数え切れない棧橋には大小様々の船舶が停泊しており、活気を示していた。北海から五〇粁エルベ河を遡った所にあるが、丁度港のある所でエルベが二つに分れて大きな島を作っているが、この島は自由港であると言うので貨物船は殆ど此方の方に入港するものらしい。この島に渡るエルベ・トンネルは河の底に掘られたトンネルで、人は勿論自転車、自動

車はそのままエレベーターで運ばれて河底十六米のこのトンネルを渡る仕組である。これだけでもハンブルグの繁栄と価値を示すものであると言えよう。街そのものも古くアルスター湖をだいた港町とはいえぬ落ちついたセンター街を持っており、その中心に聳える市庁舎は十八世紀風の落ちついたドイツ・ルネッサンス風の建物で、昔王宮であったと言うだけにその尖塔や周囲の彫刻が印象的でアルスター湖への堀割と、その後方の教会の時計台とが一幅の絵を思わせる。又古い建築物の一つである聖ミカエル大寺院の塔も戦火を免れているのは有難い事である。此処から西へ行った公園にはビスマルク記念碑があり、ビスマルクが堂々と英国の方を睨んで立っている。昔は日本にも多くの銅像があったが、戦争中から戦後にかけて消えたものが多い。過去の美術品として子孫に伝える雅量がないのは悲しい事である。

更に此処を西に進めば大港町の大歓楽郷があり、在留邦人は浅草と呼んでいるが、これと比較されては今の浅草人は恐らく顔をしかめるだろう。此処には仮称人間動物園と呼ばれる未青年者通行禁止の板塀で仕切られた通りがある。肉の時間売りをする女性達が三々伍々通りに向って椅子にかけており、夫々が茶を飲んだり葡萄酒やビールをのみ乍ら客を待っている。人生の悲哀を感ずるでもなく至って無表情である。或はこれと思う人に話しかけているのもあるが、殆どがひやかしの人達でこれらに対しては全く動く人形と譬えるより仕方がない程冷たい表情をしている。

更により上等なのを選ぶとすれば



ウイルヘルム一世記念教会とベルリンの繁華街・クユスフテンダム街

グローセフライハイト通り（大きな自由の道）のカフェに行けば一人何かを食ったり飲んだりしている連中が、凡て街の女である。先にコペンハーゲンやベルリンでも感じた事であるが、此処でも夜の街で遊んでいる子供のいない事は感心で、遊客のせめてもの救いであろう。

大陸最後の夜はエルベ河を望む郊外の、昔ハンザ同盟の頃の海賊船の見張所であったと言われる塔を中心に作られた料亭で、ラインワインを飲み乍ら人生の意義、今度の旅の反省をし乍ら飛行機の時間を待った。丁度たそがれて行くエルベを渡る白い連絡船を背景にして、一万噸級の客船が入港して来たり、デンマークやスイスの旗をなびかせ乍ら何処ともなく出港して行く貨物船が、より大きい人生を暗示するもののように思われた。

在留邦人の為に

それぞれに冨士浅草もあってよし
もう二度とは言わず　アビシニア
（アイヴィル、シーイング、ユー、アゲンが
この様に聞えます）

紙くずをつめこんだだけの旅だった。

振りかえりゃ煙のように旅もすみ
いつの間に旅も上りになっちまい

紙数の（郵送上の）制限から非常にとりとめもない事を書きつらねて、紙上を汚させて戴いた上に、種々御加筆御校正を賜った主幹に厚く御礼を申上げると共に、御愛読下さった各位に深謝します。

これから昼ばかりの北極ルートを二十数時間。昼ばかりではとても寝られたものではなく朝食二回と言うややこしい飛行をつづけてややこしい国に帰ります。

一巻の終り六〇〇〇米から散華
雲か流氷か　オーバー・ポールを飛んでいる
人間の住めぬ所も雲や水
男々しく嵐を蹴って廻れプロペラ
今日の科学を信じ北廻り
北極の上スチュワーデスは訪問着
これからは又植木鉢の暮し方
泥くさい羽田について幕となり

（旅行前、福島院長、植田教授等に限りなき御支援を得ましたし、公社の要路の方々やハワイの柳人は勿論多くの方々の善意に包まれて旅行を終りまし事をこの機会に厚く御礼申しあげます。）

續 川柳書架（6）

川柳句集　親ごころ子心

若本多久志編

★巻頭に、
この一編を亡き愛児雄作の霊に捧ぐとある。

★麻生路郎氏の序文の一節に、
「彼は私の主宰する『川柳雑誌』に登載された柳人諸氏の句の中から、親ごころ子心を詠った秀句を多年に亘って、根気よく拾い蒐めた。そしてそれ等の句を味読することによって、愛児を喪った悩みを消すよすがとしたのであった。しかしながら、子を喪って悩むということは彼だけの問題でないことに気づき、本書を上梓して、同じ思いに悩む人たちの慰めの資に供することとしたのである。以下略

★目次は「亡き子を想う」「親ごころ」「子心」の三部に分たれてある。

★編者若本多久志氏の「あとがき」の一節を抜くと、
愛児を亡った悲しみ、それは一度我が子を失ったことのある親のみが知る深い悲しみであろう。厚く仏道に帰依して悟りきった筈の俳聖一茶でさえ、

露の世は露の世ながらさりながら

と諦めきれぬ凡情を十七文字に残している。まして私は凡夫中の愚凡、いまだに二十六年前に夭折した、長男雄作（当時四才）の眉目好き幼顔を忘れることが出来ない。そして何か供養になるものを残したいと常々念願しているうちに、月々送られる川柳雑誌の中に親心、子心を詠んだ句の多いことに気づき、約二千五百程の秀句から、更に千五百句程を頂き、茲に本書を上梓する運びとなった次第。以下略

★昭和三十四年五月五日発行。定価百五十円。B6版一四六頁。大阪市住吉区万代西五丁目二五川柳雑誌社発行。

★編纂者若本多久志氏は川柳雑誌社川柳不朽洞会員。

近作柳樽

麻生路郎選

北川春巣選

墓場までゆきつくまでの廻り道　熊本市　田口　麦彦
母さんの決心　安い方を買い　同
頼りない夫でよかった汚職　記事　同
特等の夢餅あみをためただけ　同
朝寝朝酒サラリーマンの三カ日　同
特急が冷たく農夫の視野を抜け　同
麻雀に今年も初夢見損ない　西宮市　末沢　花美
六段の冴えて元日晴れわたり　同
ジェラシーの炎知性を焼きこがし　同
癒えるのを待ってくれて賀状が来　同

兄自動車事故で入院

死んでたら死んでたらと慰める　同
上役へたてつく程のコネがあり　美祢市　安平次弘道
肝臓の酷使が続く好景気　同
証券の民主化株屋のビルが建ち　同
戒名も受けて待ってるのに死ねず　同
ボーナス出る日の忘年会に反対し　岡山県　福田　祥男
テーブルへ蟹と取り組むひじを張り　同
古傷が時時痛むカムバック　同
取引きへ二代目堅いばかりなり　同
裁判長へ一礼死刑免れて　岩和田市　外山　瓢人
レディファーストお前百までわしゃ九十九まで　同
氷すぎた春と第三者の恋批判　同

映画「スパルタカス」を見て

紀元前の物語だが腹が立ち　同
三つ指どころかボーナスをとりあげる　兵庫県　遠山　可住
嫁さんになって挨拶他人めき　同
タコあげもせんとテレビでみかん食べ　同
ノスタルジア数の子のないお正月　同
子がないかざくろはこぼれ柿はうれ　笠間市　佐内　隆文
忙中に一行詩人手帖出し　同
婦人会口から迎え飲みもやり　同
履歴書の手筋に社長まず惚れる　同
林檎でも喰えと津軽は子を叱り　青森県　木村　涼人

「大阪の思い出」より

ゆうれいを見た話

酒井ひか平

失った日記が惜しい。それにしても……。

先日、宇井無愁全集を読んで居て、又しても大阪が懐しくなり、再度何か書いて見たくなった。（筆は拙いが）昭和九年であったか。大阪のド真ン中島の内の島の内警察にホンの真近い場所で、私は一ペン火付馬鹿らしい話だが、ゆうれいを、見たことを書いて見よう。堺筋清水町電停を東へ一丁、鍛冶屋の旧家K商店は当時下田屋になり、中風で患って居られた御寮人が亡くなると血縁が絶えてしまった。養女が取ってあったが、どうした物かその家に居付かれず住吉の別邸の方へ行きたがられるので、分家の店員だった私が、当分家守りをする事になった。前にも云ったように、他の店員と毛色の変った私は、末の、のれん分けなんてものを考えて居なかったから、商売以外の仕事に使われる事が多かった。

市電の八釜ましい音が何時とはなしにパッタリと止み、支那ソバ

寝台が朝はソファーになる　文化　同
原色が老眼鏡にドギツ過ぎ　同
老眼の舌打となる泣イチッチ　同
愛称もついて給仕も板につき　松山市　沖原　光雄
勉強を強いてる親にもある弱味　同
結局は根気に負けた妥協案　同
山道はクシャミも出来ぬ運転手　同
同業に労組ができた慌てよう　小松市　関戸宗太郎
パチンコ屋大売り出しの客を吸い　同
宿題が解けず将棋に口を入れ　同
税務署の知らぬとこまで衝く労組　同
着ぶくれて母を安心させて置き　倉吉市　渡辺　乱坊
無為徒食布団の何と重いこと　同
貧相を隠すマスクをよく洗い　同

丑男六十一才初春

ありがたや二十世紀と共に生き　兵庫県　河原みのる

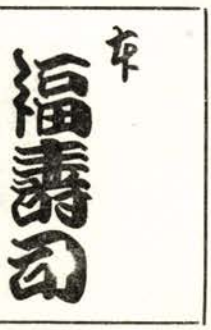
年賀名簿

僕もやがて消さるるならんと二人消し　同
黙々として更年のヒスに堪え　同
老の身のペン先までが引っかかり　鳥取県　鈴木村諷子
金貯めぬことも自慢の一つにて　同
アカギレがたまの背広に引っかかり　同
ぬくもって行けと冷酒ついでくれ　玉野市　小谷　仙山
古オーバー無い子もいると云うて着せ　同
気を付けて帰れと無理に飲まされて　同
二時間もかかって帰る寝るだけを　大阪府　佐伯　九紫
役付きになったら服装まで云われ　同
禁酒を誓い車代払わせる　同
一家健康ケーキもみかんもまたたく間　仙台市　平野　光道
正月を失業保険でのんびりし　同
口開けて寝ている秀才であった妻　同
掛け取りに行くのに女将注射をし　芦屋市　里田一ン十
何時しかに写真きらいの老いとなり　同
吉兆を三本かつぎ老いたのし　同
花ガルタ女ばかりの膝が冷え　大阪府　板東千代美
愛情か金か世間は冷めたすぎ　同
手をひいていると思えば腹が立ち　同
酒臭いからと相手にしてくれず　宇部市　鎮浪　翠月
相続も身寄りもなくて金をため　同
幸福も不幸も自分の目で選び　同

のチャルメラの音も遠のいてしまった丑満刻、なんてのは芝居の筋書通りなのだが、まさか山寺や、町外れの何処かと異い、こんな大阪の、然もド真ン中で、私しはあんな恐そろしい思いをするなんて思っても見なかった。何月であったか忘れたが、たしか主家のおひな様を取り出しに蔵へ入った記憶があるから三月であったろう。

夜泣きうどんに七味を利かせて体をあたため、せんべい布団にもぐり込んで寝てしまったらしい。

寝入りばな後味の悪い夢を見て眼を覚まし、小用にでも行こうかなと思って床をはい出した時、中の間に続く奥座敷で畳を歩くかすかな物音がする。あまり度胸のよい方でない私しは、もうそのいやらしい雰囲気に総毛立ち足がふるえる。然し、黙って居る訳に行かないので這い乍ら奥の間の襖を開けた。



心斉橋筋大丸前
電話㈹三三四四番

もう何処へもやらんと退院喜ばれ　大阪府　見本　泉洋

踏切りをはさんで師走おしつまり　同　同

三カ日電化をフルに甘えられ　同　同

酒びんへ妻のあたるも十二月　金沢市　山本　木象

履歴書の茶柱如きにはげまされ　同　同

柿二つ染めて山やま冬じたく　同　同

松の内済んで貧乏返って来　西宮市　樋口　寿栄

遠慮した病床の友から来た賀状　同　同

葬式へ女は相談する着物　同　同

出発点の相違を云うている落目　羽曳野市　板倉天悟空

ふところの金が赤い灯恋しがり　同　同

自家用車ガレージほどの宅へ着き　同　同

カスガイの役目した子も二十才　宇部市　平田　実男

女史女史と呼ばれて妻の座を忘れ　同　同

一年の計を悪友来て崩し　同　同

子供さん便所に立ったコマーシャル　京都市　都倉　求女

家主へも税務署なみに警戒し　同　同

下駄脱いでまた初めからごあいさつ　同　同

駅前へ株価の高い社が並び　鈴鹿市　吉田　俊和

組合で値上げと決めた紙をはり　同　同

損させた株屋しばらく寄り付かず　同　同

退院に遠し正月だけ戻り　石川県　高山　涼髪

除雪夫としてこの冬を食いつなぎ　同　同

おめでたい酒は音痴も歌わされ　同　同

貯金する生活になって暇が出来　愛媛県　村上　竹生

天引きされて行楽の夢を持ち　同　同

桐箪笥五人の育つ垢がつき　同　同

又も眼を腫らして義母の白髪染め　大阪市　川口　弘村

がめつさはクジ券いらぬ又値切り　同　同

働けど働けど働けどたらぬ金　松江市　岡崎　祥月

師走の風がペタルにからみつき　同　同

ワイキキ・ビーチにて

白人の女の肌の粗雑なる　ホノルル市　並木東田楼

男女同権それは嘘です女尊国　同　同

お年玉の計算ばかりで無事に暮れ　大阪市　西本　保夫

漫画見て一年の計考える　同　同

かるた会美人の顔に斗志見え　松江市　岡崎　雪美

重ね着に重ね着をする十二月　同　同

堀炬燵妻もいねむる年になり　大阪府　橋本　裕邦

一臼がキロに代った鏡餅　同　同

連名の賀状に友の幸をみる　出雲市　板倉　白楊

だるまの目書き入れる墨強くする　同　同

お知らせ

バックナンバー御入用の方は、往復ハガキでお問合せ下さい。

川柳雑誌社

「あっ」と私は今一と息で気が遠くなるかと思った。だが、すーっとたしかに御仏壇へ何者かが入るたしか初老の婦人の姿を見たように思った時、風も無いのに観音開きの大きなとびらが「ギギギ」と不気味な音を立てて三分程開いた。

私はそれからどうして分家の方へ走ったか別らない。

「あはやな今時ゆうれいなんて出るかいな」分家の御寮人に叱られ、

「あんた、夢見たんやないか」

「いいえ違いま」とやり取りをして

「ええ年して寝呆けてたらあかんがな」

と旦那に絞ぼられた挙句、

「ほんなら一ぺん見聞したる」と云う事になり、丁稚が二人付いて現場へ乗り込んだ。

とびらは開いた儘であったが、主人夫婦はどうしても信用せず、明くる日から、主人夫婦が当分晩だけ泊まり込む事になった。勿論したたか者の上女中、お清さんが付いて泊ったものだから何事もなかったらしい。

診察がすんでお庭を拝見し　伊丹市　小川静観堂

灰掻けばビールの栓が二つ三つ　同

バスガイド滝の氷柱を食べて見せ　笠岡市　松本　忠三

温泉で風邪を土産にして帰り　同

音たてて片附けて妻返事せず　京都市　大久保　和三郎

一二杯妻も付き合う雪の宿　同

家計簿にない金の出る三カ日　愛媛県　大垣たもつ

遠足を待つ子に似たり面会日　同

衣食住足り四季に合う軸に凝り　大阪市　藤冨　淀月

予備校の兄を怒らすへらず口　同

ストライキの斗士がおみくじひいている　八尾市　吉内　青魚

宴会にジュースをのんで反主流　同

納税日村には嫌な鈴が鳴り　愛媛県　鳥井　川鳥

サーカスの面白いとは他人なり　同

総選挙すめば道路は荒れたまま　布施市　坂上山椒坊

お屠蘇にもそっぽ向かれた胃潰瘍　同

退職をしても髭まで取る気なし　滋賀県　土守　蜻蛉

親類が養老院へ入れさせず　同

お年始が連れと戻ってまごつかせ　愛媛県　河本南牛史

豊年の歌伴奏は脱穀機　同

モーニング遠慮のいらぬ昼の酒　神戸市　吉田　隆史

卸値で買うた薬で飲む自慢　同

何が虚礼か賀状に温まり　竹原市　山内　静水

反省会大きくなった子の意見　同

元日付けの賀状手にとるありがた味　貝塚市　杉本　一鶴

ポンコツの一歩手前で生きつづけ　同

幼子の仕草に母の幸が見え　笠岡市　守屋衣里子

ラジオ聞く日曜居留守のままで暮れ　同

講習会我田引水聞かされる　山形県　菊地　白葩

酪農か果樹か米作曲り角　同

共かせぎの干物ぬらしている時雨　竹原市　杉原　愛鳩

いい年令をして新婚にあてられる　同

お正月過ぎたで薬の御厄介　大阪府　中岸　雄水

云いにくい事を小声で云うたのに　同

債務よりハンデイに心砕く日日　泉大津市　高津　紡毛

商談はゴルフのうわさすんでから　同

田舎駅ベレー孔雀のように降り　津市　嶋野ひろし

肩叩きながら白髪も数えられ　同

名の売れる金出し家計締めておく　兵庫県　常岡　孝風

英雄のように冬山死ににゆき　同

不精髯床屋覗いただけで去に　玉島市　井上　旭峯

気まぐれがしょんぼり濡れて戻って来　同

その当座、鼠の仕業にびっくりをした阿呆な男として、私は手代から「ちゅう吉」（忠吉）（丁稚名）に落とされてしまった。

が、お話しは私の失敗談で終ったのであれば意味がない、その後数々の異変が起こり、人々を驚かせる事になるのだが、惜しい事に筆の方がついて行かぬのと、当時記録した手帖が無いので真実性の点に今一つ欠けるものがある事を断っておく。

川柳夫婦愛

児島与呂志

東野大八さんの「風流・人間横丁」を読んでいまして、私の心の奥底をえぐられ、ゆすぶられるような二、三日を過しました。

ヒゲそり後に…
●美容衛生剤G11
●アラントイン
●水溶性ラノリン
配合
明色
男性
200円
アストリンゼン

七転び八起きは息子の知恵も借り　兵庫県　北山　越山

長さにまかれ太さにのまれて二十年　同

貧しさを隠す障子を張り替える　大阪市　木村　草々

炬燵からつぎつぎ用事造る父　同

気の強い母に息子の女性的　西宮市　鵜飼　鮎子

着物よりキャッシュと思う年になり　同

交叉点待つ間に事故の数を読み　大阪市　山田　蛙水

面白く金が出て行く年の暮　同

スイッチで足りて時間を無駄にする　下関市　藤田　雪峰

バーのマッチで妻ゆうゆうと飯をたき　今治市　越智　一水

牛小屋にしまいこんでる耕耘機　大阪市　井石　悟朗

へそくりがたまり出したら孫が出来　岡山県　若柳花乃子

小使銭子等に取られた寝正月　倉敷市　大須賀平々

親類の集りも二世の代になり　大阪市　北村弥次呂

舞台衣裳母の希望が大きすぎ　鳥取県　谷　無閑

寒波来炬燵の番も楽でなし　兵庫県　斎藤たけお

近所へは出張にして入院す　児島市　伊丹柳瓢子

ストーブで見られてならぬ恋をやき　大阪市　中西兼治郎

泣きに行く故郷へ背の子は笑い　和歌山県　木下　一休

女強くたくましく婚期に振り向かず　八尾市　吉田　博一

強引に押せと社長の高姿勢　布施市　三栗　夜城

牛年の正月らしく食うて寝て　宇部市　神田　豊年

皮算用すること覚えたお年玉　大阪市　本村　文福

家捨てて出た子を賞めたりけなしたり　貝塚市　護川　梢月

やむを得ん値上げ続続追いかける　笠岡市　谷本鈍愚坊

挨拶の付録か庭木褒めちぎる　五所川原市　盛　竜蔵

寝正月一人前に腹も減る　小松市　月田北海坊

事故見た日仏の花も替えておき　七尾市　松高　秀峰

お人好し僅かな義理に低姿勢　和泉市　末田　晃康

正月の腹をシロンで整える　鈴鹿市　中川　利男

オフィスの梅ストーブであつけなく　芦屋市　三上　芙路

木を竹につなぐ縁なり幸運児　ハワイ　宮政　周防

晩酌に持って帰った良い話　羽曳野市　樋口　一峯

税務署を敵にまわしている儲け　宮崎市　野口卯之助

父の趣味子の趣味和洋折衷さ　河内長野市　森本黒天子

元旦も麦に挨拶しに出掛け　笠岡市　出原　真奇

男なんかこわくないわと案じさせ　鳥取市　近藤　昭夫

不作とは仕事嫌いの子が一人　東京都　豊田稔坊投

インスタント愛用の妻出てばかり　香川県　三井　酔夢

物価から倍増論が打ち出され　富田林市　浅川　八郎

人一倍、心にしみるのはなぜだろうかと思いつつも繰り返し繰り返し読みつづけております。川柳人はみな奥様を大事にされる人々と存します。一度みな柳人夫人の紹介をされてはいかがでしょうか。川柳を共にやられる人ばかりでなく、川柳をせずとも、相寄ればみな仲よくなれる人々だと信じます。

良人が川柳をしているから自分も川柳をして、生涯の苦楽を共にするというのではなくとも、主人が柳人であることに喜びを感じておられる夫人も多くおられると思います。

誌上で紹介するのも一方法でしょうし、リクリエーションで共に山野へ行くのもよいでしょう。「川柳雑誌」の横のつながりとして私はこんなことを考えました。

コーヒの味

モダン川柳

心斉橋大丸北の辻東へ

御門

TEL ㉗ 6684

御集会には階上御利用下さい

川柳雑誌社

婦人友の会の集い

―花と競う句の香り

会場　中島小児科診療院楼上
とき　一月二十九日(日)午後一時

ここ数年来、暖冬になれたせいか、今冬の寒さには、みんなお手上げのようでした。流感で学校閉鎖も続出するとあっては、世のお母さん作家には外出もままならぬ寒冬異変でした。にもかかわらず、きょうの集いには、海路はるばる香川県の三井酔夢さんがご出席くださいました。

ことしの集いには、例年のように踊りはやらず、もっぱらおしゃべりで楽しい一日を過しました。ハズの苦情も飛び出すなかに、川柳探究の熱意も燃やす〃高等井戸端会議〃でした。

年間全投句された左の方々には、葭乃賞が授与されました。阿茶・一栄・きさ子・たつよ・奈良子・みね子の皆様でした。披講もズラリ女流作家ばかりです。柳界の異色として、海外にまで知られている誇りを句によってさらに高めましょう。

兼題「同　居」　麻生葭乃選
（三才と鶴吟）

ずるずるの同居今更断われず　阿茶
同居人の抵抗二三日泊ってき　葉乙女
同居して別れ話にまき込まれ　酔夢
すき焼きの日さえ気がねをする同居　葭乃
ハンサムへ同居いやとは言いきれず　同

兼題「和　服」　中島小石選

次の日は和服で会うたという日記　良子
始めての和服へ母も娘も疲れ　清子
一尺のたもとが女らしくする　葉乙女
年かいな和服の方が身にそぐい　小石

兼題「美容院」　太田良子選

美容院女で生きる世辞を言い　操子
美容院落ちつくほかは無い読書　若菜
ドライヤーの中できいてる除夜の鐘　きさ子
美容院のマダムセットの髪でなし　良子

兼題「誘　惑」　山川阿茶選

誘惑へ一歩退き母と住み　奈良子
誘惑はあなたがしたとうれしがり　あやめ
誘惑のそれから先を聞きたがり　良子
誘惑の嘘へお梶は灯り消し　阿茶
誘惑へたった一言阿呆かいな　同

席題「座布団」　内藤きさ子選

末席の座布団一つ足りぬまま　清子
座ぶとんへ子供寝かして飲みなおし　良子
座ぶとんの厚みへ無心言いそびれ　操子
座布団へ坐わりなおした物思い　きさ子

席題「遅　配」　西出一栄選

月給遅配目ざした生地が売れていた　章子
山里は遅配に馴れた記事を読み　きさ子
手紙より先きに本人着いてます　良子
サラリーの遅配へ妻のぶっちょうづら　一栄

○

大廉売の見出しへソクリゆる　葉乙女
自惚れの顔が出て行く美容院　清子
座布団が揃わぬ客を待っており　章子
膝枕はずして座布団かましとき　一栄
誘惑もされず事務服色変える　若菜
誘惑を見事酔わして妓の帰る　酔夢
同居してやりくりしてるのも判かり　美喜
誘惑に負けた口紅塗り直し　あやめ
おセットにおパーマ美容院せわし　奈良子
気のひけるような座布団すすめられ　小石
美容院噂の主が来てあわて　阿茶
和服きよう帰えさぬつもりの坐りよう　良子
母となる日も近かし和服着る　〃女
メロドラマ見ながら伸ばす誘いの手　由子
日曜のプラン遅配へ腹を立て　操子
美容院お歳はきかぬエチケット　きさ子
誘惑に負けた深夜のキャデラック　都詩子
美容院へ泣く子を夫が抱いて来る　陽子
開拓の同居はランプで四年すぎ　周甫

高鷲亜鈍著

詩川柳考

B6型函入　定価三百八十円　送費四〇円

▼著者は曽て創生期ごろの超現実主義者であったがその詩論は詩人の民衆的立場を要請した／今は柳界にあって庶民の詩人的自覚を促す／ここに川柳雑誌社が誇る現代川柳批評家として世に送る／凡そ前向作家を自負する柳俳人絶対必読の書

★お待たせしました！快著出る！

★五〇〇部限定版につき御申込は早く。

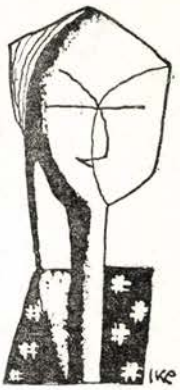
★御送金は川柳雑誌社振替口座大阪七五〇五〇番をご利用が便利です。（切手代用可）

大阪市住吉局区内万代西5丁目25

発行所　川柳雑誌社

電話大阪㊥6081振替口座大阪75050

句評リレー



今治市 長野文庫
岡山市 浜田久米雄
青森市 工藤甲吉
大阪府 早川清生

人間の鉢植に似てつとめ人

麦彦

文庫—結論から言うと「鉢植の人間」と言い度いのです、普通社会通念では「つとめ人」は給料生活者を指して言う言葉だが、つとめ人が「人間の鉢植」だろうか。これが問題だと思います。一応皆さんの意見が伺い度いのですが、私は「鉢植の(ような)人間」と解し度く「人間の鉢植(のような)」と解し難いのです。

久米雄—面白い句だと思う。つとめ人を称して鉢植にされた人間だというのだからおもしろい。鉢植えの人間か、人間の鉢植えかという話だが、要は鉢植えにされた人間であるから、つとめ人という人間を皮肉っているので人間をはじめに持って来てよいと思う。

甲吉—時間から時間まで、仕事も型にはまって何んの変哲もないつとめ人。だが人間の鉢植はすこしどぎつ過ぎるのではないか。誇張が過ぎたり、着想も奇抜に過ぎたりするとなんとなく自然でなくなる。なおこの鉢植、盆栽となると大きく意味が違って来るのではないでしょうか。

清生—たとえば人間が鉢植にされたようなという意味で「人間の鉢植」でよいのではないでしょうか。宮仕えのかなしさ、現代は個性を矯めて企業の方針に隷従することが要求されます。企業が必要とするのは性能のよい歯車です。この句、大会社などのよくしつけられたホワイトカラー族を衝いておもしろいと思います。ましてこの植物たちは終業のベルを聞くと、とたんに動物に逆もどりしたりしてさらに愉快です。誇張もこの程度なら私は気になりません。

文庫—戦争中徴用されて一年半ばかり月給を貰う生活をした以外につとめ人の体験が無いのでしみじみと勤め人生活が分らないが、この句は誰にでも「さもありなん」とうなずける。勿論人間の鉢植と言っても分ることは分るが、鉢植の人間と人間の鉢植では幾ぶん相違がある。松の鉢植と鉢植の松との差のようです。私はまあまあの句と言い度い。

久米雄—人間の鉢植えは誇張であり、たとえである。川柳にこれ位の誇張があってしかるべきで、許されていいたとえである。この句を「つとめ人さも鉢植の松に似て」とすれば弱くなるきらいがあるので、原句のままでいただく。

甲吉—このていどの誇張が大方人から認められるならば悪い句ではないと思います。ただ誇張の限度はむずかしいです。一歩誤ればユーモアがダジャレみたいになったりします。

清生—つとめ人の従順さ無気力さまたは業務上の必要からのたしなみのよさ、出世欲に根ざす勤勉さなどは天下周知のことであって、今さら言われるまでもないところです。最近どうも至極ごもっともな句が多いが、常識的な句に感激はないわけです。また職業などによる類型化、たとえば代議士なら選挙違反と私利私欲、公務員は非能率と汚職、労組は国民に迷惑をかけるスト屋といつの場合でも相場がきまっているのは気になります。川柳家には常に新らしい感覚と、物の奥にある真実をつかむ努力が必要だと思うのです。もっともこの句、当然のことを言いながら退屈を感ぜさせないのはやはり作者の力量でしょう。「人間の鉢植」によって生きている句です。

○

時刻だけ空けて死を待つ新聞社

八九寸

文庫—死と言う厳しゅくな問題を扱って居ながら、そこに悲壮感が湧かないのは「新聞社ではニュース価値を高めるために先手々々を打ってゆくから、大ていこんなことだろう」と言う滑稽感悟をゆすぶるためかも知れない。とに角死なせ度くない気持と、それを待って居るということの矛盾をついた着想の奇抜性を頂き度い。

久米雄—事実こういうことがあるだろうか、一度新聞社の人に聞いて見たいと思うのだが。命旦夕に迫っていることはあるにしても、人間の寿命は死期が来るまではつづけられるのであって、何時何分せい去の時間を空けて活字を組むようなことはあるのだろうか、新聞社ともなれば、そうまで予備原稿をしなくても、それ位の記事は鉛筆の先でさらさらと書けばいつでも組み込めるように思う。この句ぼくは想像に近いと思う。

甲吉—私は新聞のメシを食ってから二十数年になるが、私の新聞社では私の知る限り未だこのような

ことはなかったようです。しかしこのあともあり得ないとはいえないし、あり得ることも考えられるのである。それは、たとえば世界的に有名な人などが医師から絶望を宣告され、死が時間の問題となったとき、その死を待って号外を出すとなるとあらかじめ活字を拾わせて置くことになるからである。しかし、なんといってもどうかと思われる句だと思います。

清生—矛盾と撞着に満ちた世相を批判する新聞、その新聞にも矛盾と撞着がある。現代の先頭を突っ走るマスコミは、私たち川柳人が追究しなければならない要素をたくさん持っている。この句ご指摘のようにたしかに不自然です。豊かな想像はもちろん尊ぶべきものですが、時にはとんでもない誤りをおかし、後世にまで混乱を残します。もっとも私個人としては営利性や非情さなど新聞の持つ一面を衝いた佳句として、不合理な点はあまり気になりません。

文庫—現在こうしたことは無いかも知れないが、ありそうにも思える。現に印刷所などは会葬礼状などはいつも版をくずさずに置いてあるそうだ。この句は事実の有無より迅速を尊ぶ新聞社を諷刺した句として無条件で頂き度い。

久米雄—前評を書いて二度目の回覧が回って来る間に時と人とを得て新聞社の方に聞いて見たところやはりそういった準備はしていないということだ。新聞社を想像する句としては想像はうなずけるけれども、事実無いことはないわけで句として失敗に終ることになる。

甲吉—あるなしは別として新聞の立場から一言。この句はいずれにしても新聞の非情をついたものと思われますが、しかしわれわれも人の子です。たとえ、このようなことがあったからとて決して人の死を軽視するものではありません。それは、おくやみを述べながらメモをとるということと同じで新聞という使命がそうさせているのです。だからこの句は皮相ということにもなりそうです。

清生—もっと社会や科学を学ばねばいけないとは私がいつも自戒していることです。批判詩を標榜する川柳も、当事者から見れば見当違いのことを言っていることが往々あると思います。この句はこれでいいのですが、物事を公式的に把握すると甲吉氏の言われる皮相にとどまることにもなるわけです。ところで現代を動かすマスコミを詠んだ句があまりに少ないのは残念で、相手が巨大すぎて手におえないというのなら川柳に限界を認めることになります。相手が怪物すぎるというなら一層これをきわめる必要があります。

この句の真実性が問題になりましたが、ないものをあるように言ったのでは、新聞の非情より川柳の非情が衝かれそうです。しかし文芸春秋新年号には読売新聞十一月十九日付夕刊が、吉井勇氏の死亡ニュースとこれに対する木俣修氏の追悼記事を同時に掲載した手回しのよさについてこれを準備原稿と断じ、非礼を責める一文が載っていました。

（担当・真鍋一瓢）

現代柳人録

（一）姓名（二）雅号（三）別号（四）現住所（五）生年月日（六）出生地（七）職業（八）電話（九）自信の句一句（一〇）川柳以外の趣味（一一）配偶者の有無（一二）川柳に手を染めた年月

(55) 土守蜻蛉

（一）土守治郎（つちもりじろう）（二）蜻蛉（とんぼ）（三）極楽亭（四）滋賀県高島郡マキノ町海津（五）明治26年7月16日（六）現住所に仝じ（七）農業（八）なし（九）**夫婦箸今だに妻が出して呉れ**（一〇）囲碁、冠句（一一）有（一二）明治41年頃

(56) 吉田隆史

（一）吉田隆一（よしだたかいち）（二）吉田隆史（りゅうし）（三）隆坊（たか）（四）神戸市灘区篠原本町一丁目八（五）明治33年7月7日（六）神戸市（七）貴金属宝石商と質店二ヵ所（八）自宅⑧四六一六　三宮店③一二八〇　元町店③四一五八（九）**御勘定となると無欲でないマダム**（一〇）観世流謡曲（一一）有（一二）昭和三十年春

(57) 成田我洲

（一）成田松雄（なりたまつを）（二）我洲（がしゅう）（三）——（四）青森県弘前市山道町十七（五）明治39年7月5日生（八）北海道函館市東雲町（七）歯科医（八）弘前七四九（九）**月が出て郷愁はるかに母を恋う**（一〇）陶筆・野球・映画・トランプ（一一）有（一二）昭和八年五月

(58) 斉藤旭映

（一）斉藤竹吉（さいとうたけきち）（二）旭映（きよくえい）（三）暁岱楼（四）名古屋市西区塩町四の四（五）明治24年1月22日生（六）名古屋市（七）会社員（八）中村局⑤四九二〇（九）**社旗立てて記者がいま来た前夜祭**（一〇）カメラ（一一）有（一二）明治四十四年五月

(59) 雨宮八重夫

（一）雨宮幸作（あめみやこうさく）（二）八重夫（やえを）（三）——（四）甲府市上石田町一六六〇（五）明治36年1月21日生（六）甲府市西高橋町三四五（七）会社員（八）甲府二二七八（九）**石に酒かけてやる卵のような雲**（一〇）読書・弓道・謡曲（一一）有（一二）大正八年九月頃

訂正

若本多久志　住所　西宮市津門西口町五〇

（担当　西川晃）

コクヨ
便箋

よくぞ女に生まれける（特集）

女の節句に因み、女流作家に、女ならではという溜りをつづってもらいました。なかにはスゴク鼻息が荒く、気の弱い男子泣わからずのページになりそうです。（編集局）

亡父ゆずりの癖

麻生葭乃

「よくぞ女に生れける」というテーマで何か書けと編集部から私達への註文である。

金泥集の団体旗へ集まる女達は立場上、多少の手加減はしても、自己欺瞞の筆は絶対とらないであろうと私は考えている。

私は幼少の時から「女に生れて損だ」とか「男に生れた方がよかった」とかと言う比重は秤々にかけて見た事がない。天と地を創造した創造主は、男と女に、決して不公平な分配はしていない筈である。物質的に損であると見える時は、精神的に恵まれているし、物質的に得であると思われる反面には必ず精神的の悩みがある。だから私は只一個の人間として生きて行きたいと思っている。夏目漱石氏の文学評論であったか、厨川白村氏の著であったか、出所は忘れてしまったが、「猫の巡礼（キャッツピルグリメーヂ）」と言う引用文を読んだ事がある。

猫の隣りに住んでいたワン公が、「私のうちの奥さんはおあずけやチンチンをせないと何も呉れない」とこぼしていた。猫は小枝にさえずっている小鳥に「なぜそんなに囀っているのか」と聞いて見た。次々と巡っているうちに或る日、虎の家を訪ねた。折柄食事中の虎の家族は珍客の猫を歓待した。其時虎が人間を喰うのは正義であると言って居るのを聞かされた。猫は次々と見聞を広めながら巡礼のコースを終えて帰って来た。そして「結局なれた事をしているのが幸福である」と悟った。そこで私も考えた。人間も三つについた癖のまま生きる事が出来たら幸福であろうと。

私は伝統的に亡父からゆずり受けた癖を今もなお、後生大事に守って居る。だから私は世界中で一番仕合せな人間であると思って居る。

此癖を捨てたら形見なにもなし　葭乃

★

皇后にもなれる世の中

西村梨里

女なる悲しみおんな酌をする　梨里

こんな気持の私に「よくぞ女に生れける」と言う課題で何か書けとの仰せである。「一体女に生れて、ああよかったなんてことがあるだろうか」人の花は紅いと言うのか、常日頃は女はつまらないなァと思うことの方が多いようだ。そんなことを言うけれども、主人を下に敷いているくせになんて思っている人がいたら、見に来て頂きたい。決して決して左様なことはございません。と申しても自分で言うのだから信用して頂けるかどうか……。

処でつらつら考えてみるに、男もまた決して結構とは言えないようである。

夕涼みよくぞ男に生れける　（古句）

なんて言ったのは昔のこと、男の一字を女と入れかえた方がピンと来る今日である。

第一女の方が世界が広い。「女に喰いはぐれはない」とも言われているが、今日では女給、仲居、芸者などと言う女だけの職業は依然として女だけのものであるのに、女は容赦なく、男の世界を脅かしている。アンコだって、大臣だって、何でもござれ、女に出来んことは一寸ない。それにも拘らず、男は原則として、働き蜂の責任をおしつけられて、自分は勿論妻子の食べ代までも稼がにゃならん因縁を持っている。

朝眼を覚したら、

お帰りの時間ぶっきら棒にきき　梨里

てなぐあいに、ぽんと放り出され、一日あくせく働いて、上役に叱られたり、あっちへペコリ、こっちへペコリ、そんなことはどうも好かん、それより玉子焼でも造っている方が性に合ってると思っても、気の毒ながら、そう言うわけにはゆかないのである。

そこへ行くと、女は派手好きならば水商売もよし、芸術家でも、大臣でも好きな職業がえらべるし、結婚と言う一生喰べられる職業も亦よしである。洗濯は洗濯機がしてくれるし、自動炊飯器の番でもしながら、のんびりと日を送るうち、男は働き疲れて死んで終う。その頃には子供が一人前になる。まるで恩給がつくようなものである。こう考えて来ると、何と女と言うものはよいものだなァと思うのである。平民に生れても未来の皇后にだってなれるのも、これみな女なるかなである。

★

職業を持つ妻の立場から

太田良子

一口に女というても色々の立場がありますが、私達の様に職業を持つ妻の場合は、夫のそれとは又違った立場に立ちます。極端に言うてみれば、男は経済的な面を満せば家庭の事を何も彼も忘れていても大した支障は来さないでしょう。そして帰宅すれば世話女房が待っているという具合になりま

す。でも妻の場合、そうは行きません。その代りメイドがやってくれるではないか、それはそうでしょうが、人まかせには出来ない主人に対する、子供に対する温かい、細かい思いやりなど一日だって缺かす事の出来ない家庭内の用事が多々あります。完全とまで行かなくともその努力がなければ破綻を来たすでしょう。そういう点に於て妻が職業を持つ場合は多かれ少かれ負担になるのではないかと思うし、それも多忙と来ては損をしている様に思われる。即ち永い生活過程に於て、そういう妻に対する夫の思いやりや、忍耐が時々爆発します。そんな時は因果な職業を持ったものだと情なくなります。

又一面男は甲斐性があるんだからと経済的なゆとりを外での遊びにまで発展させる事が出来るが、妻の場合は子供も居れば家庭を無視するような立場には立てないのが普通ではないでしょうか。そんな妻が外出するにしても段取をつけて行くのですが、大抵の夫は何時頃帰るか、早く帰らぬと云々と仲々のんびりとした気分で出掛けられる事は少ない。

男性のエゴイストというか、独占欲というのか。勿論夫は対社会的に於て必要な交際というものは当然ありますが、然しそれに便乗している時も可成多いと思われる。そういう楽しい風に時々妻もあててやろうという愛情がほしいもの。

要するに当然、夫と妻とでは同じ職業を持っていても本能的にも又立場も違うのであって見れば同様の行動の出来る道理が無い。夫婦喧嘩でもすると損だとか得だとか言うてもみるし、私にだって奥さんがはしいと思うてもみます。然し互いの深い信頼の下に成立した夫婦であってみれば、そうした努力は家や子供の成長のエネルギーの一部となり、ひいては自分の幸福に外ならぬと考える時、負担が負担ともならず生き甲斐を感じざるを得ないと言う事になりましょう。

即ち、よくぞ女に生れけると思う時は、夫もよくぞ男に生れけると痛感する時であろうかと思う。私達の場合はそういう時が三分かな。七分はお父ちゃんの思いやりが足りませんので、子供に影響せぬ程度でぶつぶつ言うています。

時間外女医は割烹服でいで
子が病めば母の勤めが狂いだし
へそくりを持って心斎橋に出た

★

若いうちが花

武部若栄

終生を「よくぞ女に生れける」人こそ完全に女性の悦びを抱きしめ、誇りを克ち得た人なのであろう。単に美しく生れ、愛され、物質に恵まれても、それが男の玩弄物というのでは人間失格である。自らも誇り得て、自他共に生れ甲斐のある人にして「よくぞ生れし女性」と言えるのではないだろうか。

新らしい息吹きに女性ならではの本領にこもって深い智性を巧みに生かしている人々も多くなった。ハンディキャップを返上して明日への文化に寄与している人もある。私はこのような人々を心から尊敬し、また羨やましく思っている。私のもはや手の届かない所に身を置いている人たちに、ただ跪座して自分の無為なる一生を顧みるより仕方もない。私が今の世に生を享けたならば、もっと覇気のある変った姿のものになったにちがいない。女として倖せかどうかは別問題として。

この頃中学を卒業したばかりで集団就職だのと笈ならぬバッグを引っ下げて、先生に引卒されて来る少女のせち辛さと較べて、私達の頃は職業婦人という名称さえ縁なきものとしておった。級友の三四人のしっかり娘だけが青雲の志を立てて、津田塾とか英仏和に席を置いた。友達の妹が巡業の豊竹呂升に見出されて弟子入りしたなどは目をみはるばかりのトップクラスだった。

娘同士娘だけの話題に日々をのん気に送り、創作ものもむさぼり読んだ。兄の影響で川柳のいろはを習い初め、若菜となったのもこの頃である。よくぞむくつけき男に生れざり、とそれをさえ倖せの一つと思っていた。

「女が自分の女である事を嫌がるようではお仕舞だ」と兄が嫂にこぼしていたが、何が彼女をそうさせたかはまだわからなかった。

父はむつかし屋の方だが「口答えでない弁解ならしてもよい」と言ってくれ私も安心して弁解し父も分ってくれた。

ところが夫ともなると勝手がちがった。いつと言う事も無くして女と生れざりせばと思う心がこの辺りからぼつぼつ醗酵したらしい。何だか終りはこのアンケートに添わなくて、申訳ない事になったが、ワンマンとは男の専売特許で、この特権乱用のつづく限り、相手役も、よくぞ女になどと唄っていられない、女に生れたいと言う男はいないと思う。特種の商売か、いかれ坊やか、離婚を提訴された夫の中にはたまにあるかも知れないが、それから見ても男なるそろばん珠は折れて曲がるものらしい。

私を女性というには、最早たそがれてしまった。今度生れるならば男であり度いと願っていたのもここ数年で再び変った。

「もう人間は御免です、神様がたって命を与えるならばも一度美しい花に生れて、ハラリと散ってしまいたいんです」と。

私だけの鯨尺にて着物縫う
美容院帰れば髪にさわる夫

★

M過剰

山川阿茶

女らしい生活に縁の遠い私にはこのテーマがピンと来ないのですよ「誰れに見しょとて紅　鉄漿つけて」と言う様に敬愛される夫があり、敬愛する夫や子供があり、この人達を立派に守り育て立派な社会人として送り出し平和な妻の座にいて、よいお母さん、よいお

肝疾患・疲労・二日酔
★総合強肝剤
ウロコ印
武田薬品
リポコール
(12種の成分を配合)
20錠・50錠・100錠

ばあちゃんであってこそ「よくぞ女に生れける」と言えるのじゃないかと思いますね。丁度小石女史のようにね。何故なら子供を生むと言う事以外に女にだけ出来ると言う誇はないのですものね。料理が上手、手先が器用、踊が上手、字がうまい、学問に秀でているのも結構、しかし女でないとと言うわけのものではありません。

しかし一度だけ「よくぞ女に生れける」と思った事がありました。戦時中でした。一家の主人であろうビール腹の中年の応召兵が重い慣れない背嚢を背負って滝のように汗を流しておられるのを大阪駅で見た時でした。妻子を残し仕事を残し、悪く行けば片道切符の旅ですし、如何なる苦難な前途が待っているか判らないのですもの。今思ってもゾゾ毛が立ちます。

でも私は斯様にも思いました。私のような度胸のない、努力型でない、気甲斐性のないものは女であってよかったのかも知れません。殊に女だからと多少割引のきいた時代に生れて二三割のハンデを貰ってやっと一人前に見て貰えたのかもわかりません。「男のくせに」と言う言葉は物の出来ない時、悪い時に使用される場合が多く「女だから」と言う次には出来なくとも仕方がないと言うような「ふくみ」さえ感じられました。出来れば「女のくせに」と返って生意気だと言う言葉がかくされているように思われがちです。もしも私が男だったら、発奮して偉くなっているかもしれませんが欲のない、度胸のない、努力型でない点から見て、

百円亭主　内ポケットはいつも空　阿茶

の安サラリーマンでやっとこさ妻子を養っているか、或は飼育されてるかがオチじゃないかとも思われます。

七回忌昔ながらの不肖の子　生々庵

これは父の七回忌の時に頂いた句です。甲斐性のないのを皮肉られたものの、これは多分に仏へ花をもたせてあると解釈出来ます。一方「あんたみたいにヌーと大きゅうなって費う事ばっかりしか知らん人がよう一人でここまでやって来たわ」と感心してくれる人もある世の中です。

バラックの姉さんでよし一個建　阿茶

まあ九尺二間でも自分の家に住んで両親を見送って墓を建てて、自分で喰って誰れに気兼もなく好きな生活が出来たら、それこそ、マアマアで男なら不肖の子と言われる処を「女だから」と世間は眼をつむってくれるだろうから、やっぱり「よくぞ女に生れける」と言えるのかもわかりませんねェ。

M過剰今日は女になりすまし　阿茶

★

女の使命

西出一栄

「よくぞ女に生れける」と言う言葉は私の痛切に感じている事です。親譲りの喘息で長年こまっていましたその間、医者よ薬よとありとあらゆる手をつくして貰らい、家族に心配を掛けること夥しかったのです。やっとドイツの新薬で奇蹟的に喘息が癒ったかと思ったら、今度は動脈硬化症で旅行先で倒れました。二ヵ月半ばかり日赤へ入院、ああそうそう入院した日でした、昭和三十四年六月廿七日葭乃先生が毎日新聞へ女流川柳家として御推薦下さいましたのは何だか恥ずかしい思いでした。

この時発表して戴きました句

逢引へ鈴を落して猫戻り

もやもやを土産のように里帰り

退院後もずっと指圧と薬を続けてやっと元気になったとは言うものの、齢が齢ですもの、もと通りにはなりません。一見化け物みたいな肥り方で至極達者に見えますが病弱です。こんな病気ばかりしていて使いものにならない身体がもし男だったら、どうして一家を支えて渡りにくい世の中を泳いで行けるかと思います時、ぞっとします。近頃になって私は女に生れて来てよかったとつくづく思うようになりました。

長女は実業家に嫁いで、孫が三人ズラズラと女の子ばっかりリボンをつけたコッポリが、おばあちゃんと押よせてくるさまは実に姦し娘そのもの物凄い賑やかさです。それに息子が二人で小企業乍ら工場を経営していてくれまして私を大事にいたわってくれますので、女親と言うものは有難いものやなと思う時しばしば。

昔は男の座、女の座とはっきり区別が出来ていたようですが、今は婦人警官あり女代議士あり中山さんのようにひと時でも女大臣になられた時代、裁縫は男仕立をよろこばれ板前コックとても男であります。男女どちらでもよいのではないでしょうか。とに角才能を生かせばよいのだからと私は考えています。而したった一つ男性に出来ない事は子供を生むこと、これは神様が女にだけ授けられた使命ですもの誇りとせなければならないと思います。明治の頭で思いますには、女性のみなさん、いくら女が偉らくなっても女は女である事を忘れずやはり昔ながらの大和なでしこでいて、そして社会に活躍する男性をリードし、失礼乍ら飼育して行き度いと思うのですけれど、残念乍ら私はもう晩年、後に続く女性達よ強くなったは禿下と女だけの意味をよく解して、女の本分を忘れないよう大いに頑張ってほしいものです。

最近の句

序の口で妓一さし先に舞い

人生は八十からと老いぼれず

庄助さん真似た朝風呂かぜをひき

川柳雑誌社特製
書きよい　美しい
投句用　柳箋
一冊（五〇枚綴）三〇円
送料（一冊分）八円

★

川柳で若さを

酒田清子

生命ある中に生命ある句を作りたいとあせりながら、名句が生れないのは、脳の都合で仕方がないと最近では諦めに似たものを感じています。

それでも川柳を止める気にもならないのは、芯から川柳が好きな証拠だと思います。玉造支部が発足した当時は、女のメンバーが五人、いつまでもつづけて行こうと

いう約束だったのに、一人止め二人止めとうとう姉と二人きりになってしまいました。でも今年から、若手が二人張り切ってやり出したのでたのもしく思っています。

身近かな例から割り出して、女の人の続くつづかんかは、自分の意志よりも家庭の事情が左右するのじゃないかと思います。私は子供達とのギャップが、今より大きくならない為にも、川柳を続けて行きたいと思っています。そして続けて行けるだけの自由のある自分は倖せだとつくづく思います。

巣立つ子よ何はなくともある若さ

★

女の力は母の力

藤村〆女

お葉書を頂戴した時どんな事を書いたらよいのやら私に何が書けるかしらとためらいました。ペンを持ってしばらく、女！ 女！ とどちらかと言えば男に生まれて来ていたらと何度か考えた私でしたが、一人になって十五年、男女平等だとか対等だとかいうのは職業や学問や法律の事だと思う様になりました。

愛情には平等も対等もありません、むしろ愛情の面では女の方が深くて優位です。神様はそういう風に人間をお作りになったのでしょう。

女は経済にさえ独立できれば、一人でも楽しく暮せます。私もここ十五年、子供とのみの生活をしてつくづくそれを感じました。子供の育成に力を入れ、伸び行く子等の姿をながめては、明日への希望を持つ母の心、それは愉しいものです。しかし男性にはそれが出来ません。男性は一日花の野をとんで蜜をあつめ、日暮には女王のいる憩いの巣を慕ってかえる蜜蜂に似ています。男はそこで生気を養い、こころの疲れをとりもどすのです。女のいない夜の食卓が男にとってどんなに淋しいか……。

又男という男に、生きる希望と未来の夢をあたえ、行いを正しくモラルをもたせてゆく…それはいつも蔭にいる女の力でしょうね。

私は女に生まれて幸福でした。女ゆえに五人の子供が暗い蔭もなく、ほがらかにすくすくと伸びてくれた。そう思う時多久志様の句を思い出します。「**倖を信じて茲に女生き**」

女は母体です。母体なくして人間は生まれてはきません。私は女として喜び、子供達にも亦感謝して、ペンを置きます。

ケセラセラ夫かえるはいつの日か
インテリの無力な男持てあまし

香音のそのままこおる帰り路
女手に角帽きせて夢多し

指切り

直原七面山

柳友Y子さんをK療養所に訪ねて行ったのは、丁度去年の、桜の花がチラホラ咲き初める三月下旬のことでした。

心ばかりの果物籠を提げて療養所へのダラダラ坂を登りつめた頃には、もう肌もびっしょり汗ばんで……。

看護婦さんに案内されて、あの人の病室に入って行ったのは、午前の安静時間が丁度終ったばかりの時でした。

初対面の挨拶もそこそこに、あつ人は、長い療養生活者とも思えぬ元気さで、積る話の数々を次から次へと繰り出して来るのでした。

〃君は実によくしゃべるねー〃と、友人達から太鼓判を押されているこの僕にたった一言もしゃべらさないで……。

これで良いんだ、これで良いんだと思いながらも、もしや病気にさわりはしまいかと、そればっかりが心配でした。

そしてあの人は、〃病気は大分良いんですの、だから来年は家で花見が出来ると思うんです。

そしたら先生、きっと私の家に遊びに来て下さいね。

先生と一緒に朝から晩まで一日中、川柳のお話をして見たいんですの……。

先生良いでしょう。ねー先生お約束して……。

さあ小指をお出しになって…〃

可細いあの人の小指に僕の小指を搦らませて……かたいかたい指切りを……。

ああそれなのに、そのY子さんもいまはもう亡い。

しみじみと人の命のはかなさを思う。

あれから半年も経たぬ間に、僕はY子さんの訃報を聞いた。

たった一人の妹さんから。

ダラダラ坂を下りて行く僕を、ハンカチを振りながら背のびしいしい見送って下さったY子さん。

あなたは辞世の一句も残さないで、淋しく一人白い病院のベッドの上から真直ぐに、あの世へ旅立って行かれたと聞く。

あのかたいかたい指切りさえも忘れてしまって……。

★　★

川雑ジャーナル

川柳女医さん

私用公用でよく山川阿茶さんのお宅を訪問することがある。

ブザーを鳴らすと、昔なら「どおれェ」と武者窓から、きたないオッサンが顔を出すのだが、ここは美しい若い女性が、用心深く武者窓に似たガラスの窓越しに「どなたデス」と訪問客を見てから、玄関へ入れてくださる。玄関へ立つと一句あり、

患者だと思っていたら靴がなし

と、履物にご注意だ。待合室へ通されると、

自分だけ火鉢にあたり応待し

と、待合室のエチケットだ。さすがは川柳女医さんではある。

川柳をここまで活用してくると、生活も楽しいものである。しかもこれらの川柳は、杏林川柳会で抜けた句ばかりとあれば風趣またひとしおである。

（F）

楊貴妃

冨士野鞍馬

文月七日の夜

謡曲「楊貴妃」に

「その文月の七日の夜、君とかはせし睦言の、比翼連理の言の葉も……」

とあるように、唐の玄宗は、七月七日の夜に、楊貴妃と濃厚な睦言を交わしたことを、川柳はおもしろく詠んでいる。

その文月の七日の夜のいやらしさ　（傍　三）

玄宗の七日の痴話は世に残り　（末　四）

楊貴妃は小原で一つのんだよう　（傍　初）

七ばんされてよまいごと貴妃はいい　（末　二）

四百余州が寄りますと貴妃喜悦　（タル一一九）

七日の夜よかった事がわすられず　（末　初）

七月七日は、七夕で、牽牛、織女が、年に一度出合う日であるから、それにもかけて、

楊貴妃と織女一緒によがるなり　（末　二）

天地の出合楊貴妃と織女なり　（タル二七）

楊貴妃は星をお先にして契り　（〃　五六）

とも詠まれている。そこで、

七月八日玄宗頭痛する　（タル一二）

とうがっている。また、

八日には楊国忠へ加増なり　（タル一三）

楊貴妃のおかげで、妃一家一門は、急に出世して再従兄の楊国忠は宰相まで上った。

かつがれた女

父は蜀州の司戸という低い官吏であった。

楊貴妃はろくな一家は持たぬなり　（タル一八）

楊枝屋の娘たうとう貴妃に成り　（万安六）

楊貴妃の母は其辮喰へぬ顔　（万安三）

やうきひも元トいい坪をぬいた人　（万安七）

楊貴妃は、玉環といったが、玄宗の子寿王の妃になった。ところが、玄宗は、前の寵妃武惠妃がなくなって、寂寥かぎりない思いから、麗山の温泉離宮へ行くときに、高力士に命じて、寿王の邸からつれ出して来て、貴妃としたのであった。それを川柳は、

ぶったくり玄宗帝が元祖なり　（万明七）

楊貴妃ももとかつがれた女なり　（タル一五・拾四）

楊貴妃を湯女に仕立てる驪山宮　（タル九）

などと、ちゃんと見逃してはいない。

双六と茘枝

玄宗と貴妃はよく双六をして遊んだ。その時貴妃の望むところの三の目が二つ出た。玄宗は、その目に朱を入れた。それを朱三という。

楊貴妃はいふ程の目の出たおんな　（タル一八）

後宮で朱三朱三とうまい声　（拾　五）

玄宗の寵朱四朱三なり　（万天七）

朱三を振ったらもう寝なと貴妃は云ひ　（タル三）

双六のなかば国忠さま御らく馬　（タル一四）

下賤から上ったお妾の兄が、にわか武士にとりたてられて、よく落馬することが、江戸川柳には多く詠まれている。貴妃の再従兄国忠もそうであろうと詠まれている。

双六のそばに茘枝のうづたかさ　（タル一三）

双六とれいしの側に美しき　（〃　三〇）

また楊貴妃は、南国産の茘枝が好きであった。

美しい顔で茘枝をやたら食ひ　（タル一二）

食好みするは楊家の娘なり　（〃　一一）

楊貴妃は無気味なものを食いたがり　（万安八）

美しい顔で楊貴妃豚を喰ひ　（タル四・拾四）

豚を食うことは、中国人として当然のことであるが、江戸時代の日本常識からは奇異に思われたのである。

楊貴妃へ長い団扇をさしかける　（タル七）

楊貴妃はかんせんぬいの上着也　（〃　一三）

これは絵に描かれた姿を詠んだものであろう。

形身のかんざし

謡曲では、貴妃はもと蓬萊山の仙女で、仮に人界へ降り楊家の女となり、玄宗の後宮に召されて、寵をほしいままにした後、再び仙界へ隠遁したので、玄宗は歎き悲しみ、方士を派して、その行方を捜させる。という前になっていて、「上碧落、下黄泉にまで尋ね申せども、更に魂魄の在りかを知らず候」とある。

楊貴妃を上へきらくを先ッたずね　（タル七）

尋ねにくいは小督より楊貴妃　（タル二七）

やっとのことで、方士は蓬萊山に辿りつき、貴妃に逢うて、帰ってくれとたのんだが応ぜず、カンザシを形身にもらって、ありし日の睦言をきかされて帰った。というのである。それも川柳に詠まれ、

そう申しや御合点だよと貴妃はいひ　（タル一九）

勅答で見れば楊貴妃無筆也

（タル三九）
楊貴妃は無筆と外は思はれず
（万明三）
睦言を勅使へかたる美しさ
（タル八）
勅答にあたまの飾一本減り
（〃一二）
楊貴妃はつむりをかくにこまるなり
（万安二）
玄宗は泣き泣き耳の垢を掘り
（タル二）

ということであったであろう。

しかし、唐では、反楊派が叛乱軍を起し、ついに楊国忠を殺し、楊貴妃は国のために、多年の恩愛を謝し、玄宗の幸福を祈って、死んでいった。時に三十八才だった。

楊貴妃は馬捨場にてさいごなり
（タル三五）
むごい死にやう楊貴妃と高尾なり
（〃二二）

これは劇にもなっている。

熱田神宮の化身

楊貴妃は、熱田神宮の祭神である日本武尊の化身であった。という伝説がある。

「唐の玄宗、日本を侵さんとの意あるを知り、熱田の御神、仮に楊家の娘と生れて彼に仕へ、其心を蕩かして略東の念を断たしめ、後本国熱田の宮に帰り給へり。貞享の頃までは、清水社の辺に貴妃の石碑ありしも、其後廃滅せり。又方士をして貴妃の跡を追ふて、蓬萊に使わせしとある。蓬萊とは、或は富士山といひ、或は熊野といひ、或は竜宮、或は竹生島と、異説紛々たれども、熱田神霊の地を指せりとの説真なるべく、現に此地を蓬萊宮、又は蓬ヶ島と呼び、金城を蓬左城など称するにても証すべく、秦の徐福が、不死の薬を求めんとして来りしも此地なり。」

と古書にあり、川柳もそれを詠んでいることは感服する。

三千の一は日本の廻し者
（筥　二）
玄宗は尾張言葉にたらされる
（タル四一）
やまと言葉はおくびにも貴妃出さず
（タル一九）
楊貴妃はもと神国の廻しもの
（万安七）
日本はせめなさるなと貴妃はいひ
（万安九）
日本にかまいなさるなと貴妃はいひ
（タル二〇）

結局玄宗は日本を侵略しなかったのであるが、目的を達した楊貴妃は、姿をかくして熱田（蓬萊宮）へ帰った。というのである。

大国の美人尾州に跡を垂れ
（タル一七）

謡曲「楊貴妃」の終りに

「君には此世逢い見んことも蓬が島の鳥」

とあるのは、熱田のことであろう。

あっちからは玉もこっちからは貴妃
（タル二〇）

唐からは鳥羽帝の時に狐が玉藻前に化けてやって来たが、こっちからは楊貴妃が行ったのである。

☆

熱田明神を楽天は知っている
（万安九）

楊貴妃のことを「長恨歌」に作ったのは白楽天である。

なおわが国では、美人の代表として、小野小町か楊貴妃かと謳われ、桜の花にもその名がつけられている。

上下に楊貴妃のある真っ盛り
（タル二六）
楊貴妃も小町もいずれ花の王
（〃三八）
日本の花にも唐の名を残し
（筥　二）

☆

金泥集

麻生葭乃選

課題「栄転」

栄転は小姑の多い座に坐わり　阿茶
表面は栄転首の座のとなり　同
栄転へ母は海外嫌やと云う　同
栄転へもう子は東京弁おぼえ　良子
栄転へ電話ひっきりなしに鳴り　同
栄転をかげで見送る眼に出合い　一栄
栄転をして来てみなに気をっかい　同
栄転へ内助の妻は残される　章子
栄転は名のみ辺地へ左遷され　同
栄転へ地酒の味も教えられ　葉乙女
栄転が左遷のような土地に着き　同
栄転へ身軽い旅に出ることく　若菜
栄転へまだ序の口という野心　きさ子
栄転へ羽田をうずめた人の波　周甫
栄転へ内助の功をいたわられ　奈良子
栄転は淋し二人の仲をさき　美喜
栄転をして定年の日を数え　知恵
栄転を母手ばなしで泣いてくれ　清子
栄転の町は祭りの灯がともり　花代子
栄転のお陰げ学校五度変わり　都詩子
栄転を泣いて別れた妓のいとし　酔夢
栄転で定年前に花咲かせ　ちあき
栄転を目指して今日も通う道　由子
栄転の汽車は花どき満員車　葭乃
阿茶

次回題「卵」　〆切三月末日

★金泥集への投句は、川雑婦人友の会の会員に限ります。会費は一年間百二十円。

★ふるってご入会ください

★申込所は（川雑婦人友の会連絡事務所）大阪市南区二ッ井戸町二三・山川

繪と川柳で表現する歴史（第13回）

戸田古方

(24) 中世前期のヨーロッパ

西ローマが五世紀（四七六）にほろんでからはじまるヨーロッパの中世は約一千年つづきますが、次に出てくる十字軍を丁度境にして前期と後期にわけることができます。

ローマ大帝国は地中海をまんかえったように政治的秩序も失われたとともに、文明もしばらく影をひそめています。ローマを亡したのはゲルマン人やアジアからそのゲルマンを押して来たフン（匈奴）ですが、これらの未開人たちの天下になったのでした。

その戦災のあとのようにあれはてた西ローマの最初の中心にす。

それで中世前期はキリスト教万能の時代であったといえます。八世紀ごろには近東アラビアにマホメット教がおこり、サラセンと称するマホメット教徒の帝国は地中海南岸をおおいつくし、イベリア半島からヨーロッパをうかがおうとしましたが、ゲルマン人はこれをよくふせぎました。その頃から領主と騎士と農民からなる封建制度もでき上ってきて、新らしい社会の姿となっていきました。集団の中心に王もできましたが、強い勢力はむしろ地方にあったので、地方分権の時代ともいわれています。キリスト教と封建制度に支えられて、中世前期の五百年間は戦らしい戦もなく、いわゆる中世的平和時代でありました。

絵の中にある点線でかこまれた黒丸はその封建制度であり、法王を中心に王、貴族、農民が神にぬかずいています。東方にはローマ帝国時代にわかれた東ローマ帝国が昔のままのこっています。ノルマンにして、全ヨーロッパを一つにした大きな領土とともに、何もかもがのびきった大文明をきずいていましたが、それがほろびると、おもちゃ箱がひっくりなったのはローマ帝国以来のキリスト教でした。

法王を中心として、未開人たちもキリスト教の信者になることによって、どうやら救われま

短歌と川柳

―相違と共通点

八木摩天郎

政治に、政治評論家あり、社会に、社会評論家あり、野球に野球評論家ある今日、わが川柳に、川柳の評論家なく、よしありとしても、誠に寥々たる蓋し、この一抹の淋しさは、私だけではなかろうと思う。古川柳に対する批判や、新川柳句に対する評、柳論も余りに筆を運ばずして、川柳作句のみに、日々専念する人の如何に多いかを思うとき、之れ果して、川柳に忠実なる所以であろうか。

茲に於て、私は本題を掲げて、「短歌と川柳」に就いて世の一般の識者に問わんと欲す所の所以のものは、実に大方諸彦の御叱正を乞わんとする真意に外ならないのである。

「川柳と俳句」「川柳と狂句」に就いては、しばしば、多くの人々に依って執筆された。しかし、短歌と川柳に就いては、余りにも筆を執られていないのである。

短歌と川柳、これは言う迄もなく、世界に特異な民族文学である事は勿論である。しかも、万葉集は、実に千古不磨の一大歌集であり、約千百八十年前に我等の祖先が、四千四百首に余る輝しい国民詩を遺して呉れた産物であるが、惜しむらくは、作者が多く上層階級で、衣冠束帯の「麿」で、庶民階級たる川柳の如き「真っ平御免ネェ」式の江戸っ子育ちで無いので、飛鳥寧楽の文化は燦然と光を彩たとは言え、何等文化の恩沢に浴する事無き人々、文学を用いて書き残す手段のない下層階級の人々等の、当時の生活諸相が知窺し得ないのは遺憾である。のみならず万葉は、雄壮とか、典雅とか、優美、典麗の点は大い に発達した。しかし、肝心な滑稽の歌は発達しなかったのである。併し乍ら万葉時代にも随骨皮肉な歌人もあったらしく、明治三十六年九月発行の久良岐の著、「川柳梗概」にも左の通り万葉十六の歌、

寺々の女餓鬼甲さく大神の
男餓鬼賜はりて其子産はむ

なぞと、大神の大将の痩せていたのをお寺の餓鬼の木像に喩えた歌や、

勝間田の池は我れ知る蓮無し然か言ふ君が髯無きが如

なぞと、当コスリに髯武者の殿様にカラカッタ女中なぞもあり、又法師等の髯の剃杭に馬繋ぎ甚くな曳きそ法師半無む

なぞと、檀那寺の僧を茶化した人もありと、流石「望岳街談」や「文壇笑魔経」に筆を執った、坂井弁の川柳久良岐も書いている位である。

（未完）

苦笑善哉

木山遠二

マン、即ちバイキングといわれるゲルマンの第二次の侵入者たちが、北ヨーロッパに入って来たのもこの頃でした。

騎士の道キッスの作法なども説き

皇帝を顎でつかって贄肉がふえ

うっかりと金の冠のせられる

(25) 十字軍

十字軍の戦とはキリスト教の象徴である十字のしるしを旗じるしにしたヨーロッパ人と異教徒トルコ人との争いのことであります。マホメット教がアラビア人中心であった間はさしたることもなかったのでしたが、中央アジアあたりから入りこんできたトルコ人は未開で、異教徒とはともに天をいただかないという風のものでありました。このトルコ人がキリスト教の聖地エルサレムを占領して、これを荒らしたものです。西ヨーロッパではキリスト万能時代、法王の権力は絶大であったものですから、この聖地を荒らす異教徒征服の戦がおこりました。

死ねば天国、神の戦は不敗と法王がいうものですから、西ヨーロッパ人はこの十字軍に参加しました。しかし掛声やおまじないだけで戦は勝てません。

数百年もつづいたにもかかわらず十字軍の聖地回復は成功しませんでした。それは数だけがどんなに多くても団結して戦うということを知らなかったからでした。

しかし、大ぜいの人々が未知らぬ東方をみて来たことは大きな刺激を西ヨーロッパの社会にあたえることになりました。こ

した。そして商売人の時代になってくるのでした。十字軍で法王のことば通りならなかったので、キリスト教会の信用がなくなり、又、騎士や貴族は、十字軍の中心になって戦ったので死人や怪我人もたくさん出ました。費用倒れになったりもしましたので、今までのような強い力を失いはじめ、これにかわって、王が新らしく起ってきた市民、すなはち商売人を中心とする町の人と新らしい国づくりをはじめてゆきます。

○

そのうちにそうなってきたシヤイロック

○

これがお土産やったのかとわかりかけれから西ヨーロッパは文明開発の方向をたどります。今日のすすんだ世界の文明はここからはじまったといってよいのです。

すなはち、十字軍のゆき、かえりに足だまりとなった北イタリアにはヴェニスなどの都市がおこり、商売がさかんになりま

初句会での数の子の題に対し、近来見たことがない、食うたことがない、と言う風な句が圧倒的に多かったものですが、それは懐工合がよくないのを言ったのであることは勿論です。それにつけて私は四十年前の或日の出来事を思い浮べてひとりで苦笑しました。

朝鮮忠清北道の片田舎で独身生活をして居た私の許へ、暮も押迫って数の子の小包が郷里から届きました。郵便が縁先へ置いたのを暮の忙しさにまぎれて一時間も其儘にし、サテ、と取り出して見ると、大きな黒犬が生垣の裾をくぐって走り去るのが見えました。縁先には小包が無慙に食い破られてありました。

その翌朝、私の家へ出入の鮮人が来ての話に「昨夜李さん方では犬を屠りました。ところがその腹の中から為体の知れない物がゾクゾクと出て来ました。煮て見ると素晴しくふくれて鍋へ山盛り程もあり、家族だけでは食いきれず、何しろ珍らしいので近所へも配ったそうです。」

この地方では飼犬を野菜と同じに心得て、育てては食う習慣なので何でもないことですが、李さんの懐工合は吾々の懐に比べて決して温くないのに、犬のお蔭で今まで見たこともない数の子にありついたことは特筆に値すると思うです。

句会で選をする時、集った句笺を見て「アア立派な句が多いナ」と思う時がありますが、其反対に「駄句ばっかり揃ったナ」と思う時もあります。

前の場合は自分の頭の調子がいい時で、後の場合は頭の調子が崩れている時です。

これは選句に経験の浅い私の発見なのですから、誰しもがそうと決ったものでもないでしょう。

さて先日私は或る盛大な句会へ出席しました。

兼題五、席題二、いずれも三句宛で計二十一句、急づくりながらも私としては出来が珍らしくよくて、かなりの自信を以て出句しました。うまくすると全句入選するかも知れぬ、平抜ばかりとしても二十一点、余り点を取りすぎても端へ気の毒、等と嬉しい心配をしながら控えて居りました。

愈々披講となってからまことに宰外しました。読み上げられる殆どがつまらない句ばっかりの揃いで、遂に私の句は一つも抜けませんでした。

地方切っての名選者を以て任ずる顔を並べて居るにも拘わらず、今日の私の句を、よう採らないとはイヤハヤ情ない、それとも時間が無いのでよい選が出来なかったんかナ、およそ句会と言うものはこうしたものかと、淋しく帰って来ました。そして

其翌朝。

句会へ出す自分の句が揃って素晴しく見える時は、揃って駄句だ。

と言う新らしい発見を私はしたのであります。

私の頭は朝が一番よろしいのです。

一路集

催促

松江梅里選

催促の出端をくじく低姿勢　失名
催促に相手が悪るいボスが出る　光福
催促がしびれ切らした差押え　雄声
催促がうまく断わるのも上手　弘村
情にもろい母は催促せず戻り　一鶴
南窓の梅一輪が春を告げ　隆史
恩に着た金催促に腹を立て　井蛙
取込みへ猫催促に来る御飯　兼治郎
催促が電文で来る子の学資　忠三
催促の最後弁護士の名で届き　涼人
お銚子の催促軽く振って見せ　繁太郎
出来るまで待てとはどうせ返えさぬ気　古心
また催促かと受話機とり上げる　庸佑
あつかましく行かねばこはくれぬとこ　雄水
煮え切らぬ返事催促の強い語気　藤波
催促のチャンスに笑ろて居るばかり　ひか平
催促をしてもすまない顔もせず　圭水
小遣いを催促しなけりゃほっとく気　一峯
催促もせずに友情疎うなり　無閑
催促に来て奥さんがきれいすぎ　可住
返盃を催促するよう酌ぎ廻り　市郎
催促をしない方から片づける　実男
払込みの催促へ鶯を鳴かせ　香林
催促の手紙は斜めに読んでおき　光道
催促が早速来てる転居先　木魚
催促に来たやおへんと貰ろて去に　和三郎
催促をされ盃洗へあけっちまい　八九寸
催促へどうでもしろとふてくされ　愛鳩
催促へ郵便ストを借りて詫び　たもつ
催促の弱味事件師長びかし　淀月
催促が下手で真面目に生さて居り　蛙水
催促が家具の値踏みもして帰り　平々
催促の出来ぬ事情を陰で聞き　豊年
催促へ上手な嘘でことわられ　祥月
居催促無駄な生活を指摘する　代仕男
催促の先手を打って風邪をひき　文庫
執念に似た催促が怖くなり　徹也
催促状振替用紙も入れて来る　十九平
催促をされてるようで気が歪み　蜻蛉
催促が帰えるとバカに強くなり　同
催促へ今日は居据わる気で出かけ　光郎
待ちかねた下戸に催促された飯　同
催促へ不平たらたら出し渋り　雪峰
催促に触れずちょいちょいやってくる　同
催促へ少しあまえてみる二号　雄々
催促は美人にまかす請求書　同
催促も出来ぬお布施が溜ってる　圭井堂
よくよくの催促だとはとらず　同
催促にゆけば薄情者にされ　宗太郎
借りてまで貸して催促にもゆけず　同
末席は催促をして叱られる　白葩
踊りながら催促してる夜の蝶　同
催促に慣れて作家の板につき　恵二朗
催促がいずれくるやろ頼かむり　同

佳

督促状のほか郵便も来ず　香林
催促をされて月末もう来たの　恵二朗
催促をして来た手紙の不足税　十九平
善人の催促もう一押しが出ず　葵丘
茶碗叩いて飯の催促寮も春　光道
印刷で来た催促はすぐ忘れ　和三郎
催促の出来ぬ課長に立替える　木魚
催促のない借金で気が疲れ　弘道
催促状明日書くことにして眠る　むじな
催促もようせず諦めてもくれず　静水

人

催促を忘れて帰る程酔わせ　光郎

地

催促も出来ず百円それっきり　実男

天

無駄足を踏む催促にバスが混み　十九平

軸

肱鉄砲以来催促矢の如し

テンポ

山根白星選

幼稚園テンポ合わぬも愛らしく　雄声
晩成のテンポと親はまだ信じ　弘道
手拍子のテンポに合せ歌い切り　白揚
テンポもう一人前と言う自覚　蜻蛉
恩人のテンポに合す酒が冷え　葵丘
どうしても社長テンポにあわぬ唄　同
テンポとは別に三つを皆唄い　静水
テンポちと合わぬが明治と昭和飲み　どんたく
急テンポ財布が空になる師走　光郎
戎橋らしいテンポの人通り　淀月
拍手うながす如くテンポ早くなり　光道
流行のテンポへ月賦置き去られ　和三郎
石段を登るテンポが声になり　兼治郎
レコードのテンポ師匠がきて変り　宗太郎
込んできて床屋テンポを早めたり　鵜汀
パフ叩くテンポ小皺へ狂うてき　実男
人生のテンポが女から狂い　同
三つの歌テンポ合おが合うまいが　代仕男
昇給のテンポ矢張り東大出　同
テンポ合うやないかと社長さんダンス　ひか平
情熱のテンポに合わぬお小遣い　生薑
五十三次をこだまというテンポ　青鳥
流行のテンポへショウインド忙しい　十九平
梯子酒テンポののろい唄でくる　瑞歩
カンパンが近くテンポも心得る　保夫
客席もテンポに合すロカビリイー　草々
聴かされる謡曲肩の凝るテンポ　同
末っ子のテンポで歩く子沢山　むじな
台風ののろいテンポが気をもませ　雪峰
尺八のテンポに合わす首を振り　ひろし
あの人のテンポに合わす肩が凝り　雪峰
人生の下りの坂を押すテンポ　文庫
値上りのテンポへサッリー追っかす　旭峯

一人だけテンポがあわず拍手わく　圭水
自信もう持てずテンポへ落伍する　十九平
雨だれのテンポ作曲家のヒント　同
踊りの輪合わぬテンポがいてはずみ　恵二朗
手拍子が又舌打ちになるテンポ　ひか平
テンポなど気にせず音痴楽しそう　一鶴
遣場ない心テンポは掻きむしり　木魚
弔詞にもテンポがあってもらい泣き　雄々
祝詞さえテンポを少し早めてる　圭井堂
この辺でテンポを変えてみたい恋　宗太郎

佳

唇をゆるしてからの急テンポ　弘道
テンポまだ得心ゆかぬ舞扇　周甫
小心な男テンポの早い足　可住
内職に馴れてテンポをつみ重ね　光郎
ビフテキの筋へテンポが急に落ち　淀月
厳寒の水車テンポを取る軋み　古心
工場のテンポゆっくり廻うベルト　卯之助
ここからがテンポの遅い廻り椅子　旭峰

人

代読のテンポがのろい春日和　宗太郎

地

テンポとは別に仏像拝まれる　文庫

天

テンポ揃えるフランス語の叱咤　ひか平

迷惑

木村水堂選

スキーヤー他人の迷惑気にしてず　春光
デートする夜道に友がつきまとい　無閑
血圧が高いのにまた提げてくる　平々
迷惑と知らず政府が指導する　可住
迷惑にならない線でひきあげる　徹也
御休憩の客の自殺で引っぱられ　圭井堂
押売りが泣きの一手で腰をすえ　光福
気にすれば軒によいよ気にかかり　豊年
迷惑な顔でライオンあくびする　みのる
恋人があるのに嫁をすすめられ　美舟
先生に迷惑かける子の智能　雪美
縄張りがどうのとボスのいやがらせ　一鶴
客だけを迷惑させてスト妥結　葵丘
迷惑をかけたのも居る同窓会　北海坊
前後左右アベック喜劇ききとれず　隆史
迷惑な顔を無視した飲み仲間　酔夢
迷惑な顔へ只々頭下げ　光一
迷惑な此所は喧嘩の場所でなし　定月
迷惑をそれとは言えず平社員　八郎
居心地がよいと姑尻をすえ　瑞歩
露天商家の前迄店を張り　白葩
迷惑をすぐ顔に出す損なたち　鮎子
迷惑は誰にもかけぬ自尊心　雪夫
迷惑をかまわず囲む写真班　蛙水
迷惑をかけた母さん無事で居る　同
お隣りのブタ小屋あんまり近すぎて　古心
田舎バス酒に呑まれた客が乗り　同
遭難へ麓の村が駆り出され　十九平
名をかしたことで共犯人にされ　同
お愛想に留めれば腰を落ちつける　受鳩
迷惑な夫婦けんかを持ちこまれ　同
スナップ写真こんなお方と写されて　草々
満員の中で新聞読まずとも　同
割込んで来てゆうゆうと座にすわり　雄水
声かけず行ってくれればよいものを　同
迷惑を考えませんえらい人　圭水
交番も迷惑してる酔っぱらい　同
ガス電気代までたのむ共稼ぎ　淀月
目撃の一人となって署に呼ばれ　同
めいわくは百も承知の頬かむり　恵二朗
泥はねて家ゆさぶって五屯積　同
ひとさまに迷惑かけぬ猟に出る　青鳥
御迷惑おかけしますと白衣乗る　同
トラックの泥へあわてた水溜り　卯之助
断りが出来ずしぶしぶついてゆき　たけお
迷惑は承知の上の多数決　代仕男
迷惑な話犯人と瓜二つ　たもつ
草野球何度割るだろ窓硝子　ひろし
御迷惑かけて手土産までもらい　静水
一枚の名刺迷惑かけられる　木魚
菓子折で瓦ずらされ家曲り　どんたく
遠縁にあたり警察へ喚び出され　蜻蛉
もうかりもせぬのに過大評価され　つや
宴席に迷惑そうなクリスチャン　旭峯
迷惑をおかけしました遺書になり　雄声
迷惑な話は一升壜を提げ　涼人
迷惑な話を聞いた床柱　雄々
迷惑を掛けたと世話好き気がつかず　弘道
忘れてた身元引受呼び出され　八九寸

佳

吊るとこが無く迷惑なカレンダー　文庫
七五三子は迷惑な晴着を着　たけお
迷惑をかけぬつもりが世話になり　庸佑
迷惑をかけっ放しで出世する　孝風
疑いが晴れても迷惑だけ残り　繁太郎
迷惑を口に出す程金があり　鵜汀
迷惑に馴れてポッポッ金を貯め　照児
近所迷惑気にして居ては儲からず　ひか平
迷惑と知りつつ無理のいえるなか　旭峯
捨てて来た仔犬と言わず礼を述べ　宗太郎
迷惑のついでを頼む菓子包み　雪夫
迷惑な話に肉身だけが寄り　藤波
迷惑な顔さえ見せずみこし上げ　生薫
迷惑は女中のそばの猫が受け　実男
迷惑と知りつつ貰う井戸の水　竜蔵
迷惑をかけて夜逃げの荷をしばり　卯之助

人

迷惑をかけて出て来た実の親　保夫
迷惑な埃り名所に住んで浴び　井蛙
発起人迷惑そうな顔に慣れ　十九平

地

迷惑の序に靴も貸してやり　木魚
頂いただけでは済まぬ送りもの　代仕男

天

新聞の隅で迷惑取り消され　雪夫

軸

迷惑な顔せず夫の義理を足し

入門講座

研究題「灰」

清水白柳

A 一握の灰をこの世に残すのみ　村瀬子

B 一握の灰になってぞ苦を忘れ　周甫

C 六十年萌え出でもせず灰と化す　八郎

D 灰になるのに気がついて遺産分け　瑞歩

人生の終りを詠んだ句のうちでこの四句が目につきましたが、どの句ももう一歩深く突込んでほしいと思いました、Aの句は平淡にすぎて説明的になっているように感じます、Bの句は下五文字にやや批判的なものを持っていますが理屈っぽい点に弱さがあります、Cの句は実感の句と思われますが、格言めいているところがあるのでもっと具体的なものによって表現されますと、いい句になりそうです、Dの句もやはり教訓めいているところがあります、気がついてという字句に一寸わざとらしさを感じさせられました。昭和五年頃の句に、一握りほどの煙となるならんというのがあります、灰ではないので一握りというところに異論があるかも知れませんが、この句の持つ深さを味わってほしいと思います。

A 灰皿をそれて思案の灰が落ちち　実男

B 灰皿の山へ女房をすすめられ　美舟

C 酔っている煙草を灰にしては付け　酔夢

Aの句は沈思黙考をしている姿をよく描き出されて居ります、それは灰皿をそれてという言葉によって句が活きて来ているからであります、よくまとまって居ると思いました。Bの句の、灰皿の山というのが難点であります、灰皿が山程積んであるともとれるからであります。勿論灰皿の中の吸殻の山を省略されたのでしょうが成功しているとは言えないようです、句意もありふれた事柄なので平凡な句になってしまいました、Cの句は上五文字が説明しているだけに終っているようです、これだけのものを素材にして具体性をもった句を詠むことに心掛けてほしいと思います。

灰皿に恋のなきがら焼く煙　小松園

この句も昭和五年頃の句でありますが、恋のなきがらという具体性を今でも面白いと思って居ます。

A 書置を灰にし苦難に耐え抜く気　実男

B ラブレターの灰しばらくは紙の型　光道

C 灰になれば一万円札もみじめなり　一鶴

Aの句は想像の句でありますために人に迫るものを持って居りません、想像がいけないというのではありませんが、余程表現力にすぐれていないと力を入れて詠んだつもりでも上辷りした句になってしまいます、Bの句はラブレターを焼いたのが、どんな理由で焼いたのか、この句にはそれを訴えるものを持っていないので、しばらくはという佳い言葉が活きて居ないように思われますので、考え直してほしい句であります、Cの句はその通りの句で、一万円札に面白さを描き出そうと思われたのでしょうが、これも想像されただけのことのように思われます、灰になった紙幣も型が崩れて居ないと日本銀行で替えてくれるそうですが、この句の下五でみじめなりと説明してしまったので失敗しているようです。

トンド焼き清書の灰が高く舞い　愛鳩

左義長に皆なわら灰顔に付け　周甫

藁灰をつけてとんどの子がもどり　静水

大阪では、とんとと言いますと道端か空地で焚火することですが、句に詠まれて居ります、とんどは、一月十五日の朝、〆縄などを神社で焼く左義長の儀式を詠んだものと思いますが、ただそれだけのことに終っているようです。

藁灰を造るに困る団地族　雄水

安静済んだころわら灰のイモが焼け　一鶴

わら灰の縄結び目に故郷おもう　八九寸

団地で藁灰を造っているのを見たことがありますが、この句は団地の一面を表しているといってもよいのではないでしょうか。安静時間の句は療養生活の一こまを詠んで、ほほえましいものを感じさせます、安静時間とわら灰の出来る時刻との因果関係は知りませんが、こんなこともあるのでしょう。縄の句は結び目がこの句を成功させています、併し故郷おもうと安易に詠まれたところが減点されるようです、つまり詠み放しにされたように感じられるからであります。

究明の灰慎密に掻きわける　辰始

火事場の跡か何かで調査しているのを詠まれたのではないかと思いましたが、何の究明かが表われて居りませんので句意がぼやけて居ります、慎密は慎重ではないでしょうか、ただ下五の掻きわけるというところで火事場らしいと考えられるだけなのです、もっと気取らずに、気楽に句を作られるとよいと思います。

煉炭の灰をごみやに叱られる　生薑

そこらに空地のない都会の一面が現わされて居ります、普通なら道路のくぼみへ捨てたりするのですが、舗装された道路のために捨てることも出来ず芥箱に入れておいたところ雨にでもぬれたのか始末に困ったごみやのぼやく声が聞えるようです。

言い難い借金灰ばかりならしてる

灰のかき工合借金やなと思い　水京

前の句は借りに行って言い出しにくいので灰をならしてるというのですが、借りに行った本人の気持を想像して作っているような句になっているのがこの句の弱いところです。後の句は借りに来られた立場から、ずばりと見抜いたと

ころに深いうがちがありますので非常に面白い佳い句になって居ります。

灰もろて釘をさがしてがめつ生き　Y

灰を買う生業の声せず時勢なり　S

焼跡の釘拾いという言葉がありますがそれとは意味が違いますが、釘をさがして、生きて行くというのは誇張にしても成功している句とは言えないようです、がめついというのを使っただけの句になってしまっています、灰買いは昔のことで殆んど忘れられている商売ですが、その声が聞えない時勢なりという詠嘆でもなければ回顧でもないという句ですから失敗作と申し上げるより他にないようです。

灰の中から出るわ出るわ吸殻　S

火箸でかきまわして吸殻をつまむ面白さはだれもが経験することですが、ただそれだけを十七字も使って詠むことはないと思います

朝までの温みをたもち灰をかけ　S

気持ちはよく現われて居るのですが、この句もただそれだけのことで、作者としては自信を持って居られるかも知れませんが余りにも平凡な事柄だけに胸を打つものがないのです。

灰をかく鉄砲風呂ゴーと鳴り　S

描写された通りで、それ以上のものを持って来て訴えなければ取柄のない句と言われても仕方がないと思います。

灰かいてニコヨンまんだまた火鉢　周甫

待たしたる火鉢の灰よくならされて　弘村

意識の外で灰に字を書いちゃ消し　村飄子

二人して灰を着せたりぬがしたり　きくえ

灰に書く文字にうなずく妻若し　光道

この五句はそれぞれ面白さを持って居ります、傍線の個所に句の焦点があるわけですからよく味わってほしいと思います。

以上で終りますが、私の身辺に取りこみがありましたため、〆切に追われ思うように書けなかったことをおわび申上げます。

リンのひびきに線香の灰が落ち　白柳

次回　研究題「濡れる」

〆切　三月十五日

宛先　大阪府南河内郡美原町丹上四〇四

清水白柳

「美しい」と「きれい」（一）

戸田古方

詩川柳ということばもありますが、わざわざ詩という文字をつけるのもどうかとも思います。

いったい川柳に芸術があるのかないのか、そういうことを問題にしている人もあるようです。丁度ゲテモノの民芸品が芸術であるかどうかというのと同じです。芸術にならないところにゲテモノの気安さがあり、芸術と威高け高かにいわないところに川柳のいのちがあるのかもしれません。

芸術には美の要素があるといいますが、美とは何かの説明はなかなかむつかしいようです。

暖冬どころか、今年の冬の寒さは格別、

「珍らしく大阪に雪が降りました。とてもきれいでした。かすかに屋根の瓦の起伏をかくすほどで、板張りや壁の黒さ、ひさしの下の暗さと雪の白さのコントラストがいいようもなく美しいでした。」

その雪の朝、不用意にこんなことを書きなぐりながら、「きれい」と「美しい」を区別してみたいような気にもなるのでした。

新年のあつまりに、温泉場へいきました。ここは男たちばかりの一部屋。

食前の一湯、食後の一浴もすませて、ぶらりさそわれたのが、この頃はやりのヌード・スタジオ。よそでも、よくみている御連中。

それにしても、ここのヌードの「きれい」さはどうでしょう。「きれい」というより清潔なといいたいくらいでした。さすが大都会に近いだけにステージもすっきりしています。バックはよく光っている鏡です。その上に白い小さなテーブルの蜘蛛の巣が張りめぐらされてあります。舞台といっても小さなものですが、そこにおいてあるガス・ストーブまでかがやいていました。アイシャドーをしていない女の眼は清らかです。不思議なくらい静かな様子です。もっとも全身には何かぬっているらしく、ジョンブリアンをまぜたいぶし銀のようなおちつきです。フラッシュのききすぎた平べったい、まっ白い写真のようですが、いやらしさが少しもありません。全く「きれい」の一言につきるのです。「きれい」とはこんなものをいうので、どんなに思っても「美しい」ということばにはなりませんでした。

ヌード・スタジオの話はただそれだけです。少々書きすぎたようだし、「きれい」といいすぎたようにも思っておもはゆいのです。

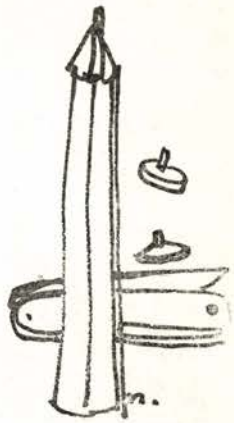
裸婦なら毎週クロッキー・クラブで描いていますから、ちっとも珍らしくも何とも思わないのですが、ここのスタジオでは、美をつくり出すためのアトリエの裸婦にはみつからぬ「きれい」さがあるのでした。

もう三十四、五年も前のことになりますか、小出檜重先生がまだ生きていられました頃のことです。週刊朝日主催の信濃橋洋画研究所の夏期講習会に参加したことがありました。その会期末に風景写生で奈良へまいりました。

奈良ホテルの前の鷺池のほとりで私は画架を立てておりました。中景に興福寺の五重の塔が見え、前に鷺池がひろがっています。それを構図しようとしておりましたところ、講師である古家新先生がそこへ巡ってこられて「絵にならん」といって下さいました。別に反抗したわけでもありませんが、私はくるりと向きをかえて、池畔へおりて来た狭い坂道を画にしたものでした。

塔の見える風景が画にならんというのではないでしょうが、絵にするためには、あまりにもつかみどころのない拡がりなんです。したがって初歩のものには手におえないモチーフだったというわけでした。いわゆる、それはきれいごとの絵になりそうだったのです。

柳界展望



句会

▼本社三月句会は七日（火）午後六時から、上六の園西会館三階（天王寺電話局東隣）会場で開催新会場は静閑な雰囲気の和室故、柳友お誘い合わせの上多数の御出席をお願いする。▼南区医師会文化部杏林川柳句会は二月二十八日（火）午後七時半から南区三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催。▼コクヨ川柳会（大阪市）句会は二月二十四日（金）午後五時半から黒田国光堂で開催。▼大阪逓信病院二月句会は二十五日（土）午後二時から五階会議室で開催。▼南海電鉄川柳句会（大阪市）は二月二十三日（木）午後六時から難波親和クラブで開催。以上路郎主幹出席。▼川雑備前支部新年句会は一月二十二日夜、浜田久米雄居で開催、二月句会は十八日夜横山一声居で開催。▼川雑岡山支部一月句会は二十一日開催。▼岡山電報局ゆめ川柳会二月句会は二月十八日、小野田町光好陽子居で開催。▼ひろしま川柳会第一例会は二月十五日午後六時から広島駅会議室で開催。▼川雑鳥取支部句会は二月十五日りいち画廊で開催。▼日の丸川柳会（鳥取市）は会社創立三十周年記念句会を二月十一日に開催、極めて盛会であった。▼明和研究会（西宮市）三周年記念句会は二月十二日、鳴尾公民館で開催。▼雀郎忌句会は一月二十六日東京神田のむら田で開催、故人を偲んだ。▼前田伍健一周忌追悼句会は二月五日（日）午前十時半から故人ゆかりの地、正宗寺で開催。▼奥しなの新春句会は中島紫痴郎氏の休診日の一月十五日金井有為郎居で開催。▼並木会創立六周年記念川柳大会は四月九日（日）午前十時から岡山県農業試験場笠岡母樹園で開催。兼題、信心・久米雄選、アルバム・十九平選、春七面山選、燃える・北斗選、初対面・東岸選、席題三題当日発表、会費五十円、投句は八円切手三枚封入の上、笠岡市山口一八二五、川柳並木会木山遠二宛。▼第六回石川県下川柳大会は三月十九日午後一時から石川郡美川町公民館で開催、兼題、明るい・愛情・花・生産・即席、席題三題当日発表各題三句、会費五十円。投句は三十円封入の上、三月十五日迄に美川町中央公民館宛。▼第十五回長野県川柳大会は五月十四日（日）午前十時から湯田中温泉で開催、兼題、ペン・団地・札束・明日の夢・断崖・大学、各題三句、会費一五〇円、投句は百円封入の上五月十日までに奥しなの川柳社宛。▼新潟市春季（第五回）川柳大会は三月十九日午前十時から新潟市婦人会館で開催、兼題、春・急行・豪遊・うれし泣き・鼻っぱし・おんな・失笑、席題四題当日発表投句は三月十五日までに新潟市榎町北越製紙川柳会宛。▼「草千里」出版記念句会は三月十二日（日）午前十時から（二月十日を延期）熊本市内熊本太洋デパート特別食堂で開催、兼題、「草千里」「完成」「記念」席題二題当日発表、〆切正午、会費三百円、投句は三月十日までに四十円封入の上熊本局私書箱四五号川柳噴煙吟社宛。▼広島川柳会創立四十周年祝賀会は三月一日川柳教室終了後席をかえて開催されるが、記念大会は改めて八月に行われる

消息

▼路郎主幹は健康が全く回復したので故亀井花童子と一番因縁が深かったので函館川柳社昭和三十五年度の花童子賞の選者を引き受けられた。

▼若本多久志氏（西宮市）は賀状が元旦に届きかねる昨今、一思いに賀状廃止へ踏み切られた。「チッポケなレジスタンスで賀状やめ」▼八木摩天郎氏（堺市）は一月二十九日富柳会新年句会の席上、多年の川柳指導の功績により富田林市長から小型高級時計を贈られ益々文化向上に尽す決心を固められた。又、一月三十日から二月四日まで南九州観光の旅に出かけられ、桜島から、「湯上りがほほえむ加き桜島」の句信を寄せられた。▼国弘半休氏（山口県）は国鉄三十六年勤続に終止符をうち後進に道を開くために停年一年前ながら退職、近く防長観光旅行社に入社される。▼工藤甲吉氏（青森市）は一月二十日、二十二日から軽井沢で開催される国体スケート競技大会へ記者を帯同して参加、録音の野鳥の声を炬燵で聞きながら、杏掛時次郎の夢を見たりしていますと。「軽井沢でテニスコートもみて帰り」▼野尻南海氏（メルローズパーク）一月十四日の午後から夜にかけて新年句会を開きました。本田露角氏（この方は数年前に夫婦で訪日、先生の短冊を戴いて帰り、今も尚大事に飾って訪ねる柳人ごとに誇って居られます）に「川柳雑誌」を広告していただき雑誌購読申込をうけましたと。一層のご支援を祈って居る。▼築山快夢起氏（ホノルル市）は令室が、ロサンゼルスとパークレーの令息の所でクリスマスを正月をされたので、一寸

淋しい気もし、一面呑気で自由な世界に住んでいますと。「別居して知る妻君の有難味」 ▼野村味平氏（加賀市）は今年かぎりで独身生活も四捨五入でゆきたいと思い目下努力中とのこと。 ▼若本多久志氏（西宮市）は二月十二日上京、相変らずの人と車の渦でイヤな都会ですが、東京人の感覚はこれを超越している様ですと。

▼清水白柳氏（大阪府）は令嬢のお骨を納めに故里の小松市へ行かれたが、折からの大雪に柳友とも会わず早々に帰阪された。 ▼大島濤明氏（熊本市）宅が二月四日午前零時三十分全焼した。寒さの折柄、同情にたえない。 ▼ひろしま川柳会主催の第十一回新年交歓三十六題川柳大会で、山内静水氏（竹原市）は六位に、林野甦光氏（呉市）は八位に入賞された。

▼大阪府の機関誌「職員時報」の川柳欄では毎月林昌男氏夫妻が活躍され、芸美展作品に、昌男氏の「パパに似て来る子を頼りなく思い」の句が一位、本村文福氏の「通勤の足にじゃれつく落葉風」が二位、福山えく呉氏の「オーバーの縞目かぞえる満員車」が三位に入選した。 ▼内海敬太氏（奈良市）在学の奈良高校では氏の肝煎りで短詩型文学同好会が設立され、川柳を大いに喧伝しておられる由。 ▼三浦秋無草氏（松山市）から「伍健氏一周忌追悼句会はNHKのテレビやラジオが力を入れてくれて、句会の実況放送や〃人間伍健を偲ぶ〃窓城、狸通秋無草三人の対談を放送してくれたりして、存分に伍健氏を描いてくれました。」と。 ▼米沢暁明氏（大洲市）から「子供が大学（大阪方面）へでもいくようになれば会える機会も多くなることでしょう」と。 ▼山田季貴氏（広島県）は年度末が近づき、購入その他の調査の旅で忙殺されている「国鉄の合理化立ン坊の旅つづく」。 ▼3・3・3川柳会が復活した。ご活躍を祈る。

句集・柳誌

▼中村冨二句集が東京都豊島区巣鴨六ノ一三二九森林書房から発行された。著者は序で、これは「冨二が生きていることの、尻尾の様なものだ」といっているが、約四百八十句、「墓地」「少年抄」「青」「童話」の四章に整理編集されている。「振り向けば墓地は日暮れの穴となる」B6版、九十七頁、定価二百円。 ▼高鷲亜鈍著「詩川柳考」が大阪市住吉局区内万代西五ノ二五川柳雑誌社から発行された。本誌参照。 ▼岸和田川柳会発行の「きしせん」一、二月合併号を百号記念号として発行された。

慶・弔

▼麻生一歩氏（大阪市）は二月十七日に女の子を儲けられた。路郎主幹の四番目の令孫である。慶祝 ▼清水白柳氏（大阪府）母堂スエさんは二月五日午後十一時老衰のため死去、葬儀は七日午前十一時から自宅で執行された。謹悼。 ▼大野風柳氏（新津市）令姉シンさんは一月二十一日午後四時三十分脳溢血のため急逝、告別式は二十三日自宅で執行された。謹悼。

改姓・改号

▼福田祥二氏（岡山県）は安藤祥二と改姓、岡山県英日郡美作町楢原中一四〇へ住所を変更された。 ▼加川靖真氏は大芽と改号された

正　誤

▼前号三頁、不朽洞句帖三句目、補助罪とあるは幇助罪の誤りに付訂正。 ▼前号二十二頁、中段十五行目、木村草人とあるは草々の誤りに付訂正。 ▼前号二十九頁上段九行目前田健伍氏逝く二月五日とあるは十一日の誤りに付訂正

不朽洞会から

☆**臨時常任理事会**

—本社二月句会終了後、同会場で臨時常任理事会を開催した。出席者、路郎師・生々庵梅里・好郎・古方・水客・紫香・潮花・薫風子・多久志の諸氏。

☆**新会員紹介**

一　月

▼横山一声（岡山県）正会員

——東岸氏推薦

二　月

▼園戸宗太郎（小松市）正会員

——一三夫氏推薦

不朽洞の人々

長谷川三司氏の横顔

生命ある句へ人生のあるかぎり

（三　司）

ブック三冊程ある私しの写真の中で横顔の写真は、これがたった一枚、今までは意識して横顔を写さず正面や、右向きに写して居ましたがこう皺が多くなっては正面からうつせない。耳横の黒点は写真の疵ではありません。「ほくろ」です。このほくろが大きい時は体の調子が悪く小さい時は健康体です。額の禿げ上った所は善人の象徴です。

むつかしい顔をして居ますが只今苦吟中です。

花地柳壇

いのちある句を創れ

投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月十五日▼投稿先本社宛

本社 二月の会（大阪市）

2月7日 午後六時

会 場——大阪観光ホテル

小学校や幼稚園が感冒で学級閉鎖や休園が日々報ぜられている。カゼにやられたという柳人もすくなくない。ことしこそ全出席だとハリキッテいた人の顔が二三見えないのもカゼではないか、と心配申しあげている。

昨年秋の浅沼氏刺殺事件からこんどは深沢七郎作「風流夢譚」をめぐって、中央公論社嶋中氏方の女中さんを刺した事件など、言論の自由も命がけになったようである。われわれ柳人も4Bをもてば相当の皮肉もやりかねないが、人を傷つけるようなマネは絶対やらないし、そんな非情の句は選者がその常識によってボツにするであろう、人類を幸福にする文学こそ望ましいものである。

川柳は楽しい。柳人は明かるい。会場は和ごやかだ。こうしたムードの中で路郎主幹を中心に川柳するわれわれはまったく幸福である。

生々庵副主幹の柳話（本誌参照）は竜安寺の石庭をめぐって模型の美を求められた。

題がむずかしかったか、七題を通じていつもより六、七十句ばかり入選句がすくなかったようである。名手小川恒明氏が今月も二句天位。それから不朽洞賞は川柳のひき出しといわれる正本水客氏が獲得。

★三月から会場が変わります。本誌表紙の二にご注意ください。（F）

出席者—路郎・一三夫・圭井堂・舟遊・すゝむ・黙平・愛論・八郎・蕗路・鵜汀・水客・三司・紫香・多久志・太京・大丘子・繁雄・一瓢・文秋・好郎・求女・庸佑・大芽・一栄・清子・万的・いさむ・菁風・古方・柳宏子・正一・いわを・一ン十・東天紅・薫風子・潮花・酔升・たねお・〆女・生々庵・狂二・六竜子・徹也・恒明・梅里・阿茶・静馬・満秋・宏子・葭乃

兼題「三味線」 麻生路郎選

三味線も弾ける大学教授 なり 薫風子
家を買い朝から三味線習いだし 舟遊
三味線がひけ仕来たりの中で生き 菁風
売り食いがまだ三味線だけ残し 東天紅
遊蕩の俺が惚れたる妻の 三味 鵜汀
お隣りの三味は二上り置炬燵 三司
チョボの糸胸の底まで轟いて 求女
連れ弾きを涙で聴いている夫婦 愛論
まだ酔うてまへんと妓の撥さばき 多久志
糸に乗ってるつもりさ機嫌の旦那芸 生々庵
こわい程の気魄老妓の糸の冴え すゝむ
粋な音色で妾宅と閨建われ 清子
三味線へ男嫌いのばちさばき 宏子
腰かけて弾く三味線のラッパ節 三司
三味が来て明治の唄に座を取られ 狂二
爪弾きも梅雨が上った音で鳴り 潮花
嫁き遅れ三味線までも習い出し 薫風子
蔭の身の三味線だけは手離さず 好郎
三味線が音痴の前に来て座り 酔升
三味線が入って鯛の眼が光り 花乃子
三味線を気にして唄をど忘れし 阿茶
生きて行く三味へ先代からのつや 万的
紋のない宴会だから代理にし 圭井堂
三味線で生きる難かしさを言わず 水客
いろ気では売れず俗謡弾かされる 路郎

兼題「山 彦」 川村好郎選

救援へ山彦ばかり返事する 一ン十
山彦にひかれも一度強く呼び 東天紅
山彦がうつろに返る一人旅 正一
山彦のようとは新婚当座だけ 静馬
童心に戻り谺へまた叫ぶ 圭井堂
街から来た声を山彦はね返し 万的
山彦はまとも入陽に突き当り 水客
山彦かと思えばアホーと返って来 柳宏子
山彦もやっぱりげらげら笑い出し 生々庵
山彦も楽し樹氷を縫って来る 一三夫
山彦の素直さ少々もの足らず 一栄
道迷うてからの山彦かん高い 求女
若さ一ぱい山彦へぶっつける 柳宏子
山彦もバスとアルトで返って来 三司
銃先の山彦狂いなき凱歌 八九寸
山彦も精一ぱいの声で着き 泉洋
山彦にふっと孤独をかみしめる 多久志
山彦は湖底の村となる轟き 恒明
猟銃の山彦犬が駈けただけ 好郎

兼題「平 和」 丸尾潮花選

学園の平和を風邪に乱される 一鶴
小国なわりに平和に縁がなし いさむ
物好きの父で平和な飾り棚 万的
乏しきを分けていざこざない長屋 八九寸
平和口にして断乎と闘う気 紫香
農村は平和男女の噂のみ 鵜汀
オイと呼べばハイと近くにある平和 三司
みおっくしみんな茶の間で聞く平和 一瓢
世界地図平和がほしい国ばかり いさむ
左前になって平和な家となり 静馬
皆勤の年が続いている平和 柳宏子
吊し柿平和な村へぶら下り 紫香
全学連平和守れとなだれ込み 一三夫
取り戻した心の平和が恐しい すゝむ
平和なときばかりではなし大阪弁 水客
平和論唱えこぶしを握りしめ 酔升
平和国家に自衛隊がふえてゆく 水京
力には力平和は薄い薄いもの 柳宏子
麦の芽をつまんで平和口にする 三司
平和交渉うすぎみ悪う始めたり 一瓢
仲人が忘れられてるほど平和 圭井堂
平和にもなれて汚職の目にあまり 舟遊
妻の夢平和な日々にあきたらず 柳宏子
平和平和と赤い旗を振り 多久志
露路裏の平和へサンマ焼く煙 万的
ちょぼちょぼが揃う平和な会で済み 一栄
ストックの山が平和を喜ばず 文秋
牛の子も頃えて平和な開拓地 六竜子
爪を隠して揺さぶっている平和 黙平
母の笑み子の笑み平和なる夕餉 潮花

兼題「尻込み」 長谷川三司選

吠えられてご用無かったことにする 八九寸

本社句会 **全出席者**（二月現在）
愛論・圭井堂・恒明・文秋・一三夫・梅里・すゝむ・徹也・蕗路・鵜汀・東天紅・柳宏子・正一・阿茶・いさむ・静馬・六竜子・三司・満秋・多久志・舟遊・生々庵・古方・大芽・菁風・いわを・一栄・清子・庸佑・八郎・潮花・水京・〆女・薫風子・繁雄・宏子・葭乃

不朽洞賞受賞者
鵜汀・水客

天位受賞者
③恒明 1鵜汀・進之助・梨花・圭井堂・柳志・一三夫・水客・黙平・柳宏子・舟遊・万的

兄込みへ香具師は悉さる鵜をせばめ　一三夫
薄気味悪いザーボスなので兄込みし　多久志
謝まりに行く兄込みは蔵にする　一三夫
兄込み過ぎて親切が怒り出し　生々庵
兄込みがまた銭もうけにかしこ居　庸佑
兄込みがいちばん先に酔いつぶれ　静馬
兄込みを寄ってたかって祭り上げ　梅里
兄込みをしながら猪口を手放さず　水客
兄込みと違う女に弱うおます　潮花
兄込みを追うて街頭録音屋　紡毛
兄込みへ部下のどぎつい洒落がとび　万的
特売場兄込みなんぞしとられず　庸佑
兄込みをあほくさそうに言う女　万的
兄込みを引張り出して来た幹事　潮花
いざとなりゃ兄込みをする委員長　夢虹
兄込みをさせぬつもりの役をきめ　紫香
兄込みをしてもストに狩り出され　文秋
平服で来て会場へ入りそびれ　柳宏子
兄込みが出来ぬ気性を買われたり　宏子
兄込みをつれてっちりののれんわけ　阿茶
兄込みをしてたは二杯目ぐらいまで　舟遊
兄込みの出来ぬ言質をとられとり　柳宏子
兄込みへ小声で女眩をつき　三司

席題「エチケット」正本水客選

B・Gの今日は和服のエチケット　万的
エチケット守れば独り放っとかれ　柳宏子
エチケット満点少々肩がこり　すゝむ
日本に居れば日本のエチケット　薫風子
あほらしいけれどゆずったエチケット　潮花
エチケットでっしゃないかと女の眼　多久志
ライバルガ来てエチケットくずれて来　愛論
エチケット知らず平気で世を渡り　文秋
大臣になりゃ大臣のエチケット　満秋
一杯はすぐ返盃のエチケット　鵜汀
エチケットですと学生悪びれず　柳宏子
エチケット舞妓帰りの握手する　三司
エチケットやんわり振ってくれはった　梅里
おごらせることが女のエチケット　潮花
いやがられそうなことをいうにもエチケット　古方
エチケットわてで習うて羽田発ち　一三夫
くつろいだ気だがどこらのエチケット　一瓢
丸坊主のエチケット知る十七才　たねお
キッスぐらいするエチケットをこころえる　舟遊
手に取るだけは手にとって呉れと言う　水客

席題「ラッシュ」小川恒明選

自動車にのって遅刻をしたラッシュ　紫香
ラッシュアワー美人の手にふれ足にふれ　鵜汀
ラッシュアワー要領の良いのは坐ってる　水客
ラッシュは其のまま値上げするつもり　水客
ラッシュに出ラッシュに帰る安月給　たねお
ラッシュアワーで拾った恋が実を結び　清子
生活の為ならラッシュ言うとれず　いわを
焼け石に水ラッシュ時の時差出勤　庸佑
ラッシュアワーへすられる奴とする奴と　六竜子
救急車朝のラッシュ突き破る　六竜子
病む身にはラッシュアワーもなつかしく　正一
ラッシュアワーニンニクくさい奴の横　鵜汀
ラッシュ時は定員無視で押し込まれ　大丘子
月給が安いと思うラッシュなり　多久志
ラッシュからラッシュ而して勤続十五年　梅里
足ばかり見てラッシュの靴磨き　三司
ラッシュアワーへようまあ鋏よく動き　万的
都会人ラッシュの顔は別に持ち　水客
少々は歩けとラッシュ増車せず　圭丹堂
ラッシュアワー子供の絵にはない電車　万的

席題「インスタント」森下愛論選

インスタントの料理ばかりの共稼ぎ　阿茶
共稼ぎインスタント料理も亦たのし　繁雄
インスタントで始めのうちは嬉しがり　一栄
インスタントの味をブツキボーに褒め　一瓢
おかずだけインスタントでキャンプする　文秋
ラーメンと缶詰置いて妻出掛け　一栄
インスタントばかりで妻の留守の朝　万的
インスタント料理で娘嫁く気なり　正一
インスタント缶切一つで膳が出来　一三夫
インスタントほめて毎日食わされる　酔升
インスタント詰めて冬山行くリュック　狂二
インスタントに面くらうて油虫　一瓢
ママが留守インスタントで間に合わせ　庸佑
インスタント余った時間を駄べるなり　阿茶
隠居所は懐中しる粉のお湯わき　水客
即席の味を自慢の割烹着　六竜子
味気なくインスタントの夕餉すみ　多久志
インスタント人間いよいよ無精にし　舟遊
食卓はインスタントで寂し過ぎ　黙平
インスタント男世帯で困らない　紫香
文化とは悲しインスタントで夕餉すみ　多久志
インスタントのれんの味に歯がたたず　庸佑
インスタント女房に遊びやせがつき　恒明
三帖一間インスタントで手がはぶけ　愛論

（庸佑清記）

雑川　玉造支部句会（大阪市）

西出一栄報

幸福と火鉢に書いて消し書いて消し　正一
福貰うためのどろんこ道を行く　白柳
下駄はいて出直して来た残り福　梅志
盛り上る若芽に固き土割れる　柳宏子
おびえずに進む若さのおそろしき　清子
へべれけがまだ序の口や序の口や　晃
序の口で妓一さし先に舞い　一栄
にぎやかにトランプもめてばかりいる　章子
序の口で今年も日記つけ忘れ　清
結構な計画ですがと断られ　水京
計画を面喰わせた双生児　喜久堂
家計簿の計画酒を減せばよし　文秋

雑川　阿倍野支部句会（大阪市）

金丹文秋報

打つ人を笑うが如く釘曲る　庸佑
せっかちへ釘すねる事すねる事　文秋
ちゃっかり屋同士で財布出そうせず　一三夫
条々と笛の誘いに上る月　奈良子
お神楽の笛日本のよさを知る　白柳
プロローグお客の入りを読みながら　恒明
花束も一役かってプロローグ　義介
プロローグまだ飴買わん子が居るよ　唯義

食品と科学

食品と原資材・機械・包装の総合誌

3月号発売中　130円（〒12円）

特集
食用油脂の現状と将来
特殊栄養食品の法規と現状

講座
界面活性剤の利用（5）
香辛料香料について
薄膜包装の種類と特徴
バターチーズ・粉化機械

◇海外ニュース　◇特許ニュース
◇意匠ニュース　◇商標ニュース

〔展望台〕主食・罐詰・菓子・飲料・添加物

大阪市北区木幡町5/5
電(34)5231～4
食品と科学社
振替大阪6702番

値上りを知らぬは給料袋だけ　亜鈍
鉢巻をはずし握手で値が上り　裸牛
医療値上げお次は葬儀屋三部経　生薑
たまのスキ肉の値上り聞きながら　堰子

川雑　**淀川支部句会**（大阪市）

木村水堂選

トップ屋のネタを株屋がもうさぐり　生薑
町内のトップ屋いつも噂撒き　句念坊
トップ屋の髭は暮からのびたまま　東洋男
破れない壁にトップ屋つき当り　水堂
なに食わぬ顔でトップ屋火を借りる　一鶴
人間国宝芸ひとすじに生きたしわ　さざす
芸ひとすじに生きる女を哀れとも　六竜子
うとまれていてひとすじの母の愛　清生
ひとすじの涙に攻守処かえ　花村
青年へ日本の地図が狭う見え　幽谷
就職も一段落のリュック負い　若菜
青年の純情デモの先に立ち　香林

川雑　**にしなり支部句会**（大阪市）

後藤梅志選

やっぱり金だと革新陣営も思い　天真
金持てば持ったで苦労へりもせず　菁風
ほほかむりされて狸のあどけなし　舟遊
トラクター狸棲む星せもうする　六竜子
ロケットで月へ行きたい狸の子　清人
弁護士に委かしておけぬ年の暮　満潮
混雑の中へひっそり仏壇屋　夢虹
クリスマスよそ女給に生まれける　薫風子
狙う目はネコの目にそっくりだ　慎太郎
大臣を狙う政治が地につかず　すゝむ
何の夢見たかいびきがはたとやみ　唯義
いびきかいていたのに知っているテレビ　白柳
影二つもつれて宿の灯をくぐり　千尋
わが影をゆすぶってみる独り者　晃
おのが影かかえるように夜のくも　生薑
雲げかけたとこそとまま影になり　梅志

川雑　**京都支部句会**（京都市）

田中烏雀報

両方が意外なとこで飲みかわし　親生
サービスの意外へチップ包みかえ　喜山
いまはむなし意外なことを嘯やかれ　藻介
星仰ぐ枕の水を捨てに出て　紫蘭
白人の仰ぐ高さに仁王の目　千潮
好きという弱み仰げば瞳が曇り　喜由
われ一人高き孤独を鶴の脚　幸男
容姿端麗鶴に例えて叱られる　生薑
鶴が飛んでいるむこうの海でカニを取り　極堂
附箋付で戻った見積買う気らし　禎一
見直して見ても預金不足とある附箋　烏雀
附箋付の便り飯場の灯にかざし　礫
配達の子はもう行った朝の雪　和三郎
何事もなく降る雪何事もなく　甫三
お地蔵さんが雪帽子かぶって上加茂　ゆきら

川雑　**備前支部句会**（岡山県）

永松東岸報

くたびれた様な易者が居る場末　秋月
ネオンの灯昔場末であったとこ　正州
紙芝居場末の方で売れ残り　博
口八丁手八丁番組狂わせず　賤女
無念さは口八丁の妻を持ち　久米雄
口八丁にくまれ乍ら世話を焼き　草二
出稼ぎの父が帰って餅がつけ　誠司
運動員の手帳の票が二歩止り　流風
手帳から鉛筆がない電話口　耕水
涙など見せず頑固の保護願い　芳月
長男の頑固なとこがこそばゆし　東岸
頑固でも孫には別な顔を見せ　輝次
頑固さが淋しい余生にしてしまい　あやめ
時代には勝てず頑固も少し折れ　真奇
いうだけは言わして呉れと口八丁　幸仙
場末まで来て引返す夜鳴きそば　一声
横車押されて口八丁吃り　竜泉
旅役者場末の小屋で年を越し　伊久野
口八丁だんだん大きい口に見え　浄美
どうせ金儲け教授のなぐり書き　三六
ラーメンの恋も生れる場末の灯　胡風

川雑　**出雲支部句会**（出雲市）

尼緑之助報

わからない数字で倍増教えられ　重信
倍増論どこかおとぎの国のこと　礼次
友情は消えず気軽に会うてくれ　岬月
雪景色賞めて無心をそっと出し　稔久
愚民として倍増論に酔い　壮
着飾って来た面会の請求書　章二
商売に追いつめられた雪を蹴り　緑之助

川雑　**西宮支部句会**（西宮市）

若本多久志報

親の味かみしめ他人のめしを喰い　和三郎
肩巾があえば身丈が短かすぎ　啓子
雑踏の中でアベック巾をとり　満秋
運転手道きりきりの感のよさ　民子
割引をすれば粗雑な品に見え　舟遊
おっさんと気安くよんでまけさせる　鮎子
お手製とわかった味を賞めなおし　静馬
学生はいいなと思う五割引　すゝむ

川雑　**浜寺支部句会**（堺市）

川村好郎報

気苦労と見てくれはるもおもしろく　古方
気苦労を生甲斐とする嫁の出来　奈美
嫁がしてからも気苦労覗きに来　圭井堂
気苦労に明るく耐えて痩せたまい　生々庵
気苦労を知ってて課長を叱りつけ　好郎
気苦労をしばし忘れた笑い声　南宗
気苦労を生きる楽しみの中に入れ　徹也
なるようになると気苦労いたわられ　東天紅
気苦労は夏やせ以来そのまんま　雄声
落選はしたが誇りはまだ捨てず　文蝶
落選後借金取にお辞儀をし　貴山
お粗末なものと差出すとっておき　狂二

川雑　**米子支部句会**（米子市）

小西雄々報

値を上げず味村海苔は数減らし　車楽斎
味よりもマダムの顔で客をよび　無閑
テレビ料理味はあなたの匙加減　一机
味よりも美人はべらし飲むお酒　雄々
新婚の味が子供ができてさめ　一保
味などはおかまいなしの食べ盛り　節枝
この味を早く見せたい土産物　布堂
老い近く漸く夫婦の味を知り　漫人
色も香もそえて料理の味ができ　素瓢
味付けのよさは愛情ある証拠　福女
恋人に自炊の味をみてもらい　翠月
失恋へいつもの酒は味を消し　青香
夢にまで見た東京でモク拾い　まさよ
遠慮などするなと社長の如才なし　吾郎
元旦の掃き目も目出度い庭に立ち　幸子
夢のない話へ財産みな使い　詩郎
結納にもう泣けてくる老母なり　蛙眠子

川雑　**広島支部句会**（広島県）

平田越舟報

延着を見越して早く時を決め　一荷
ひざの二がパパリコロンケッまで上げ　美文
ほろ酔いになってほっぽっ打ち明ける　昌幸
延着した言い訳のように荷がくずれ　弓路

色紙短冊
書画用品
大阪成びし筆
丹青堂
電話 七二一・七二二

へそ曲り皆賛成が気に喰わん　月歩
延着の駅頭で待つ妻の午日進
コロッケで済ます二人に夢があり　てるじ
延着の客待つ風呂もさめかかり　洋児
へそ曲りがん固一徹五十年　うしを
へそ曲り同志で意見もつれて来　方川
延着へ有無を言わず猪口が責め　越舟
延着のみんなふり向くドアを開け　二三夫
新ジャガが出来てコロッケつくり膳　自然

川雑　**篠山支部句会**（兵庫県）

酒井ひか平報

進学の出来ぬ不満が悪に生き　万世
口数の少ない夫不満がり　澄代
ほんとうは不満言わぬと良い女房　美千代
貝のように閉じて不満の顔ならぶ　まさ子
この上の不満を妻に言わせるの　泰子
御不満の程もっともと先手うち　越山
妹の支度へ姉の苦情が出　みのる
がめつに生きて寡婦へ娘の不満　孝風
金出来てＰＴＡの役不足　左文字
不満だが妥結とストの度びに書き　永断
若の花休み不満の場所となり　凡志
不満並べる割りに肥える平社員　ひか平
風呂敷に不満包んで家出する　可住
防寒とは別にソテツの冬衣装　多津男
ボーナスが下着に消えた子沢山　万代
冬衣裳何かひとつは置き忘れ　みのる

川雑　**弓削支部句会**（岡山県）

直原七面山報

夜明けまで歩こう君と二人なら　賤女
パチンコに負けても甲斐性なしにされ　生薑
カレンダーを掛け替えて聞く除夜の鐘　ちとせ
開運を祈る年増の初詣　天仁坊
昇給と知って女房がまた孕み　杏朗
罪人が出るから事実話されず　たつよ
若いなあと思うよ氷にかぶりつき　周甫
振り袖を脱げばマンボの娘に変り　季宝
犬小屋に飾りをつけて子等の春　七面山
古毛糸を締めきれぬ手ではぐし　ごん太

川雑　**高知支部句会**（高知市）

大西迷窓選

子に晴着きせて新春寝るとする　利雄
雨はまだ止まず晴着は掛けたまま　かつみ

世話な方にらんでネクタイ締めてやり　久江
財産が目当ての世話が長うなり　古城
ばあちゃんのへそくり孫にもう借られ　利子
おばあちゃんのへそくり百円伸ばしてみ　酔雀
おばちゃんを姉さんと呼ぶ日の近く　呑洋
おばさんに言うなと伯父にパーで会い　博理
負けぬ気のばあちゃん財布をまだ握り　蟠蛇
優等の孫へばあちゃん達者なり　迷窓

明和研究会（西宮市）

樋口舟遊報

旅三日靴の汚れが目立つなり　薫風子
虹立ちし日を誦んじて旅終る　新子
一人旅寂しや小さき傷をする　三窓
帯固く旅の心が出来てくる　夢虹
前途まだあるんだなと左遷され　すゝむ
平凡な前途を妻に言い含め　杏花
口実ももっともらしい叩き売り　菁風
口実につれ出す犬が邪魔になり　舟遊
事故現場あんな鎖がプッと切れ　弦月
男舞貰くような笛になり　梅志
帽子買うつもりになって禿かくし　三舟
ベレー帽お地蔵さんが被って居　大丘子
旨くいった税務署に帽子忘れて来　湖州
普請場の声生き生きとヘルメット　幸
日々平穏にふるさとを忘れ勝ち　すゝむ
東奔西走の身故郷で申し受け　紋太
笛吹けど踊らぬ笛を吹きつづけ　柳志

杏林川柳会（大阪市）

中島生々庵報

一年のほこりはたいて旗を立て　一伸
日の丸も今日は連れあいお正月　珊枝郎
無事だった僕の墓標に感無量　太希志
衣食足って無事でない日が続く也　生々庵
無事な声只聞く丈に電話借り　阿茶
無事でよし無事でも困る嘱託医　野迷路
漬物の塩お隣りで借りる仲　小石
無事でさえ居ればと母はあきらめる　瑞川

帝化川柳会（大阪市）

谷沢好祐報

紙包み七分三分に眼を配り　風柳
紙吹雪浴びる夢見たミス候補　蒼芒
紙吹雪降らして舞台は十四日　孝夫
紙屑を集めて生きる大都会　雄水
紙屑が決め手になった大事件　晴暉
こんな顔がいい声駅のアナウンス　好祐
産ぶ声を聞いて煙草に火をつける　柳彰
あわてもの又お隣へ御帰還し　雅堂
募金かと思い黄色いママを避け　九紫
忘れものあわてて呼べば人違い　京一楼

富柳会句会（富田林市）

阿部柳太報

書留が来て下宿屋安堵する　川柳堂
郵便屋二人の恋をもうさとり　君枝
郵便が恋のつらさを忘れさせ　克忠
郵便がとりもつ縁も今は仇　善照
親展で郵便が来る女文字　増治郎
声立てて泣ける幸は母の膝　とも子
今日からは若奥様になった声　紀子
物好きに買って置場にちと困り　松本
物好きな俳句もやればダンスもし　ひろむ
物好きなよい歳をしてあんな娘と　八郎
君来いと言うので行けば二階借　とみえ
来客のみやげ気になる子の目つき　きはち
奥様をほめてお客は呑み続け　柳太
紋付で今日来客の佳き日柄　六竜子
来客を覗く障子に穴をあけ　一義
来客にホッとするような夫婦仲　美代
姉妹でいざこざがある板ばさみ　かずえ
ボーナスにひびく労資の板ばさみ　周一
子はねだる父はやらぬと板ばさみ　ふ志
浅沼追悼首相演説
大衆の先頭の声も消えました　摩天郎

コクヨ川柳句会（大阪市）

川口理休報

橋の下で夫婦結構住んでおり　ほたる
岡焼半分ちやほやされる若夫婦　亀心
家族より金庫の方を大事がり　正敬
新事務所金庫の位置も方による　北斗
この妓無口でしてと横取りし　理休
無口無口無口司会者だけしゃべり　柳波
無口だが長い手紙を彼は呉れ　留鈍

たけるべ川柳会（岡山県）

野々口美舟報

探しても呉れず割買い断られ　ちとせ
割箸の先は小鳥の春がすみ　一喜
学資金の為苦切ってる黒い指　青柳
指太くなって精農家と言われ　素古平
御機嫌で帰す折詰包みかえ　賤女
横やりがはいり酒宴の座がくずれ　香雪
爪そめた指に模造がよく光り　喜楽
二人だけ知る指切りの手の温み　美舟

酔よし　千日前大劇裏　TEL(63)二七一〇
味よし　アベノ橋近映地下　TEL(77)〇一四七
梅里の店
大萬

★大万川柳（第百二十一回）を募る
兼題「自慢」　路郎先生選
締切・三月十五日　五句以内
発表・三月廿一日　（店内掲示）
投句先　阿倍野区松崎町三ノ10　大万川柳会宛

柳樽室

★世の中はいよいよますます騒々しい。今こそ川柳の必要性が拡大されるゼネレーションだ。政治家も文化人も民衆もすべて川柳にとけこんでもらいたい。ユーモアのないところに平和はない。川柳のだいご味に徹すれば争ってストをやる必要もないし、ボタン一つ押して世界の終点に達する必要もないと思う。

★近ごろ十七才がよく問題になるが、私が川柳を作り出したのも、十七才頃からではなかったかと思う。この年頃は何かに刺戟を求める時代らしい。

★最近若い人たちの間に、ボッボツ川柳熱が首をもたげている。それが矢張り十七才前後であるので私はそれをたのもしく眺めている。この人たちへの指導はなかなか骨が折れるが、白紙でぶつかって来るだけに、骨折り甲斐はあると思う。しかし、食うために右翼へ入党するという、若者と違って川柳への入門は純真で人間的な欲求であるだけに、将来性があると思う。若人よ来れ、「川柳雑誌」は大手をひろげて君たちを迎え入れよう。

★山口、小森という二少年は、自分自身の生きる道すらハッキリつかんでいないのに、ああした大それた行動に出て、多くの人たちへ迷惑をかけてしまった。これは自分の言動へ反省のない証拠である。

★川柳家にも、思い上って自分のことしか考えない人が、時折出て来るが、そんな人は今までの例からいくと大てい花火線香式で、いつの間にか存在がなくなっている。それこそホントに川柳が判っていない証拠である。

★川柳への道は遠い。そこには訓練と反省があるばかりだ。訓練は表現技術の問題だ。反省は心の問題だ。自惚れはすべての点で行き止まりだ。

★「噴煙」を主宰している大島濤明君のお宅が三月四日の夜、全焼の厄に遇われた。何一つ取り出せなかったらしい。同情に堪えない。この災禍のため「噴煙」のすべての書類が烏有に帰したので噴煙会員の住所や出納関係が不明になって困惑されていられるとのこと、同誌の会員は至急下記へ連絡し旧に復してもらいたい。これは同誌からの依頼であるが、私からも特にお願いする。「熊本局私書函第四十五号川柳噴煙吟社」遙に一日も早く立直られんことを祈る。

（路郎）

▼ペンの散歩▲

▼本号は異色ある読み物をそろえた。味わっていただきたい。

▼三月は桃の節句。女流作家にご登場ねがって、〃よくぞ女に生まれける〃を特集した。蔓乃女史をはじめ才筆けんらんと咲き競う。

▼南信に花あり、いよいよ春近きを思わせる。

（一三夫）

★三月句会—　川雑支部

★宇部句会・5日（日）一時半、題、勇気・カロリー・咳・参考、所、沖ノ山厚生町一ノ一三上杉青山居、**★淀川句会**・10日（金）六時、題、新まい・付き合い・効め、所、十三西之町五丁目東淀川郵便局、**★玉造句会**・10日（金）七時、題、埋め合せ・ゼスチャー・定期券、所、市電玉造南百米大阪信用金庫、**★米子句会**・12日（日）一時、題、割勘・欲・報告所、米子公会堂和室、**★小松句会**・12日（日）七時、題、危険・参加・中年、所、日の出湯、**★明和研究会**・12日（日）一時、題、種・卒業・親類、所、阪神鳴尾駅東南二百米鳴尾公民館、**★阿倍野句会**・15日（水）六時、題、気まぐれ・マニア・美粧院、所、旭町二丁目金塚会館、**★京都句会**・16日（木）夕、題、竹・余白・虚病、所、四条縄手仲源寺、**★にしなり句会**・19日（日）六時、題、アメリカ・流れる・攪乱、所、玉出新町通一ノ一一後藤梅志居、**★南海電鉄句会**・23日（木）六時、題、優待券・底辺・見とおし、所、難波高架下親和クラブ、**★備前句会**・題、空気・本心・ショック・鱗・効め

（薫）

あなたの句帖が出来ました

★**路郎好みだけに、すばらしく気がきいています。句会でお使いになるなり、抜けた句の整理にお使いになれば、何冊かで、あなたの句集の礎稿が出来ます。又柳友への贈答に、句会の賞品にも最適です。是非ご利用下さい。**

一冊五五円（送料八円）
十冊五百円（送料五〇円）

若本多久志著　麻生路郎序　好評嘖々

川柳 **親ごころ子心**

価 150円
送費24円

「川柳雑誌」の川柳塔及び近作柳樽の中から親ごころ子心を詠った秀句を多年に亘って根気よく拾い蒐めたのが本書である。登載された柳人三百余名、集句二千余は絶と子の愛情が如何に深いものであるかを知ることの出来る、実に有意義な書である。

不朽洞会員のシンボル

美しいバッジを あなたの胸間に

一個二〇〇円
送費八円

発行所　大阪市住吉局区内 万代西5丁目25　**川柳雑誌社**　振替口座大阪75050　電話 大阪㊥6081

お待たせしました
最新刊の
東野大八著
風流 人間横丁
価二五〇円 送料三円
B6製 二五八頁

★異常な戦争にまき込まれ隻手となって帰還した著者のザックバランな人生批判が、その雄筆からほとばしるさまは凄い。まるで腕の冴えた板場の切れ味にも似ている。
★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編である。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。
★ご送金は川柳雑誌社振替口座七五〇五〇番をご利用が便利で安全です。（切手代用可）

麻生路郎著 好評嘖々
川柳鑑賞
川柳の味わい方・五百数十句
価二五〇円 送料三二円
上質B6版 二五〇余頁
あなたの書架にゼヒお備えを!!
川柳雑誌社
大阪市住吉区西万代西五丁目二五番地
振替口座大阪七五〇五〇
電話大阪(⑤)六〇八一

何を選んでいたゞくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのも 心にくい贈物かと存じます
一〇〇円から一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都3店に共通です
高島屋
大阪・なんば 東京・日本橋 京都・四条

パイロット グリーンセール
PILOT Green sale
2月15日▶4月20日
¥500から
奨学金をプレゼント／総額300万円を600名様に
パイロットスーパー

募集

課題吟募集

社用族（十句以内） 川村好郎選
味方（十句以内） 河村日満選
ウインク（十句以内） 森下愛論選
階段（十句以内） 丸尾潮花選
年季（十句以内） 津田麦太楼選
ハンドル（十句以内） 魚住満潮選
（毎月十五日締切）

毎号募集

近作柳樽（毎月十句以内） 麻生路郎選
川柳塔（毎月十句以内） 北川春巣選
文章（評論・研究・感想其他） 麻生路郎選
（毎月十五日締切）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼「近作柳樽」は一般作家の俳吟を募る。
▼「評與吟」は誰でも投句が出来る。「川柳塔」の投句は本誌会員に限る。

B判5号 毎月一回一日発行
川柳雑誌 三十六年 第三号
定価 七〇円
（送料四円）
平カ年 四四四円
一カ年 八四〇円
昭和三十六年二月廿五日印刷
昭和三十六年三月一日発行
（禁転載）
編集兼発行人 麻生幸二郎
大阪市住吉区西万代西五丁目二五番地
印刷人
大阪市住吉区西万代西五丁目二五番地
発行所 川柳雑誌社
電話大阪(⑤)六〇八一
振替口座大阪七五〇五〇
printed in Japan

昭和廿三年七月一日　第三種郵便物認可
昭和廿六年三月一日　発行（毎月一回一日発行）
編集兼発行人　麻生路郎
発行所　川柳雑誌社
大阪市住吉区内方代西五丁目二五番地　電話大阪(六〇八一)
振替口座大阪七五〇五〇番
定価七十円（送料四円）

サンヨー
サンヨートランジスタラジオ
超小型！
7石2バンド
高さ六・六糎・二巾・五糎・厚さ三・三糎…世界でいちばん小さい2バンドラジオ！感度・音質のよさも、世界の話題を集めるほどです
7SIP5型　6センチスピーカー
皮ケース・イヤホーン・11段アンテナ付
現金正価　一〇、五〇〇円（電池付）
三洋電機株式会社
輸出高トップ、世界78カ国で好評

一家そろつてホーライ党
廣東料理
蓬莱
大阪なんば・TEL ㊹551－2

麻生路郎先生著
川柳とは何か
—川柳の作り方と味い方—
送価　三五〇円　三二円
川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもろもろが十七音に圧搾された諷刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的であるその川柳がいかにして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。
取次所　川柳雑誌社
至文堂
東京都新宿区払方町27　振替東京29507

南紀　四国　淡路島
を結ぶ
■白浜口ゆき直通列車
第2きのくに……毎日　なんば発　12.30
週末準急くろしお…土曜ごと　〃　12.55
■新宮ゆき直通列車
準急なんき……毎日　なんば発　8.23
夜行直通……〃　〃　21.55
■淡路島洲本ゆき　毎日　4便
① 8.10　② 11.45　③ 14.15　④ 18.10
■四国小松島ゆき　毎日　4便
① 7.40　② 11.00　③ 14.00　④ 17.30
のりば
大阪
なんば
南海電車